

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第9集

藤の尾垣添遺跡 I

福岡県みやま市瀬高町山門所在遺跡の調査

— 集落編 1 —

2008

福岡県教育委員会

藤の尾垣添遺跡 I

福岡県みやま市瀬高町山門所在遺跡の調査

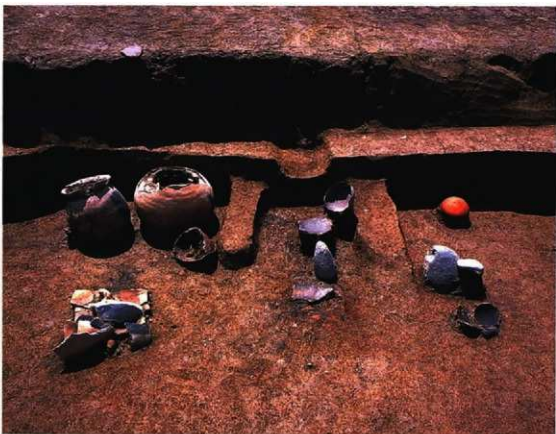
— 集落編 1 —



1 藤の尾垣添遺跡6、7区第1面全景（合成写真、上から、上が北）



1 7区26号竪穴住居跡（東から）



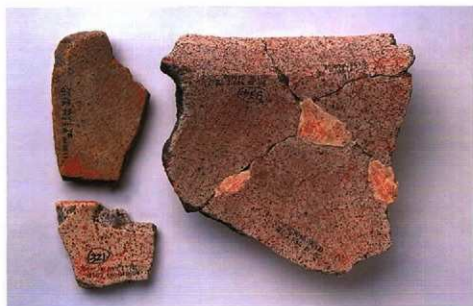
2 7区26号竪穴住居跡カマド（東から）



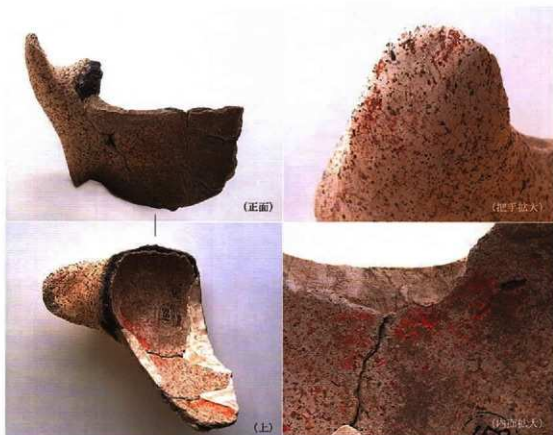
1 7区29号竖穴住居跡出土土器



2 7区33号土坑出土土器



3 7区出土朱付着土器



1 7区23号竪穴住居跡出土朱付着耳付鉢



2 6区出土破鏡

序

福岡県教育委員会では、平成13年度から独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（旧日本鉄道建設公団）九州新幹線建設局の委託を受けて、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。

本書は平成15・16年度に発掘調査を実施した、福岡県みやま市瀬高町（旧山門郡瀬高町大字）山門に所在する藤の尾垣添遺跡の記録で、九州新幹線建設工事に伴う藤の尾垣添遺跡調査報告の1冊目に当たります。

本遺跡は矢部川・人根川が育んだ緑豊かな田園地帯に位置しています。調査では弥生時代前期の集落跡及び中期の墓地、弥生時代後期～古墳時代中期の大規模な集落跡及び古墳時代後期の集落跡などを確認し、この地域の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

本書が文化財愛護思想の普及及び学術研究・生涯学習への一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査及び報告書の作成に当たりましては、関係諸機関や地元を始めとする多くの方々に御協力・御助言をいただきました。ここに深甚の謝意を表します。

平成20年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森山 良一

例 言

- 1 本書は平成 15・16 (2003・2004) 年度に九州新幹線鹿児島ルート建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県みやま市瀬高町 (旧山門郡瀬高町大字) 山門字垣添・北ノ前・峯ノ元・北池に所在する藤の尾垣添遺跡の記録で、九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告では第 9 集、藤の尾垣添遺跡調査報告書としては 1 冊目に当たる。
- 2 本遺跡調査報告書は 3 分冊とし、本書では集落編 1 として 6・7 区の甕棺墓群を除いた遺構・遺物、平成 20 年度は集落編 2 として 8～10 区の甕棺墓群を除いた遺構・遺物、平成 21 年度は墳墓編として 7・8 区の甕棺墓群を報告する予定である。
- 3 本遺跡の発掘調査・整理報告は独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
- 4 本遺跡は九州新幹線船小屋一大牟田間の埋蔵文化財調査第 3 地点に当たる。
- 5 本書に掲載した遺構写真は太庭孝夫・宮地聡一郎・高松智が、遺物写真は文化財保護課整理指導員北岡伸一が撮影した。なお、空中写真は九州航空株式会社及び東亜航空技研株式会社に委託した。
- 6 本書に掲載した遺構図は大庭の外、中間研志・秦憲二・今井涼子・高松・宮地・大庭が作成し、溝上潔・石井正典・今村孝男・堤弘光・檜崎俊平が補助した。なお、掲載した遺構図の方位は全て座標北 (G. N.) である。
- 7 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所において、濱田信也・大庭の指導の下に実施した。出土遺物の実測は調査担当者の外に、平田春美・櫛町陽子・田中典子・久富美智子・坂田順子・橋之口雅子・堀江圭子・若松美枝子・寺岡和子・栗林明美・中村洋子・中川真理子・中川陽子・林知恵が行った。製図は調査担当者の外に、豊福弥生・原カヨ子・江上佳子が行い、土山真弓美・安永啓子・山田智子・辻清子が補助した。
- 8 出土遺物・写真・図面はすべて九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所に保管している。
- 9 本書の執筆は、Ⅲ-2 を宮地、その他を大庭が行い、編集は橋之口の協力を得て、大庭が行った。

目次

巻頭図版
序
例言
目次
図版目次
挿図目次
表目次

I はじめに（大庭）	1
1 調査の経緯	1
2 調査の組織	5
II 位置と環境（大庭）	7
1 歴史的環境	7
（1）はじめに	7
（2）故村山健治氏について	7
（3）村山資料の紹介—その1—	7
III 発掘調査の記録	15
1 遺跡の概要（大庭）	15
（1）遺跡の概要	15
（2）当遺跡の既往の調査について	15
（3）調査の概要	16
（4）基本層序	18
2 6区検出遺構と遺物（宮地）	20
（1）概要	20
（2）竪穴住居跡	20
（3）土坑	32
（4）溝	34
（5）ピット・包含層出土土器	34
（6）石器・青銅製品	39
（7）小結	39
3 7区第1面の検出遺構と遺物（大庭）	40
（1）概要	40
（2）竪穴住居跡	40
（3）掘立柱建物跡	104
（4）土坑	104
（5）溝	109
（6）ピット・遺構面等出土土器	111
4 7区第2面の検出遺構と遺物（大庭）	113
（1）概要	113
（2）竪穴住居跡	113
（3）土坑	118

(4) 溝	131
(5) ビット出土土器	131
5 7区第3面の検出遺構と遺物(大庭)	133
(1) 概要	133
(2) 土坑	133
6 7区出土土製品、石器・石製品(大庭)	142
7 小結(大庭)	147

図版目次

巻頭図版 1	1. 藤の尾垣添遺跡 6、7区第1面全景(合成写真、上から、上が北)
巻頭図版 2	1. 7区 26号竪穴住居跡(東から) 2. 7区 26号竪穴住居跡カマド(東から)
巻頭図版 3	1. 7区 29号竪穴住居跡出土土器 2. 7区 33号土坑出土土器 3. 7区出土朱付着土器
巻頭図版 4	1. 7区 23号竪穴住居跡出土朱付着耳付鉢 2. 6区出土破鏡
図版 1	1. 6区東壁土層(西から) 2. 7区南 東壁土層(西から) 3. 7区中央 東壁土層(西から)
図版 2	1. 6区全景(南から) 2. 6区全景(上から、右が北) 3. 6区1号竪穴住居跡(東から)
図版 3	1. 6区1号竪穴住居跡カマド(東から) 2. 6区2号竪穴住居跡(西から) 3. 6区3号竪穴住居跡(北から)
図版 4	1. 6区4号竪穴住居跡(西から) 2. 6区5号竪穴住居跡(北東から) 3. 6区6号竪穴住居跡(南西から)
図版 5	1. 6区8号竪穴住居跡(南から) 2. 6区9号竪穴住居跡(南東から) 3. 6区10号竪穴住居跡(南東から)
図版 6	1. 6区11号竪穴住居跡、1号溝(東から) 2. 6区1号土坑(東から) 3. 6区2号土坑(北西から)
図版 7	1. 7区第1面全景(上から、右が北) 2. 7区第1面北全景(上から、右が北) 3. 7区第1面中央全景(上から、右が北)
図版 8	1. 7区第1面南全景(上から、右が北) 2. 7区12号竪穴住居跡(西から) 3. 7区13号竪穴住居跡(北西から)
図版 9	1. 7区13号竪穴住居跡出土状況(北西から) 2. 7区13号竪穴住居跡室内土坑上層出土状況(南東から) 3. 7区14号竪穴住居跡(北西から)
図版 10	1. 7区15号竪穴住居跡(北から) 2. 7区15号竪穴住居跡出土状況(北北東から) 3. 7区16号竪穴住居跡(南西から)
図版 11	1. 7区17号竪穴住居跡(南西から) 2. 7区18号竪穴住居跡(南東から) 3. 7区19号竪穴住居跡(北から)
図版 12	1. 7区21号竪穴住居跡(南東から) 2. 7区22号竪穴住居跡(南西から) 3. 7区22号竪穴住居跡出土状況(1)(北から)
図版 13	1. 7区22号竪穴住居跡出土状況(2)(北西から) 2. 7区23号竪穴住居跡(東から) 3. 7区24号竪穴住居跡(西から)

- 図版 14 1. 7区25号竪穴住居跡(東から) 2. 7区25号竪穴住居跡カマド(東から)
3. 7区25号竪穴住居跡出土状況(北東から)
- 図版 15 1. 7区26号竪穴住居跡(東から) 2. 7区26号竪穴住居跡カマド(東から)
3. 7区26号竪穴住居跡カマド(北東から)
- 図版 16 1. 7区27号竪穴住居跡(東から) 2. 7区27号竪穴住居跡カマド(1)(東から)
3. 7区27号竪穴住居跡カマド(2)(北東から)
- 図版 17 1. 7区28～30号竪穴住居跡(南から)
2. 7区29号竪穴住居跡(北西から)
3. 7区29号竪穴住居跡出土状況(東から)
- 図版 18 1. 7区29・30号竪穴住居跡(南東から)
2. 7区31・32号竪穴住居跡、11号土坑(東から)
3. 7区34・35号竪穴住居跡(南東から)
- 図版 19 1. 7区36号竪穴住居跡(北東から) 2. 7区37号竪穴住居跡(南から)
3. 7区38号竪穴住居跡(南西から)
- 図版 20 1. 7区1号掘立柱建物跡(上から、左が北)
2. 7区1号掘立柱建物跡P1上層(東南東から)
3. 7区1号掘立柱建物跡P2土層(東南東から)
- 図版 21 1. 7区3号土坑(南西から) 2. 7区4号土坑(南西から)
3. 7区5号土坑(東から)
- 図版 22 1. 7区7号土坑(東から) 2. 7区8号土坑(北から)
3. 7区9号土坑(西から)
- 図版 23 1. 7区10号土坑(北西から) 2. 7区11号土坑(東から)
3. 7区調査状況(1)
- 図版 24 1. 7区40号竪穴住居跡(東から) 2. 7区41号竪穴住居跡(南南西から)
3. 7区13・14号土坑(西から)
- 図版 25 1. 7区15号土坑(南から) 2. 7区16号土坑(南西から)
3. 7区17号土坑(南東から)
- 図版 26 1. 7区18号土坑(北東から) 2. 7区19号土坑(北から)
3. 7区20号土坑(北東から)
- 図版 27 1. 7区21号土坑(北東から) 2. 7区22号土坑(北から)
3. 7区23号土坑(東から)
- 図版 28 1. 7区24号土坑(北から) 2. 7区25号土坑(北から)
3. 7区26号土坑(西から)
- 図版 29 1. 7区27号土坑(北から) 2. 7区28号土坑(北東から)
3. 7区29号土坑(北東から)
- 図版 30 1. 7区30号土坑(東から) 2. 7区31号土坑(南から)
3. 7区第3面全景(北から)
- 図版 31 1. 7区32号土坑(西から) 2. 7区33号土坑(北東から)
3. 7区34号土坑(北から)
- 図版 32 6区1・5・8(1)号竪穴住居跡出土土器
- 図版 33 6区8号竪穴住居跡(2)、ビット出土土器、石器・石製品
- 図版 34 7区12・13(1)号竪穴住居跡出土土器
- 図版 35 7区13(2)・15～18号竪穴住居跡出土土器
- 図版 36 7区19・21・22(1)号竪穴住居跡出土土器

図版 37	7 区 22 (2)・23 ~ 25・26 (1) 号竪穴住居跡出土土器、 26 号竪穴住居跡カマド石製支脚
図版 38	7 区 26 (2)・27・28 号竪穴住居跡出土土器、27 号竪穴住居跡カマド内出土土器
図版 39	7 区 29 号竪穴住居跡出土土器 (1)
図版 40	7 区 29 (2)・30・31 号竪穴住居跡出土土器
図版 41	7 区 32・33・37 号竪穴住居跡、12 号土坑、4 号溝、第 1 面ビット、 第 1 面遺構面等 (1) 出土土器
図版 42	7 区第 1 面遺構面等 (2)、39 号竪穴住居跡、19・25 号土坑出土土器
図版 43	7 区第 2 面ビット、32・33 号土坑出土土器
図版 44	7 区壁土状土製品、土製品、石器・石製品、7 区調査状況 (2)

挿図目次

第 1 図	藤の尾垣添遺跡の位置	1
第 2 図	九州新幹線船小屋・大牟田間埋蔵文化財調査地点 (1/100,000)	3
第 3 図	みやま市瀬高町遺跡分布図	8
第 4 図	藤の尾垣遺跡図	9
第 5 図	村山資料出土地点図 (1/25,000)	11
第 6 図	村山資料 1 (縄文・弥生・古墳①) (1/4、1/3)	12
第 7 図	村山資料 2 (古墳②・古代①・中世) (1/3)	13
第 8 図	村山資料 3 (古代②) (1/3)	14
第 9 図	藤の尾垣添遺跡周辺図 (1/5,000)	17
第 10 図	6・7 区土層実測図 (1/60)	19
第 11 図	6 区遺構配置図 (1/200)	21
第 12 図	1 号竪穴住居跡実測図 (1/60、かまどは 1/30)	22
第 13 図	1 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	23
第 14 図	2 ~ 5 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	25
第 15 図	2 ~ 4 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	26
第 16 図	5・6 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1 は 1/4、他は 1/3)	27
第 17 図	6・8 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	29
第 18 図	8 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3)	30
第 19 図	8 号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3)	31
第 20 図	9 ~ 11 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	33
第 21 図	9 ~ 11 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	35
第 22 図	1・2 号土坑実測図 (1/30)	36
第 23 図	2 号土坑、1 号溝、ビット、包含層出土土器実測図 (1/3)	37
第 24 図	石器・青銅製品実測図 (1 ~ 3 は 1/2、4・5 は 1/1)	38
第 25 図	7 区遺構配置図 (1/200)	41・42
第 26 図	12・13 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	44
第 27 図	12 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	45
第 28 図	13 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3)	46
第 29 図	13 号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3)	47
第 30 図	13 号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3)	48
第 31 図	13 (4)・14 号竪穴住居跡出土土器実測図 (33・34・42・43 は 1/4、他は 1/3)	49
第 32 図	14・16 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	51

第33図	15号竪穴住居跡実測図 (1/60)	53
第34図	15・16号竪穴住居跡出土土器実測図 (22・23は1/4、他は1/3)	55
第35図	17・18号竪穴住居跡実測図 (1/60)	57
第36図	17号竪穴住居跡出土土器実測図 (19～22は1/4、他は1/3)	58
第37図	18・20号竪穴住居跡出土土器実測図 (7～11は1/4、他は1/3)	59
第38図	19・20号竪穴住居跡実測図 (1/60)	61
第39図	19号竪穴住居跡出土土器実測図 (16は1/4、他は1/3)	63
第40図	21・22号竪穴住居跡実測図 (1/60)	65
第41図	21号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3)	66
第42図	21号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (34～39は1/4、他は1/3)	67
第43図	22号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	69
第44図	23・24号竪穴住居跡実測図 (1/60)	71
第45図	23号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3)	72
第46図	23号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (12・13は1/4、他は1/3)	73
第47図	24・25号竪穴住居跡出土土器実測図 (17・18・33は1/4、他1/3)	75
第48図	25号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	77
第49図	26号竪穴住居跡・カマド・カマド支脚実測図 (1/60・1/30・1/4)	79
第50図	26号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3)	80
第51図	26(2)・27号竪穴住居跡出土土器実測図 (18は1/4、他は1/3)	81
第52図	27号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	83
第53図	28～30号竪穴住居跡実測図 (1/60)	85
第54図	28号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	87
第55図	29号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3)	88
第56図	29号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3)	89
第57図	29号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3)	90
第58図	29号竪穴住居跡出土土器実測図 (4) (27～29は1/6、他は1/3)	91
第59図	30～32号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	93
第60図	31・32号竪穴住居跡実測図 (1/60)	95
第61図	33・34・35号竪穴住居跡実測図 (1/60)	97
第62図	33・34・35号竪穴住居跡出土土器実測図 (15は1/4、他は1/3)	98
第63図	36・37号竪穴住居跡実測図 (1/60)	99
第64図	36～38号竪穴住居跡出土土器実測図 (5は1/4、他は1/3)	101
第65図	38号竪穴住居跡実測図 (1/60)	102
第66図	1号掘立建物跡実測図 (1/60)	103
第67図	3・4・6～8号土坑実測図 (1/30)	105
第68図	3・4・6・9・11・12号土坑出土土器実測図 (1・2・7・20～24は1/4、他は1/3)	106
第69図	9～12号土坑実測図 (1/30)	107
第70図	2～4号溝実測図 (1/30)	109
第71図	3・4号溝出土土器実測図 (2は1/4、他は1/3)	110
第72図	7区第1面ビット、遺構面等出土土器実測図 (1～5は1/4、他は1/3)	112
第73図	39・40号竪穴住居跡実測図 (1/60)	115
第74図	39号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	116
第75図	40・41号竪穴住居跡出土土器実測図 (5・6は1/4、他は1/3)	117
第76図	41号竪穴住居跡実測図 (1/60)	118

第77図	13～17号土坑実測図(1/30)	119
第78図	14～19・21号土坑出土土器実測図(1～4・8は1/3、他は1/4)	121
第79図	18～22号土坑実測図(1/30)	123
第80図	22・24～26・28～31号土坑出土土器実測図 (1～4・14・15・17～20・27・29・30は1/3、他は1/4)	125
第81図	23～25号土坑実測図(1/30)	127
第82図	26～29号土坑実測図(1/30)	129
第83図	30・31号土坑実測図(1/30)	130
第84図	5号溝実測図(1/30)	131
第85図	5号溝・7区第2面ビット出土土器実測図(4は1/6、15・16は1/4、他は1/3)	132
第86図	32・33号土坑実測図(1/40、1/30)	135
第87図	32号土坑出土土器実測図(13は1/6、他は1/4)	136
第88図	33・34号土坑出土土器実測図(1/4)	137
第89図	34号土坑実測図(1/30)	138
第90図	土製品実測図(1/2)	142
第91図	石器・石製品実測図(1)(1～14は2/3、15～20は1/2)	143
第92図	石器・石製品実測図(2)(21は2/3、他は1/2)	145

表目次

第1表	九州新幹線鹿児島ルート船小屋・新八代間福岡県内埋蔵文化財調査地点一覧	2
第2表	村山資料観察表①	10
第3表	村山資料観察表②	14
第4表	6区出土土器・青銅器製品一覧表	39
第5表	27号住居跡カマド出土碳計測表	82
第6表	『藤の尾垣添遺跡Ⅰ』掲載土器類一覧(1)	138
	『藤の尾垣添遺跡Ⅰ』掲載土器類一覧(2)	139
	『藤の尾垣添遺跡Ⅰ』掲載土器類一覧(3)	140
	『藤の尾垣添遺跡Ⅰ』掲載土器類一覧(4)	141
第7表	7区出土土製品・石器・石製品一覧表	146
第8表	『藤の尾垣添遺跡Ⅰ』掲載石器・石製品・青銅製品一覧	147

I はじめに

1 調査の経緯

九州新幹線(鹿児島ルート)は、「国民経済の発展及び国民生活領域の拡大並びに地域の振興を図るため」に「全国新幹線鉄道整備法」に基づき建設される新幹線鉄道で、福岡市(JR博多駅)から熊本市・川内市を經由して鹿児島市(JR鹿児島中央駅)に至る、工事延長249 kmの路線である。このうち、JR新八代駅～JR鹿児島中央駅間(127.6 km)は平成16年3月13日に部分開業しており、新たな産業の立地や観光産業の振興等に寄与している。

福岡県教育委員会（以下、「県教委」という。）

が実施した、九州新幹線建設に係る埋蔵文化財取扱協議等の経緯については、山門前田遺跡報告書（大庭孝夫・坂元雄紀編 2006『山門前田遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第3集 福岡県教育委員会p.1・2）で詳述しているため省略し、本書では当遺跡に関わる調査の経緯のみ取り上げる。

藤の尾垣添遺跡は、福岡県みやま市瀬高町(旧山門郡瀬高町大字)山門字垣添・北ノ前・峯ノ元・北池に所在する。新幹線工事区分では当遺跡大半が連続して調査を行った、山門前田遺跡・山門北池遺跡と同じ瀬高南工区で、北端部分(10区)のみ小川柳ノ内遺跡(第2地点)と同じ瀬高中工区となる。

瀬高南工区で発掘調査を行った遺跡としては、北から順に藤の尾垣添遺跡（第3地点）・山門北池遺跡（第4-A地点）・山門前田遺跡（第4-B地点）・松田掛畑遺跡（第4-C地点）の4ヶ所である（地点名は第2図・第1表と対応）。松田掛畑遺跡は用地解決が他の3遺跡と比べて遅れたため、平成17年度に本調査を実施し、本年度報告予定である。当遺跡・山門北池遺跡・山門前田遺跡については、本調査を平成14～16年度に連続して行ったため、調査区割・遺構番号等重複がないよう留意した。この区割りとは圃場整備後の現在の道路・水路を基準に、県道本吉・小川線を挟んで南から0～10区の計11区に区分けした（第9図）。0～2区は山門前田遺跡、3～5区は山門北池遺跡、6～10区は藤の尾垣添遺跡となる。

本来なら遺跡ごとに新たに区番号を付与すべきであるが、当遺跡を含めた3遺跡は、当初の想定外となる多くの遺構・遺物を検出し、かつ調査期間の制約もあったため、同時並行で当遺跡と山門北池遺跡、また遺跡内各区の調査を複数の担当職員で実施したため、調査段階で重複を避けることを優先した。このため、本書においても調査段階の区分けを重視し、当初のままの区・遺構面ごとに報告する。さらに区割りと同じ理由で、調査段階では遺構番号も山門前田遺跡・山門北池遺跡からの通し番号に使用しが、整理報告段階で遺構番号を新たに1から番号を付け直している。なお、ビットは煩雑となるため、通し番号のままである。

本書は集落編1として6・7区の甕棺墓群を除いた遺構・遺物を、平成20年度は集落編2として8～10区の甕棺墓群を除いた遺構・遺物を、平成21年度は墳墓編として7・8区の甕棺



第1図 藤の屋垣添遺跡の位置

基群及び自然科学分析・まとめを報告する予定である。

当遺跡に関わる直接的な調査の経緯としては、県教委では九州新幹線建設に伴う最初の発掘調査となった、みやま市高田町海洋横馬場遺跡の調査を平成13年11月から実施してきたが、みやま市瀬高町山門地区の用地買収がほとんど終了した、平成14年11月5～7日に秦塞二を担当とする確認調査を行った。7～10区は用地買収の遅れのため6区のみが対象となったが、ビットと集落を区切る旧河川の存在を確認している。山門前田遺跡調査中となる、翌年の平成15年5月2日に用地買収が終了した8・9区の確認調査を大庭が担当して行った。9区では溝及び堅穴住居跡、8区では複数の堅穴住居跡及び土坑を検出した。なお、7区は当時、水路に囲まれていたため、重機の進入路が確保できず確認調査はできなかったが、南北の調査区である8区・6区の確認調査の結果及び瀬高町教育委員会が実施した当遺跡1次調査（6～7区間：Dトレンチ、7～8区間：Cトレンチ）の成果から、7区にも堅穴住居跡や甕棺墓などが存在することは確実であったため、7～9区の本調査を実施することで回答及び協議を行った。

また、10区については、同年の平成15年12月10・12・15～18・24日に瀬高北・中工区のほぼ全域を対象とした確認調査の中で案が担当で行った。調査結果としては、県道本吉・小川線北30m範囲の厚い表土・客土下で遺構を検出し、集落の北端を確定できた。なお、この調査では県道北130mほどを最高所とする返済川が形成した自然堤防を確認できたが、県道北側はいずれも表土下1mほどで砂層に至る。このことは、県道北30mの範囲でも砂層上の灰褐色粘質土で遺構を検出したことや、県道南は谷部である7区南を除き、表土下1mまではいずれも粘質土で構成されることから、県道北30m以北は返済川の氾濫源であった可能性が高い。

本調査の経過としては、平成15・16年度に行った当遺跡調査経緯の全てを以下で記述する。

山門北池遺跡調査中の平成15年12月3日から8区の表土剥ぎを開始し、それが終了した18日から6区の表土剥ぎを行い、25日には終了した。8・9区間の水路付け替え工事を先行して

地区	工事内容	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	調査長 (m)	調査年度	報告年度	調査回数 番号	備考
1	瀬高北	堀切ノ一遺跡	みやま市瀬高町坂田	4,480	1,107	H16	H17	4回	調査終了
2	瀬高中	小川町ノ内遺跡	みやま市瀬高町小川・下坂田	5,860	5,300	H16・17	H18・19	7・8回	調査終了
3	瀬高南	藤ノ尾前遺跡	みやま市瀬高町山門	3,360	5,500	H15・16	本番 H19～21	9回	調査終了
4-4	瀬高南	山門北池遺跡	みやま市瀬高町山門		1,230	H15	H18	5回	調査終了
4-5	瀬高南	山門前田遺跡	みやま市瀬高町山門・松田	6,340	1,175	H14・15	H17	3回	調査終了
4-C	瀬高南	松田前遺跡	みやま市瀬高町松田		360	H17	H19	10回	調査終了
5	高田田尻	高田田尻遺跡	みやま市高田町高田	4,200	2,250	H13～15	H16・17	1・2回	調査終了
6	高田田尻	高田田尻遺跡	みやま市高田町高田		0				遺跡なし
7	高田丁		みやま市高田町上郷田	3,300					遺跡なし
8	松田丁	上郷田池遺跡	みやま市高田町上郷田	3,520	560	H16	H17	高田町7回 松田町2回	高田町調査
9	松田丁	上郷田池遺跡	みやま市高田町上郷田	6,000	870	H16	H17	松田町8回	高田町調査
10	松田丁		みやま市高田町上郷田	3,300					遺跡なし
11	松田丁		大牟田市大字宮崎	5,200					遺跡なし
12	松田丁	松田池古墳群	大牟田市大字宮崎	4,900					遺跡なし
13	松田丁	松田池古墳群	大牟田市大字宮崎	8,400					遺跡なし
14	松田丁	2/3/4/5/6/7/8/9/10/11/12/13/14/15/16/17/18/19/20/21/22/23/24/25/26/27/28/29/30/31/32/33/34/35/36/37/38/39/40/41/42/43/44/45/46/47/48/49/50/51/52/53/54/55/56/57/58/59/60/61/62/63/64/65/66/67/68/69/70/71/72/73/74/75/76/77/78/79/80/81/82/83/84/85/86/87/88/89/90/91/92/93/94/95/96/97/98/99/100/101/102/103/104/105/106/107/108/109/110/111/112/113/114/115/116/117/118/119/120/121/122/123/124/125/126/127/128/129/130/131/132/133/134/135/136/137/138/139/140/141/142/143/144/145/146/147/148/149/150/151/152/153/154/155/156/157/158/159/160/161/162/163/164/165/166/167/168/169/170/171/172/173/174/175/176/177/178/179/180/181/182/183/184/185/186/187/188/189/190/191/192/193/194/195/196/197/198/199/200/201/202/203/204/205/206/207/208/209/210/211/212/213/214/215/216/217/218/219/220/221/222/223/224/225/226/227/228/229/230/231/232/233/234/235/236/237/238/239/240/241/242/243/244/245/246/247/248/249/250/251/252/253/254/255/256/257/258/259/260/261/262/263/264/265/266/267/268/269/270/271/272/273/274/275/276/277/278/279/280/281/282/283/284/285/286/287/288/289/290/291/292/293/294/295/296/297/298/299/300/301/302/303/304/305/306/307/308/309/310/311/312/313/314/315/316/317/318/319/320/321/322/323/324/325/326/327/328/329/330/331/332/333/334/335/336/337/338/339/340/341/342/343/344/345/346/347/348/349/350/351/352/353/354/355/356/357/358/359/360/361/362/363/364/365/366/367/368/369/370/371/372/373/374/375/376/377/378/379/380/381/382/383/384/385/386/387/388/389/390/391/392/393/394/395/396/397/398/399/400/401/402/403/404/405/406/407/408/409/410/411/412/413/414/415/416/417/418/419/420/421/422/423/424/425/426/427/428/429/430/431/432/433/434/435/436/437/438/439/440/441/442/443/444/445/446/447/448/449/450/451/452/453/454/455/456/457/458/459/460/461/462/463/464/465/466/467/468/469/470/471/472/473/474/475/476/477/478/479/480/481/482/483/484/485/486/487/488/489/490/491/492/493/494/495/496/497/498/499/500/501/502/503/504/505/506/507/508/509/510/511/512/513/514/515/516/517/518/519/520/521/522/523/524/525/526/527/528/529/530/531/532/533/534/535/536/537/538/539/540/541/542/543/544/545/546/547/548/549/550/551/552/553/554/555/556/557/558/559/560/561/562/563/564/565/566/567/568/569/570/571/572/573/574/575/576/577/578/579/580/581/582/583/584/585/586/587/588/589/590/591/592/593/594/595/596/597/598/599/600/601/602/603/604/605/606/607/608/609/610/611/612/613/614/615/616/617/618/619/620/621/622/623/624/625/626/627/628/629/630/631/632/633/634/635/636/637/638/639/640/641/642/643/644/645/646/647/648/649/650/651/652/653/654/655/656/657/658/659/660/661/662/663/664/665/666/667/668/669/670/671/672/673/674/675/676/677/678/679/680/681/682/683/684/685/686/687/688/689/690/691/692/693/694/695/696/697/698/699/700/701/702/703/704/705/706/707/708/709/710/711/712/713/714/715/716/717/718/719/720/721/722/723/724/725/726/727/728/729/730/731/732/733/734/735/736/737/738/739/740/741/742/743/744/745/746/747/748/749/750/751/752/753/754/755/756/757/758/759/760/761/762/763/764/765/766/767/768/769/770/771/772/773/774/775/776/777/778/779/780/781/782/783/784/785/786/787/788/789/790/791/792/793/794/795/796/797/798/799/800/801/802/803/804/805/806/807/808/809/810/811/812/813/814/815/816/817/818/819/820/821/822/823/824/825/826/827/828/829/830/831/832/833/834/835/836/837/838/839/840/841/842/843/844/845/846/847/848/849/850/851/852/853/854/855/856/857/858/859/860/861/862/863/864/865/866/867/868/869/870/871/872/873/874/875/876/877/878/879/880/881/882/883/884/885/886/887/888/889/890/891/892/893/894/895/896/897/898/899/900/901/902/903/904/905/906/907/908/909/910/911/912/913/914/915/916/917/918/919/920/921/922/923/924/925/926/927/928/929/930/931/932/933/934/935/936/937/938/939/940/941/942/943/944/945/946/947/948/949/950/951/952/953/954/955/956/957/958/959/960/961/962/963/964/965/966/967/968/969/970/971/972/973/974/975/976/977/978/979/980/981/982/983/984/985/986/987/988/989/990/991/992/993/994/995/996/997/998/999/1000/1001/1002/1003/1004/1005/1006/1007/1008/1009/1010/1011/1012/1013/1014/1015/1016/1017/1018/1019/1020/1021/1022/1023/1024/1025/1026/1027/1028/1029/1030/1031/1032/1033/1034/1035/1036/1037/1038/1039/1040/1041/1042/1043/1044/1045/1046/1047/1048/1049/1050/1051/1052/1053/1054/1055/1056/1057/1058/1059/1060/1061/1062/1063/1064/1065/1066/1067/1068/1069/1070/1071/1072/1073/1074/1075/1076/1077/1078/1079/1080/1081/1082/1083/1084/1085/1086/1087/1088/1089/1090/1091/1092/1093/1094/1095/1096/1097/1098/1099/1100/1101/1102/1103/1104/1105/1106/1107/1108/1109/1110/1111/1112/1113/1114/1115/1116/1117/1118/1119/1120/1121/1122/1123/1124/1125/1126/1127/1128/1129/1130/1131/1132/1133/1134/1135/1136/1137/1138/1139/1140/1141/1142/1143/1144/1145/1146/1147/1148/1149/1150/1151/1152/1153/1154/1155/1156/1157/1158/1159/1160/1161/1162/1163/1164/1165/1166/1167/1168/1169/1170/1171/1172/1173/1174/1175/1176/1177/1178/1179/1180/1181/1182/1183/1184/1185/1186/1187/1188/1189/1190/1191/1192/1193/1194/1195/1196/1197/1198/1199/1200/1201/1202/1203/1204/1205/1206/1207/1208/1209/1210/1211/1212/1213/1214/1215/1216/1217/1218/1219/1220/1221/1222/1223/1224/1225/1226/1227/1228/1229/1230/1231/1232/1233/1234/1235/1236/1237/1238/1239/1240/1241/1242/1243/1244/1245/1246/1247/							
15	大牟田 S T	白銀川東岸	大牟田市大字松本	3,360			H19	10回	調査終了
16	松本	松本下内遺跡	大牟田市大字松本	1,300	1,000	H18			調査終了
17	松本	松本土居前遺跡、貝塚遺跡	大牟田市大字松本	2,240					遺跡なし
18	松本		大牟田市大字松本						遺跡なし
19	松本		大牟田市大字松本	896					遺跡なし
20	松本	出口古墳群	大牟田市大字吉郷	5,000					遺跡なし
21	松本		大牟田市大字吉郷	5,400					遺跡なし
22	松本		大牟田市大字松本	896					遺跡なし



第2図 九州新幹線船小屋・大牟田間埋蔵文化財調査地点 (1/100,000)

実施する新幹線工事工程に合わせ、年が明けた平成16年1月5日からは9区の表土剥ぎを始め、13日から9区の遺構検出を行った。調査は水路西側の南北に細長い部分から遺構検出を開始したが、遺構密度が高かつ遺構埋土と地山の区別が難しかったため、再度重機による掘削や一部人力で下げながら遺構検出を行った。南側の遺構検出がほぼ終了した、23日から9区南側遺構の掘削を開始した。なお、この日は九州大学西谷正名誉教授・瀬高町立図書館三池賢一参与らの来訪を得た。

1月30日で山門北池遺跡の調査が終了したため、2月より9区に作業員を本格的に増員し、調査を進めた。当遺跡調査工程は年度当初調査計画よりかなり遅れていたため、当遺跡と同時並行で調査を進めていた、みやま市高田町海津横馬場遺跡の調査が用地買収の遅れから一時中断したため、同遺跡調査担当の宮地及び作業員が、2月2日より6区の調査に加わった。6区は2日より遺構検出を始め、4日から遺構掘削を開始した。ほぼ掘り上がった25日に9区と合わせたヘリコプターによる空中写真撮影を行い、3月2日には6区の作業が全て終了した。

9区は2月に入ると調査が順調に進み、12日より9区南側の遺構実測を始め、9区がほぼ掘り終わった17日より9区北側の実測も開始した。同時に、16日より8区北側の遺構検出も開始した。8区は竪穴住居跡が多く、また弥生時代前～後期の土坑群や弥生時代中期の甕棺墓も同一面で検出したため、9区よりさらに遺構検出に手間取った。竪穴住居跡のみであった8区北側は19日より遺構掘削を開始したが、南側は明確に遺構検出できなかったため、3月9日に再度重機により全体を10cmほど下げた。なお、2月24～26日には福岡県と大韓民国文化財庁との日韓交流派遣事業で派遣された、大韓民国国立文化財研究所劉銀植学芸研究士が当遺跡の調査に加わり、遺跡調査方法についての意見を交換することができた。

3月3日から7区北側より第1面の表土剥ぎを行い、8区南側は10日より再度遺構検出、11日より遺構掘削を開始した。また、11日には8区中央より北側の遺構実測を始め、15日には9区の実測が終了した。翌16日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影終了後、8区南側の遺構実測及び甕棺墓・土坑の個別実測を開始し、年度末の31日まで遺構実測を引き続き行った。

平成16年度は4月6日より調査を開始した。8区の甕棺墓を中心とした遺構実測を行うと同時に、12日から作業員が入って7区第1面北側の遺構検出を行い、14日から遺構掘削を開始した。8区は28日に調査が終了したが、8・9区間の既設水路撤去中の5月27日に水路下より甕棺墓3基を新たに発見したため、翌28日に甕棺の実測・取り上げを行った。また、7区北端より3m間は、既設水路付け替え工事に伴う仮設水路設置のため、調査を急ぐ必要があり、4月22日から第1面の遺構実測、実測終了後の28日に重機で第2面までの掘削を行い、5月6日には調査を終了させた。

7区第1面中央～南は遺構密度が高く、遺構検出が困難であったため、5月7日に再び重機で掘削し、遺構検出を行った。11日には、清水主輔教育次長、中原一憲総務部長の現場視察があった。また、17日より10区の調査を開始したが、遺構・遺物とほとんど検出できなかったため、27日に調査が終了した。25日に7区第1面・10区のラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行ったが、10区はうまく撮影できなかったため、27日に再度撮影を行った。25日から7区第1面南側の遺構実測を始め、27日に調査が終了した7区第1面北を重機で第2面まで掘り下げ、遺構検出・掘削を開始した。なお、7区第2・3面は7区中央より北で確認し、本来は第

1面が古墳時代後期、第2面が弥生時代前期～古墳時代中期の2遺構面であるが、後世の耕作による削平のため第1面調査時に全ての時代の遺構をほぼ検出できた。

6月2日には7区第2面北の遺構実測を開始し、11日には7区第1・2面の調査が終了した。7区は第2面下にも甕棺墓・土坑が存在する可能性があったため、12日に重機により全体的に掘り下げたところ、複数の土坑・甕棺墓を検出できたため、第3面として調査を行い、13日に7区のすべて調査が終了した。9日より9区調査時には町道の付け替えの許可が間に合わなかった、9区北の県道と町道間（9区北拡張区）の重機による表土掘削及び遺構検出、10日より遺構掘削を開始した。11日には清水小学校6年生12名及び教諭1名の見学があった。15日には遺構実測を始め、18日には9区北拡張区の調査を終え、当遺跡の調査が全て終了した。

2 調査の組織

発掘調査及び整理・報告書作成に至る間の関係者は以下のとおりである。

独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局

	[平成15年度]	[平成16年度]	[平成18年度]	[平成19年度]
局長	高山 博文	高山 博文 北川 隆	元木 洋	元木 洋
次長	伊神 英二	伊神 英二	関根 茂	関根 茂
用地第一課長	関根 茂	田中 等	高橋 秀幸	高橋 秀幸
用地第一課課長補佐	有屋田幸郎 木佐一正和	木佐一正和		
用地第一課担当係長	入江 万久	入江 万久	入江 万久 原野 和清	入江 万久 原野 和清
工事第三課長	石徳 博行	石徳 博行	北原 太一	北原 太一
工事第三課課長補佐	上野 登	上野 登 弓削 伸二	弓削 伸二	三輪龍四郎
工事第三課担当係長	橋本 順一	馬淵 善男 林 孝治	林 孝治	林 孝治
大牟田鉄道建設所長	渡邊 修	渡邊 修	長谷川正明	長谷川正明
担当副所長	那須 芳人	福田 聡	福田 聡 石津 範彦	江口 義次

福岡県教育委員会（教育庁総務部文化財保護課）

	[平成15年度]	[平成16年度]	[平成18年度]	[平成19年度]
総括	(発掘調査)	(発掘調査)	(整理)	(整理報告)
教育長	森山 良一	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教育次長	三瓶 幸夫	清水 圭輔	清水 圭輔	栢崎洋二郎
総務部長	清水 圭輔	中原 一憲	大島 和寛	大島 和寛
総務部副理事兼文化財保護課長			磯村 幸男	磯村 幸男

文化財保護課長	井上 裕弘	井上 裕弘		
副課長			佐々木隆彦	佐々木隆彦
参事兼課長技術補佐	川述 昭人	川述 昭人	池邊 元明	池邊 元明
	木下 修	木下 修	小池 史哲	小池 史哲
参事		新原 正典	新原 正典	新原 正典
参事兼課長補佐	久芳 昭文		安川 正郷	中窗 宏
課長補佐		安川 正郷		
参事補佐兼調査第一係長	小池 史哲	小池 史哲	小田 和利	小田 和利
庶務				
参事補佐兼管理係長	古賀 敏生			
管理係長		稲尾 茂	井手 優二	井手 優二
事務主査	宮崎 志行	宮崎 志行	野中 顯	
主任主事	末竹 元	石橋 伸二	淵上 大輔	淵上 大輔
	秦 俊二	末竹 元	柏村 正央	柏村 正央
			小宮 辰之	小宮 辰之
				野田 雅
調査・整理・報告				
参事補佐兼調査第二係長	中間 研志	中間 研志	飛野 博文	飛野 博文
参事補佐			濱田 信也	濱田 信也
主任技師	秦 憲二	秦 憲二	大庭 孝夫	今井 涼子
	今井 涼子	今井 涼子		一瀬 智
	宮地聡一郎	進村 真之		
	小澤 佳憲	宮地聡一郎		
	大庭 孝夫	大庭 孝夫		
技師		坂元 雄紀		
主任技師（併福岡県立アジア文化交流センター研究員）			宮地聡一郎	宮地聡一郎
九州歴史資料館主任技師				大庭 孝夫

調査及び整理期間中には、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局工事第三課・大牟田鉄道建設所の担当の方々、地元の瀬高町教育委員会文化財担当の三池賢一・鬼丸哲也・立石真二の各氏、字図や圖場整備関係の図面の入手においては瀬高町役場税務課・建設課、瀬高南BⅠ他工事を担当した鴻池・山九・九鉄・廣瀬特定建設工事共同企業体久積副所長をはじめとする工事事務所及び鍋田組の方々、また現場近隣の方々には発掘調査を進めるに当たって様々に配慮いただきました（肩書きは調査・整理当時）。

調査には地元を中心とする多数の方々が作業員として参加されました。調査は悪天候、悪条件の作業も伴い、作業員の皆様の御尽力なしには無事に調査を完了することはなかったと思います。ここに深甚の謝意を表します。

Ⅱ 位置と環境

1 歴史的環境

(1) はじめに

当遺跡周辺の地理的・歴史的環境については、平成17年度刊行の山門前田遺跡報告書（大庭孝夫・坂元雄紀編 2006『山門前田遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第3集 福岡県教育委員会 p.9～14）及び平成18年度刊行の山門北池遺跡報告書（大庭孝夫編 2007『山門北池遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第6集 福岡県教育委員会 p.7～20）の中で既に取り上げている。そこで、本書及び来年度刊行予定の『藤の尾垣添遺跡Ⅱ』では、地元の著名な郷土史家であった、故村山健治氏がみやま市瀬高町（旧山門郡瀬高町）内を中心に長年にわたって収集された資料（以下「村山資料」という。）の紹介を行いたい。

なお、村山資料は平成7年度に九州歴史資料館が夫人の村山トシ氏から寄贈を受けたもので、現在九州歴史資料館にて保管されている。主な寄贈資料は、みやま市瀬高町清水山周辺川土の旧石器時代の石槍及び縄文時代早期の礫器、女山出土の蔵骨器、山川町の九折大塚古墳出土の衣笠埴輪、その他参考資料93点がある。

今回はこの村山資料の中で、出土地点が明確な土器資料のみを掲載した。なお、来年度は同資料の石器・鉄器資料等を紹介する予定である。

(2) 故村山健治氏について

報告の前に、簡単ながら故村山健治氏の足跡の紹介を行いたい。なお、この文は村山健治『誰にも書けなかった邪馬台国』（1978年佼成出版社発行、現在絶版）から主に引用した。

故村山健治氏は、1915年に山門郡東山村（現みやま市瀬高町）に生まれ、旧制八女中学校（現福岡県立八女高等学校）卒業後、西日本鉄道・銀行に勤めのかたわら郷土史に取り組み、その間、発掘した遺跡は50ヶ所、古墳は100ヶ所、地質調査は400ヶ所、並びに発掘した遺物は約2万点、収集した古文書は約800冊にのぼる。また、邪馬台国山門説の立場で講演や執筆活動を精力的に行い、さらに瀬高町文化財専門委員を長年勤め、文化財啓蒙・保護活動に積極的に取り組む。主な著作物は先述した『誰にも書けなかった邪馬台国』、『堀古墳群』、『女山長谷古墳群』、『山門郡の遺跡』や多数の遺跡・古墳の報告書などの執筆・協力などの業績がある。

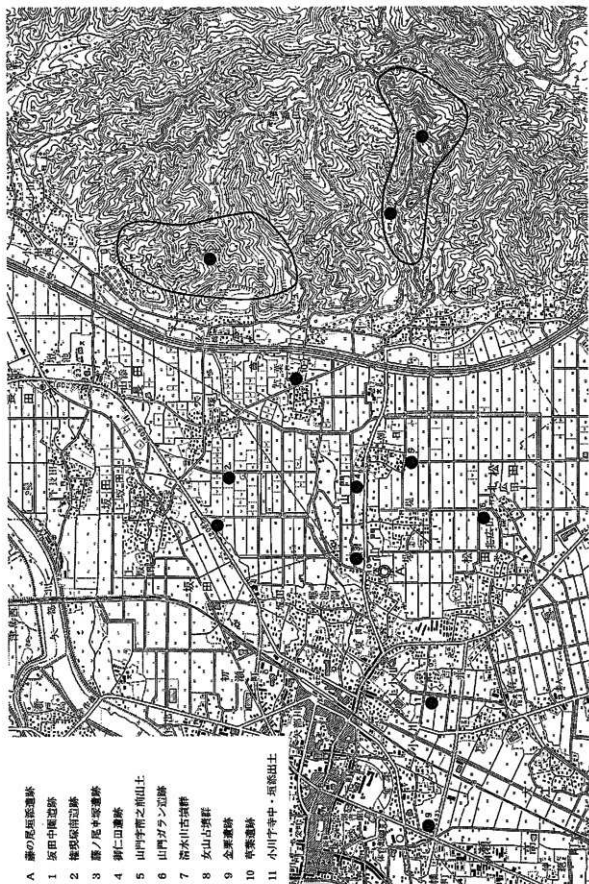
(3) 村山資料の紹介—その1—（第3～8図）

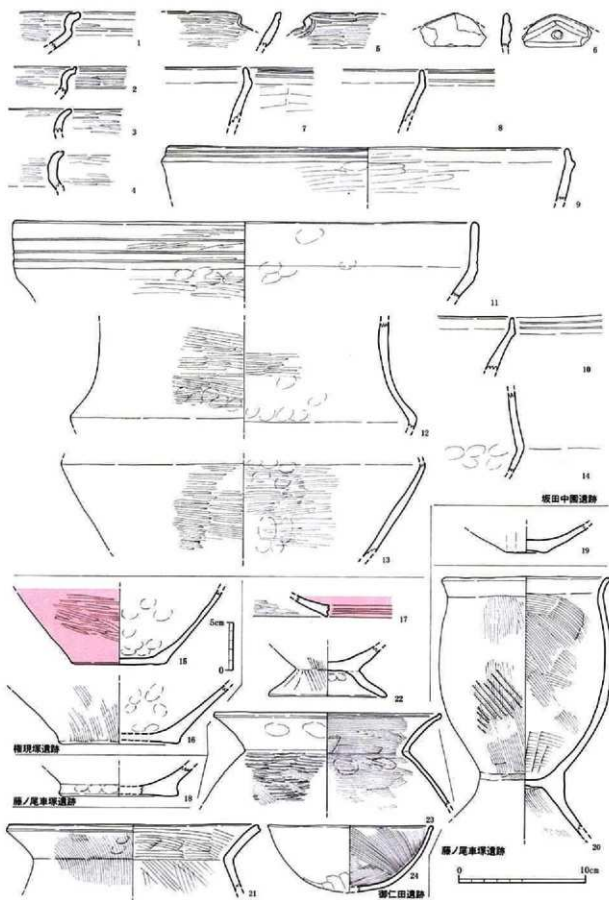
まず、第3・4図は村山氏が作成したみやま市瀬高町内の遺跡・遺物分布図（第3図）及び藤ノ尾周辺遺跡・遺物分布図（第4図）である。この第3・4図は、Ⅲ-1（p.15～19）の「遺跡の概要」で、当遺跡の既往の調査について取り上げる中で検討する。第5図は第6～8図掲載資料出土地点を国土地理院発行の1/25,000に落とした図である。

第6～8図は、先述したように村山資料における土器の中で出土地点が明確なものである。

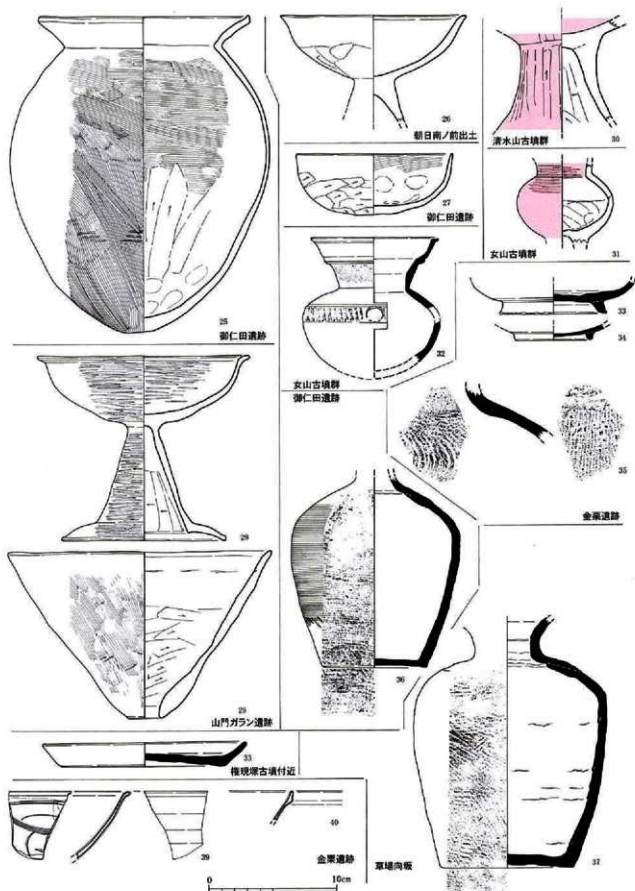
なお、土器資料の中でみやま市山川町の九折大塚古墳出土の衣笠埴輪については、既に紹介されているため省いた（佐々木隆彦 1995『山川町面の上1号墳の再検討』『九州歴史資料館論集』20集 九州歴史資料館 第8図・p.36）。掲載した各資料の詳細については、第2・3表の観察表を御覧

[illegible]

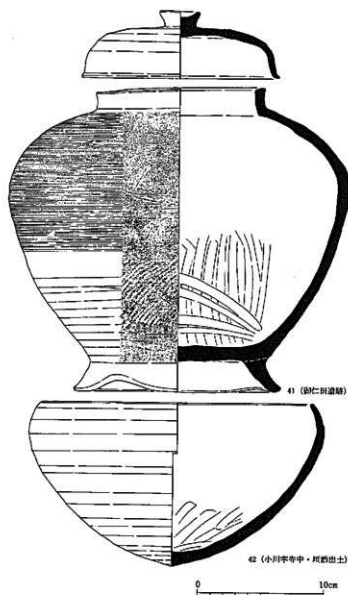




第6図 村山資料1 (縄文・弥生・古墳①) (1/4、1/3)



第7図 村山資料2 (古墳②・古代①・中世) (1/3)



第8図 村山資料3 (古代②) (1/3)

いただきたいが、主な資料のみ簡単に取上げたい。

まず、1～14は縄文時代後期末の著名な注口土器が出土した坂田中園遺跡の縄文時代晩期初頭～中頃の資料。遺跡周辺に当該期の大規模な集落が存在する可能性がある。15・17は権現塚古墳の南から出土した弥生時代中期後半の丹塗磨研土器。権現塚北遺跡では、当該期の甕棺墓・祭祀遺構を検出しており、権現塚古墳周囲には大規模な墓地が形成されていることを追認。23は畿内V様式系、25は布留系の甕。これらの外来系土器が出土した御仁田遺跡は古墳時代前期における有明海沿岸地域の交流の一拠点となる可能性がある。33～35・38～40は金栗遺跡出土。金栗遺跡では老司式軒丸瓦や中世前期の遺構群を確認しているため、本例もその関連資料となる。41は昭和48年6月に女山中の産女谷の東側斜面より出土した須恵器短頸壺と蓋のセットで、蔵骨器に使用されたもの。清水山から本例を含め蔵骨器が4個体これまでに出土しているようであり、清水山の古墳群内に位置する清水山西斜面の蔵骨器の様相は今後注目される。42は鉄鉢形須恵器鉢で、蔵骨器として使用された可能性がある、完形品の優品。

遺跡番号	遺跡番号	出土遺跡名	発掘名	種類	数量	土質	形状	色相	遺跡や出土の状況	備考
7-36	4	御仁田遺跡	鬼田	須恵器	壺	良	型削	灰褐色。外ドは灰かぶり	外はタタキのち粗い方角目。内部はタタキ。タタキはタタキナダ。内はタタキナダ。	
7-37	10	伏見遺跡	草間内坂	須恵器	壺	良	型削	灰褐色。外ドは灰かぶり	外は板平タタキのち粗い方角目。内部はタタキ。タタキはタタキナダ。内はタタキナダ。	一般物品番号 9500006
7-38	2	権現塚遺跡	権現	須恵器	鉢	良	型削	灰褐色。外ドは灰かぶり	外は板平タタキのち粗い方角目。内部はタタキ。タタキはタタキナダ。内はタタキナダ。	
7-39	9	金栗遺跡	金栗山土	白磁	碗	良	型削	灰褐色。外ドは灰かぶり	内は板平タタキのち粗い方角目。内部はタタキ。タタキはタタキナダ。内はタタキナダ。	大分県分館 9500007
7-40	9	金栗遺跡	金栗山土	白磁	碗	良	型削	灰褐色。外ドは灰かぶり	内は板平タタキのち粗い方角目。内部はタタキ。タタキはタタキナダ。内はタタキナダ。	大分県分館 9500008
8-41	8	女山古墳群	女山古墳群	須恵器	短頸壺	良	型削	灰褐色。外ドは灰かぶり	外は板平タタキのち粗い方角目。内部はタタキ。タタキはタタキナダ。内はタタキナダ。	一般物品番号 9500009
8-42	11	小川寺中・西遺跡	小川寺中・西	須恵器	鉢	良	型削	灰褐色。外ドは灰かぶり	外は板平タタキのち粗い方角目。内部はタタキ。タタキはタタキナダ。内はタタキナダ。	大分県分館 9500010

第3表 村山資料観察表②

Ⅲ 発掘調査の記録

1 遺跡の概要

(1) 遺跡の概要

藤の尾垣添遺跡は福岡県みやま市（旧山門郡瀬高町大字）山門字垣添・北ノ前・峯ノ元・北池に所在し、北側の返済川及び北東から南西方向に蛇行する旧河川が形成した自然堤防上に位置する。当遺跡は瀬高町教育委員会により既往の調査・報告が行なわれているため今回の調査は2次を敬える。

当遺跡は、大道端遺跡報告書（岡崎彦編 1977『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-XIV-』福岡県教育委員会）では、弥生時代前期～後期、平安時代後期の集落・墓地跡である北ノ前遺跡、また福岡県遺跡等分布地図（福岡県教育委員会 1978『福岡県遺跡等分布地図（大牟田市・柳川市・山門郡・三池郡編）』）及び全国遺跡地図（文化庁文化財保護部 1984『全国遺跡地図 福岡県』）では、弥生時代の散布地である北ノ前遺跡（県遺跡番号 790306）として登録・掲載されている。しかし、瀬高町教育委員会が昭和 61（1986）年に当遺跡 6-7 区・7-8 区間水路部分の発掘調査を実施し（1次調査）、その成果を藤の尾垣添遺跡として2分冊の報告書にまとめている（田中康信編 1988『藤の尾垣添遺跡』瀬高町文化財調査報告書第4集、田中康信編 1989『藤の尾垣添遺跡』瀬高町文化財調査報告書第5集）。この「藤の尾垣添遺跡」という遺跡名は、西に隣接する集落名「藤ノ尾」と小字名「垣添」を組み合わせたものであるが、本来の集落名は藤ノ尾であるため、「藤の尾垣添遺跡」という遺跡名は誤りである。しかし、今回遺跡名を変更することは更なる遺跡名の混乱を生じさせるため、瀬高町教育委員会により付与された遺跡名である「藤の尾垣添遺跡」のままで報告し、当遺跡を含めた遺跡群の総称としては「藤ノ尾垣添群」としたい。なお、この遺跡名称については、既に山門北池遺跡報告書（大庭孝夫編 2007『山門北池遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第6集 福岡県教育委員会 p.7～20 及び第2表）の中で区分していることを付け加えておく。

(2) 当遺跡の既往の調査について

まず、昭和 34（1969）年の土取り工事に伴う鏡山猛・村山健治・堤伝氏らによる調査や村山健治氏らによる表採・地表調査成果を1次調査以前とし、昭和 61（1986）年の瀬高東部地区圃場整備事業水路工事に伴う瀬高町教育委員会の調査を1次調査、平成 16・17（2004・2005）年の九州新幹線建設に伴う福岡県教育委員会の調査（本書）を2次調査とする。

1次調査以前

当遺跡周辺では昭和 20 年代から村山健治氏らを中心として、遺物の表採が行われてきた。昭和 34（1969）年に当遺跡周辺で大規模な土取り工事が行われ、村山健治氏らが溝や住居跡及び多量の遺物を発見したため、九州大学鏡山猛教授の指導のもとに部分的な発掘調査が行われた。検出遺構は弥生・古墳時代の堅穴住居跡のほか、東西に延びる大規模な溝を確認している（第4図）。溝は幅約 5 m、深さは約 1.7 m、総延長は約 100 m 以上で、溝は堅穴住居跡を囲むように内湾するため、鏡山氏らは環濠の可能性を考えたが、1・2次調査の成果からこの溝は当遺跡と山門北池遺跡の隔てる旧河川であった可能性が高い。さらにこの1次調査以前



1次調査 13・14号甕棺墓

図である。この図を見ると、この当時当遺跡から発見された甕棺墓は藤ノ尾車塚古墳の南東で10基程度、同古墳南西の畑や田の断面に数十基程度、同西側で2基を確認しているようである。

1次調査

1次調査は瀬高町教育委員会を調査主体として、昭和61年7月23日～9月2日に行われた。水路部分のみのトレンチ調査であったが（第9図）、弥生時代中期前半～後半の甕棺墓32基、古墳時代前期前半～中期前半、後期後半～7世紀前半の竪穴住居跡13棟を検出した。特に小児用甕棺墓である14号甕棺墓内から翡翠製勾玉（左上写真）、古墳時代前期前半の13号住居跡から石杵が出土したこと（左下写真）は、今回の調査で出土した内面朱付着土器及び朱付着耳付鉢との関係も含めて注目される。また、報告書には掲載・記述されていないものの、5・12・13号住居跡から内面に朱が付着した甕の小破片が8点ほど出土したようである（本田光子1997『内面朱付着土器』『庄内式土器研究Ⅷ』庄内式土器研究会 p153）。

以上の調査結果から、当遺跡は北東～南西方向に蛇行する旧河川右岸に沿って広がること、時代は弥生時代前期～7世紀前半までわたること、甕棺墓群は今回の調査成果を合わせると少なくとも200基以上にのぼることなどが判明している。

（3）調査の概要

I-1で先述したように、当遺跡は調査の便宜上、道路・水路で区分けした。当遺跡は県道本吉・小川線より南の6～9区及び県道北側の10区からなり（第9図）、遺跡の南北幅は現状で約240mを測る。東西幅は不明であるが、東は圃場整備及び九州新幹線建設に伴う確認調査



1次調査 13号住居跡石杵出土状態

より前の状況として、昭和29（1964）年の水道工事に伴い、藤ノ尾遺跡群杉ノ本遺跡付近の甕棺墓から副葬された鉄剣が発見されている。また、享保20（1735）年に当遺跡北の藤ノ尾車塚古墳傍らの畑より銅鏡が1面出土しているようであり、西谷正氏は甕棺墓から出土した可能性もないではないと指摘する。

加えて、村山健治氏作成の第4図藤ノ尾遺跡図は、村山健治『誰にも書けなかった邪馬台国』p100に掲載された藤ノ尾遺跡図の原

で確認した旧河川までとなる。当遺跡の北東には古墳時代中期の全長約55mを測る前方後円墳である藤ノ尾車塚古墳や弥生時代中期の甕棺墓群、古墳時代前期の集落を検出した藤ノ尾車塚遺跡、また第5図から享保20（1735）年に当遺跡北で鏡が1面出土したようである。

当遺跡北約250mに位置する小川柳ノ内遺跡との間は、返済川の氾濫源であったことが本新幹線建設工事に伴う確認調査から判明し

ている。また当遺跡南の山門北池遺跡との間には、最小幅 100 m ほどの旧河川が存在する（第 9 図）。

調査に当たっては、新幹線用地幅が 11.2 m、さらに調査区壁に傾斜を付けたため、実際の調査幅は 9 m 程度である。調査は平成 15 年度に 9→8 区、6 区、平成 16 年度に 7 区→9 区北拡張区、10 区というように、基本的には北→南方向で新幹線建設工事の優先順位に従って調査を進めた。6～10 区の合計の調査面積は 5,500 m² である。

6・7 区で検出した遺構は壘棺墓を除き、竪穴住居跡 41 棟、掘立柱建物跡 1 棟、土坑 33 基、溝 4 条、ピットなどで、遺物は弥生土器・土師器・須恵器・土製品・石器・石製品がパンケース 92 箱出土した。

なお、以下のⅢ-2～7 で壘棺墓を除く 6・7 区の検出遺構・遺物の説明を行うが、この文中内で使用される出土土器の分類・年代観については以下の文献を参照した。まず、弥生時代前期後半～末の土器については、中野充 1997『佐賀平野における弥生文化成立期の土器編年』『立命館大学考古学論集 1』立命館大学考古学論集刊行会、弥生時代後期～古墳時代前期の土器については、檀佳克編年（檀佳克 2005「1. 土器からみた、京田・深田遺跡の竪穴住居跡に関する位置づけ」『八女市南部地区県営岡場整備事業地内 埋蔵文化財調査報告書 1』八女市文化財調査報告書第 71 集 八女市教育委員会）及び蒲原宏行編年（蒲原宏行 1991『古墳時代初頭前後の土器編年—佐賀平野の場合—』『調査研究書』第 16 集』佐賀県立博物館・佐賀県立美術館、蒲原宏行 2003『佐賀平野における弥生後期の土器編年』『調査研究書』第 27 集』佐賀県立博物館・佐賀県立美術館）を、古墳時代後期の土師器については、重藤輝行編年（重藤輝行 2002『福岡県における古墳時代中期～後期の土師器』『古墳時代中・後期の土師器』第 5 回九州前方後円墳研究会発表要旨資料）を用いた。

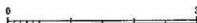
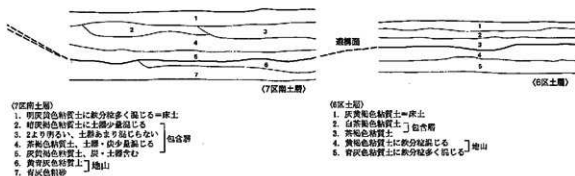
（4）基本層序（図版 1、第 10 図）

本書は当遺跡第 1 冊目の報告書として、6～10 区の基本層序とその検討、地形復元結果を掲載すべきであるが、現在 8～10 区の検出遺構・遺物は整理途上であり、遺跡形成過程が体系的に整理できていない。そのため、本書では今回の調査報告内容に関わる 6・7 区のみの基本層序の検討結果のみ掲載し、当遺跡全体の基本層序・地形復元については、平成 21 年度刊行予定の『藤の尾至添遺跡Ⅲ』の中で検討を行いたい。

当遺跡 6・7 区発掘調査前は水田が営まれおり、調査前の田面標高は 6 区 6.5 m、7 区は 6.6～6.7 m を測る。一方岡場整備前の田面標高は、6 区は 6.5 m、7 区は 6.47～6.49～6.43 m を測る。6・7 区基本層序は、第 10 図に北→南に順に 7 区（北・中・南）→6 区と図示した。

7 区北では、床土（1層）・耕作下の攪乱層（2層）下で、レンズ状堆積を示す 15 号竪穴住居跡覆土（3～6・8層）、第 1 面の地山（7層及び地山削り出しのベッド状遺構）、第 2 面の地山（9層）及び第 3 面の地山（10層）が堆積する。なお、第 3 面で検出した土坑や壘棺墓は第 2 面の地山である黄茶褐色粘質土（9層）から切り込むことが、黄茶褐色系粘質土が主体となる第 3 面の 32～34 号土坑埋土から判断でき、本来は第 1 面が古墳時代後期、第 2 面が弥生時代前期～古墳時代中期の 2 層であったと考えられる。

7 区中では、床土（1層）・耕作下の攪乱層（2・3層）下で、古墳時代後期末の 25 号竪穴住居跡覆土と床下掘り込み（5～7層）を確認した。このように古墳時代後期の竪穴住居跡覆



第10図 6・7区土層実測図 (1/60)

土は、7区北の15号堅穴住居跡に代表される弥生時代後期～古墳時代中期前半のもの比べ、住居壁際近くまで埋土が暗いという特徴がある。また、その下に第1面の地山(4層)、第2面の地山(9層)が堆積するが、7区北と比べ第1・2面間包含層の厚さが薄い。このことは、元々7区中は地形的に高いことを示していると考えられる。

7区南では、床土(1層)、包含層(2～5層)の下で、青灰色系粘質土の地山(6層)の1層のみを検出した。7区北・中及び6区はすべて粘質土系であるのに対し、7区南7層の砂層の存在は、この付近が遺構密度が薄く遺物量が少ないこと、さらに7区中との遺構面レベルの違いからこの付近は谷部になると考えられる。

6区では床土(1層)、包含層(2・3層)の下で、黄褐色粘質土の地山(4層)が堆積する。また、6区の南端、旧河川近くは遺構埋土・地山ともグライ化が顕著であった。

以上、6・7区の基本層序をまとめると、7区第1・2面とも8区～7区北にかけて緩やかに下がり、7区北～中央にかけて遺構面が緩やかに上昇し、この間に多くの遺構が形成される。しかし、7区南の北寄りに位置する27号堅穴住居跡南側を境として、南側に向かってやや急な傾斜で遺構面が下降し、遺構面も1面のみで遺構密度も希薄になり、そのまま谷部となる。6区は7区南よりやや遺構面が上昇しているものの、遺構面は1面のままであり、そのまま旧河川へと至る状況が見て取れる。

2 6区の検出遺構と遺物

(1) 概要

6区は7区の南10mに位地し、調査面積は180㎡である。調査区の標高は約6mで、全体的に地下水位が高く、特に南側はクリークの影響もあり、常に水が湧き出る状況であった。地下水の影響を受けた部分は青灰色にグライ化していたため、遺構検出は困難を極めた。また、遺構の床面についても深い箇所ではグライ化のため、不明瞭な部分も見受けられた。土層は約15cm程の表土を取り除くとその下に10cm程灰褐色土が堆積する。その下に黄灰褐色粘質土のベースが存在し、遺構はこの上面で確認することができた。検出遺構は竪穴住居跡10棟、土坑2基、溝1条、その他ピットで、時期は弥生時代後期～古墳時代に及ぶ。出土遺物はパンケース15箱出土した。

(2) 竪穴住居跡

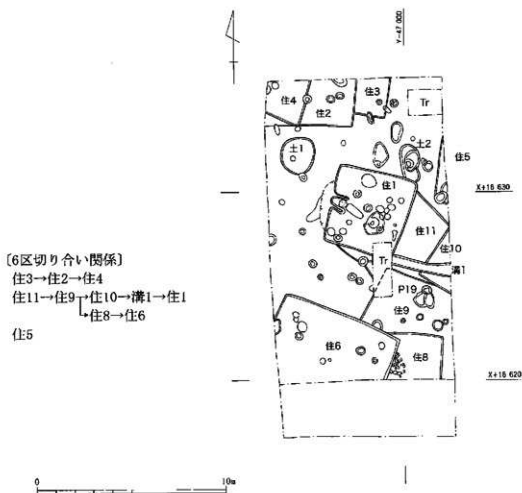
1号竪穴住居跡（図版2・3、第12図）

6区の調査区中央に位置し、11号竪穴住居跡、1号溝を切る。南東隅は試掘時のトレンチによって壊れてしまった。平面形態は方形で、住居規模は南北410～430cm×東西380～410cmである。床は貼床を施していたが、この面では柱穴を明確に検出することができず、貼床を除去した状態で確認することができた。主柱穴は4本である。柱穴は青灰色粘質土の下の砂層まで達していた。西壁中央にはカマドを設ける。カマド内部に径40cm程の焼土面が確認でき、中央に小さな凹みが存在する。なお中央東寄りのピットでは、側面に炭が確認できたことから、平面プランが大きくなるものと掘削時に判断したが、この部分は1号住居跡のピットよりも古い遺構と思われる。この遺構は略楕円形のいづつな形態で、立ち上がりは緩く浅い。床面に炭が堆積している。

出土土器（図版32、第13図） 1～4は土師器碗形杯である。1は口縁部が若干外反きみとなる。色は暗灰褐色。2～4は口縁が内湾する。2の色は暗褐色、3・4の色は赤褐色。5は屈曲する土師器鉢で口縁は直立する。色は灰黄褐色。6は須恵器杯身で口縁が欠けている。7は精製の壺で口縁端部が外反する。調整はミガキで、色は黄褐色。8～13は土師器甕である。8は口縁が緩く外反し、胴部内面にケズリ調整を行う。色は褐色。9は精製の壺である。10・11は口縁が緩く外反し、底部は丸底。胴部内面はケズリ調整を行い、11の胴部外面と口縁内面に粗いハケ調整を行う。色は10が暗灰褐色、11が褐色。12・13は胴部が大きく張り出し、口縁は外反する。胴部内面にケズリ調整を行い、13は胴部外面に粗いハケ調整を行う。12は摩滅しており調整は不明。色は12が灰白褐色、13が暗灰褐色。14は土師器甕で、把手がはずれている。その痕跡から把手をあて、付け根の周りに粘土を盛って補強していることが分かる。口縁部は軽く外反し、胴部外面下半と胴部内面に軽いケズリ調整を行う。色は灰黄褐色。15～18は混入した弥生土器である。15は精製の鉢で、器面は摩滅が激しい。色は灰黄褐色。16～18は甕で、17は口縁端部に刻目を施す。18は胴部外面にタタキ、内面にユビオサエを施す。色は16が白黄褐色、17が黄褐色、18が灰黄褐色である。

2号竪穴住居跡（図版3、第14図）

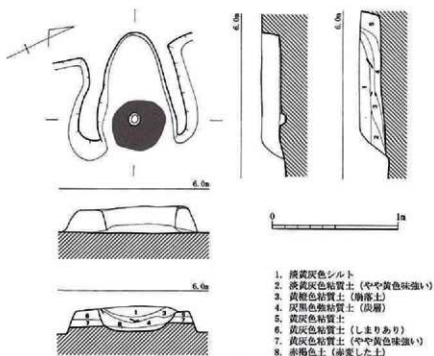
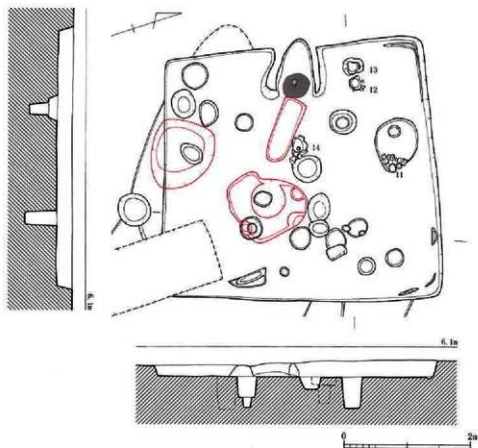
調査区北端に位置し、3号竪穴住居跡を切り、4号竪穴住居跡に切られる。北側及び西側は



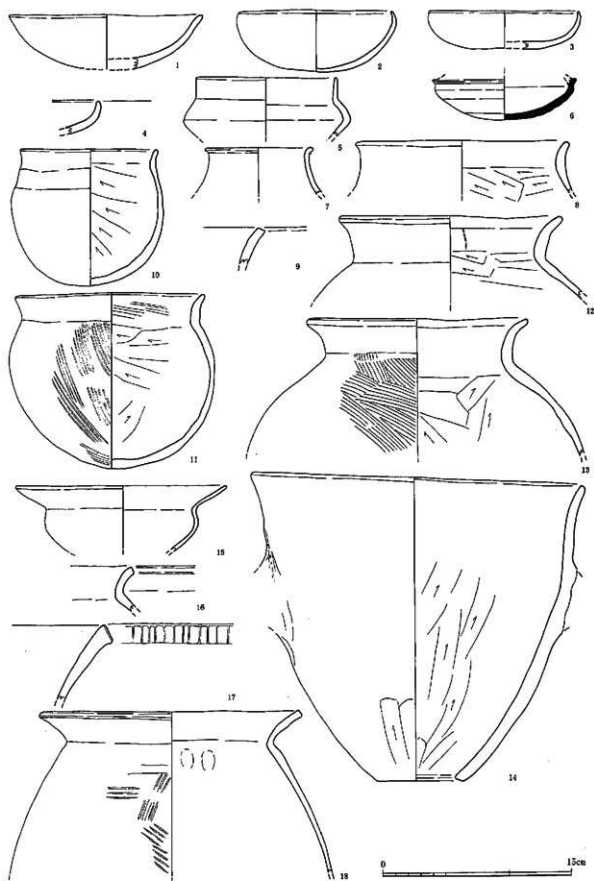
第11図 6区遺構配置図 (1/200)

調査区外に延びる。平面形態は方形で、住居規模は東西470cm以上と大型である。検出当初は切り合う4号竪穴住居跡の存在に気づかなかったが、2号竪穴住居跡を床面まで掘り下げた段階でプランが確認でき、調査区壁面の精査によって、4号が2号を切ることが確認できた。主柱穴は調査区北壁際に確認でき、その位置から考え2本柱の構造と思われる。炉跡やもう一つの主柱穴は4号竪穴住居跡によって隠されていると考えられる。

出土土器 (第15図) 1・2は接合こそできないが、同一個体と思われる広口甕である。底部は底面と胴部の境界が丸味を帯びあいまいである。外面は底部付近にミガキ調整を行い、ハケ調整の痕跡も見られる。内面はハケ調整を行い、底部はユビオサエを施す。色は灰黄褐色。3は屈曲する甕の口縁部で、端部に刻目を施す。内外面はハケ調整を行う。色は灰黄褐色。4は鉢になろうか、11縁部外面は三角状に肥厚し、外面はタタキ調整を行う。色は灰黄褐色。5・6は甕の底部で平底、6は底面中央が盛り上がる。内外面ハケ調整を行う。色は5が灰黄褐色、6が暗灰褐色。



第12図 1号竪穴住居跡実測図 (1/60、カマドは1/30)



第13图 1号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

3号竪穴住居跡（図版3、第14図）

調査区北端に位置し2号竪穴住居跡に切られる。平面形態は方形で、北側は調査区外に延びる。東側にベッド状遺構が確認でき、床面の段差は13cm程と低い。主柱穴等は確認できなかった。

出土土器（第15図） 7は壺の胴部破片である。頸胴部界に二条沈線を施文する。内面はユビオサエを施す。色は灰黄色。弥生前期の可能性があるが、当住居跡の時期のものではなさそうである。

4号竪穴住居跡（図版4、第14図）

調査区北西隅に位置し2号竪穴住居跡を切る。大部分は調査区外に延びるため、規模や内部施設については不明である。

出土土器（第15図） 8・9は直立する口縁の壺である。器面は摩滅しているが8はハケ調整の痕跡が残る。色は8が灰黄色、9が黄褐色～灰色。10は口縁部が欠損しているが、球形の胴部を呈する甕になろうか。器面は摩滅しているが外面にハケ調整の痕跡が残る。色は灰黄褐色。11は底部で色は灰黄色である。12～14は屈曲する甕である。12は胴部内外面にハケ調整を行い、内面はユビオサエも施す。色は灰褐色。13は口縁端部が大きく窪む。色は暗褐色。14は口縁端部が肥厚し刻目を施す。内外面にハケ調整を行う。色は灰黄褐色。15は砲弾形の甕と思われ、口縁端部に0字状の刻目を施す。内外面ナデ調整を行い、色は灰色である。16は高杯の口縁部で外面は屈曲部で稜を形成するが、内面は丸味を帯びる。口縁端部は若干窪む。色は灰黄褐色。

5号竪穴住居跡（図版4、第14図）

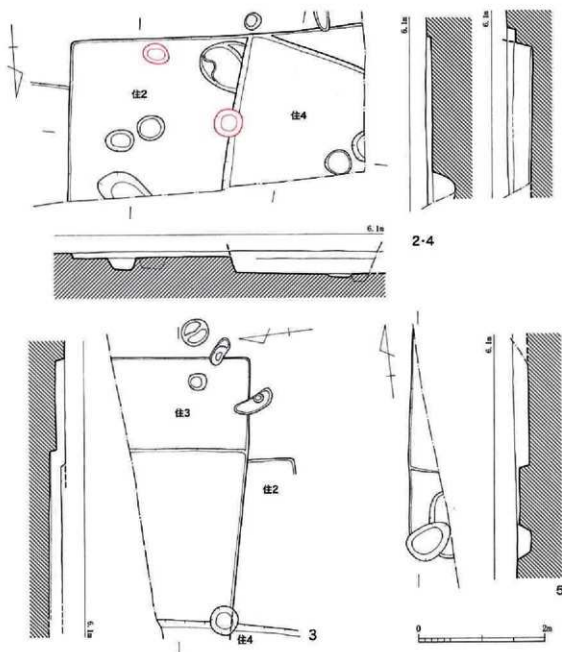
調査区東際に位置する。大部分が調査区外にあるため詳細な規模や内部施設は不明であるが、東西方向に18cm程の段があるため、これがベッド状遺構となり、南北方向に軸をとる住居跡と思われる。かなり削られているため竪穴の深さは非常に浅い。

出土土器（図版32、第16図） 1は口縁部が屈曲する長胴の甕。屈曲部外面に低い突帯をつける。底部は若干丸味を帯びる平底で、胴部外面はハケ調整とタタキ調整、内面は底面にユビオサエを施す。色は黄褐色。

6号竪穴住居跡（図版4、第17図）

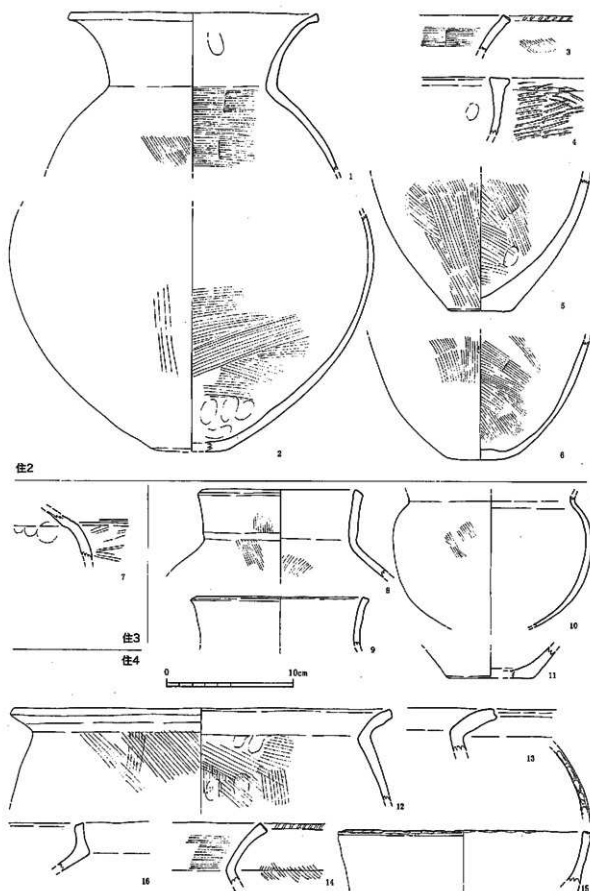
調査区南端に位置する。平面形態は方形で住居規模は東西665cmと大型だが、南北については南側が調査区外のクレーク部分に延びるため全体の大きさは不明である。床面はグライ化が激しく、ビットや主柱穴、内部施設については検出することがほとんどできなかったが、西側の調査区際において焼土が確認できた。埋土は東壁際に暗灰褐色粘質土が堆積していた。本住居跡を検出中に方形のプランが見え、一時は7号竪穴住居跡としていたが、結局それは本住居跡の埋土の違いによるものであると判断し、7号は欠番扱いにしている。

出土土器（第16図） 2は袋状口縁壺の口縁部か。色は灰黄色。3～6は屈曲する甕である。3は口縁端部内面が小さく跳ね上げ気味となり、端部に刻目を施す。色は褐色。4は器面の摩

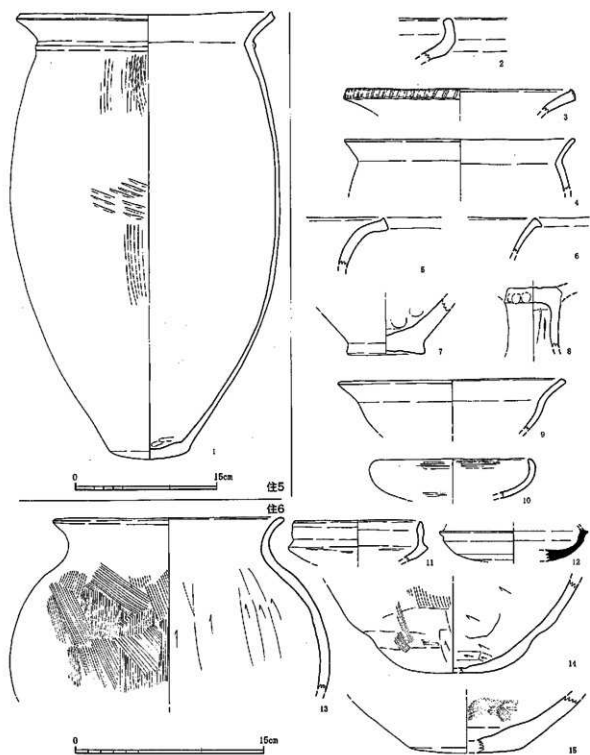


第14図 2～5号竪穴住居跡実測図 (1/60)

減が激しく、色は赤褐色。5は口縁端部内面が少し窪む。器面は摩滅しており、色は灰黄色。6は口縁端部が下方向に垂下し広くなる。器面は摩滅しており、色は灰黄褐色。7は甕の底部で底面は小さな上げ底を呈する。器面は摩滅しており、色は灰黄褐色。8は高杯の脚部である。杯部との接合部分に擬口縁が見られ、オサエの痕跡が残る。脚部内面にシボリ痕が見られる。色は灰黄色。9は緩やかに屈曲する鉢で、器面は摩滅している。色は灰黄褐色。10は土師器碗形杯で口縁部は内湾する。内外面ミガキ調整を行い、色は赤褐色である。11は土師器の須恵器模倣杯である。胎土は精製で色は赤褐色。12は須恵器杯身で、口縁部が欠損している。13は土師器甕で、胴部は球形状に強く張り出し、口縁部は緩やかに外反する。胴部外面はハ



第 15 图 2～4 号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



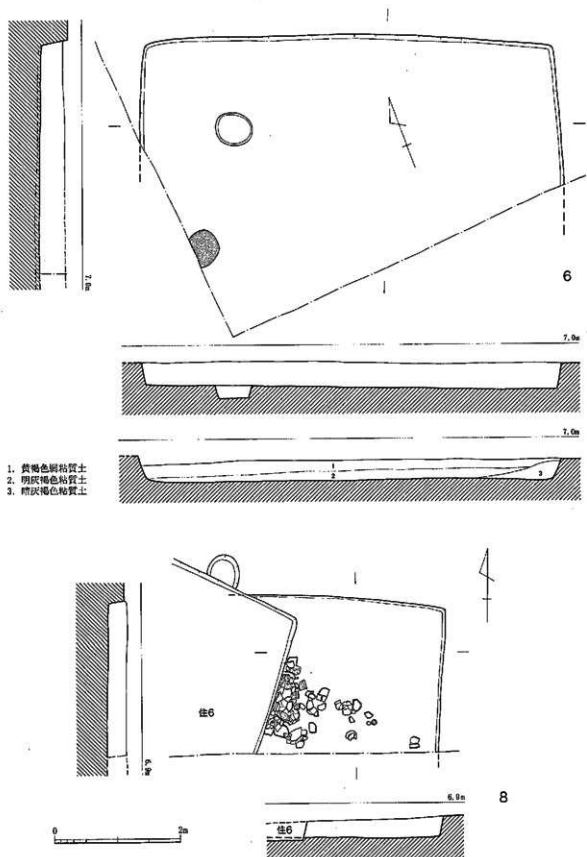
第16図 5・6号竪穴住居跡出土土器実測図（1は1/4、他は1/3）

ケ調整、内面はケズリ調整を行う。色は灰黄褐色。14・15は土師器甕の底部。14は丸底で器壁が薄い。外面はハケ調整を行うが、底部に近い箇所はケズリ調整も行う。内面はケズリ調整。色は褐色。15はやや平たい部分を残す。外面は摩滅しているが、内面はハケ調整が確認できる。色は暗黄褐色

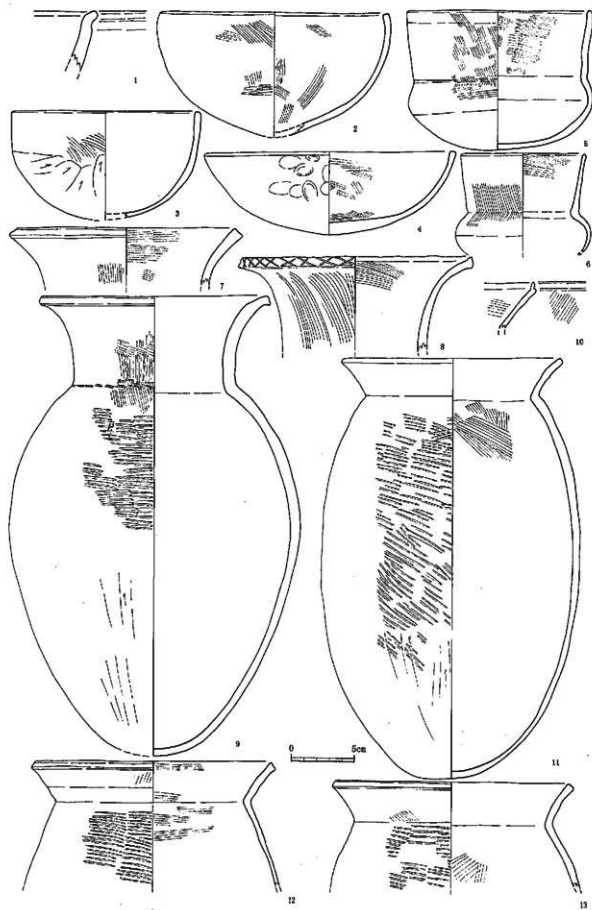
8号竪穴住居跡 (図版5、第17図)

調査区南東隅に位置し西側は6号竪穴住居跡に切られる。平面形態は方形であるが、南側が調査区外のクリーク部分に延びるため、住居規模は不明である。床面はグライ化が激しく床面を把握するのに苦慮した。埋土に炭層が見られたため、この炭層の下を床面としたが、ビット等を検出することはできなかった。6号竪穴住居跡と切り合う付近で土器が集中して出土したが、床面より15cm程浮いたレベルで揃っていた。

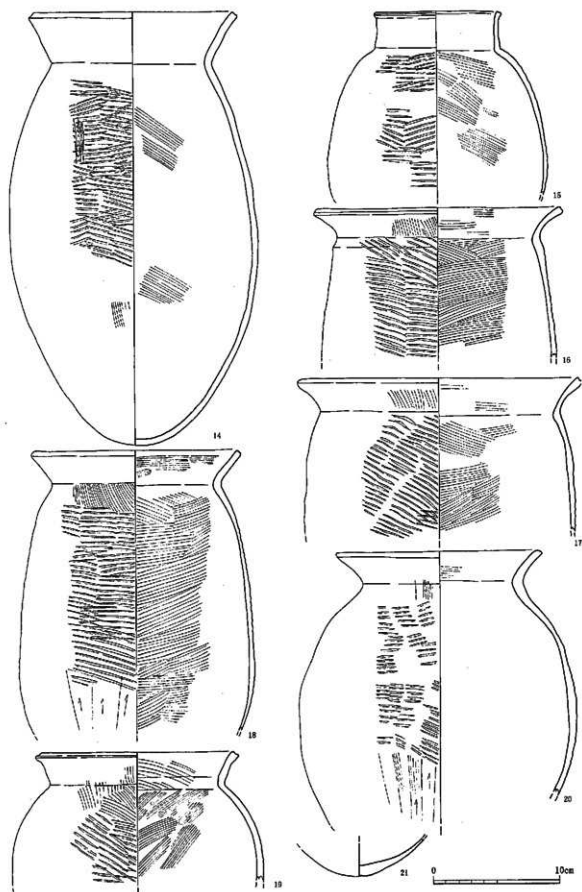
出土土器 (図版32・33、第18・19図) 1は鉢になるうか。口縁端部は短くやや外反気味となり、口縁部外面に強いナデを施し窪む。器面は摩滅しており、色は暗褐色。2～4は鉢である。2は摩滅しているが内外面にハケ調整が見られ、一部ミガキ調整が残る。本来は全面ミガキ調整であったと思われる。3も摩滅しているが器面は平滑であり、本来ミガキ調整を行っていたと考えられる。外面はハケ調整の痕跡と、下半は軽いケズリ調整が見られる。色は灰褐色。4も摩滅しているが、外面にオサエ、内面にハケ調整が残る。色は灰黄褐色。5・6は小型丸底壺で、口縁は長く直立する。ハケ調整の痕跡が確認できる。5の色は黄褐色、6は灰褐色。7・8は広口壺である。7は無文で内外面ハケ調整を行う。色は黄褐色。8は口縁端部を若干拡張し、×字状の文様を連続させる。器面は摩滅しているがハケ調整の痕跡が残る。色は灰黄色。9は長胴の壺である。底部は丸底で、口頸部は緩やかに開く。頸胴部界に棒状工具による刺突文を連続させる。外面は頸部から胴部にかけてハケ調整を行い、胴部上半はタタキ調整、下半は軽いケズリ調整を行う。内面はナデ調整。色は黄褐色。10は庄内甕に類似する屈曲壺である。口縁端部は上方向に立ち上がり、外面に鋭い沈線を施し段状となる。内外面ハケ調整を行う。色は灰黄褐色。11～20は屈曲壺である。11は長胴の丸底で胴部外面はタタキ調整、底部付近は軽いケズリ調整、内面はハケ調整を行う。色は黄褐色。12は口縁部外面の屈曲部直上が少し盛り上がる。口縁端部を強いナデにより窪ませる。胴部外面はタタキ調整、内面はハケ調整を行う。色は灰褐色。13も胴部外面にタタキ、内面にハケ調整を行う。色は黄褐色。14は長胴の丸底で、口縁端部はナデにより窪む。胴部外面にタタキ調整を行うが一部ハケ調整も確認できる。内面はハケ調整で色は淡黄褐色。15は口縁部が直立し、端部が外側に突出する。胴部外面はタタキ調整、内面はハケ調整を行う。色は灰黄褐色。16・17は口縁端部が強いナデによって窪む。口縁部内外面はハケ調整、胴部外面はタタキ調整、胴部内面はハケ調整を行う。16の色は灰黄褐色。17は暗褐色。18は長胴で口縁端部は丸く収める。胴部外面はタタキ調整で、上位にハケ調整、底部付近はケズリ調整が見られる。内面は口縁部～胴部にかけてハケ調整を行う。色は暗褐色。19は胴部が張り、口縁端部はナデによって窪む。胴部外面はタタキ調整で、口縁部外面から胴部上位にかけてはハケ調整を行う。内面はハケ調整。色は黄褐色。20も胴部が張る形態で、口縁部の屈曲はやや丸味を帯び、端部は丸く収める。胴部外面はタタキ調整を行うが、口縁部から胴部上位にかけてはハケ調整、底部付近はハケ調整とケズリ調整が見ら



第17图 6・8号竖穴住居跡実測図 (1/60)



第 18 图 8 号竖穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3)



第19图 8号竖穴住居跡出土土器実測図(2)(1/3)

れる。色は淡黄褐色。21は丸底を呈するが底部先端は小さく窪む。

9号竪穴住居跡(図版5、第20図)

調査区南東に位置する。11号竪穴住居跡を切り、6・8・10号竪穴住居跡に切られる。平面形態は方形で、東側は調査区外に延びるため住居規模は不明である。北西隅は攪乱によって壊れてしまっている。床面で主柱穴と考えられるものは確認できなかった。調査区東寄りの深いビットが主柱穴の可能性もあるが、その場合には東西軸が760cmと復元されるため現状では考えにくい。

出土土器(第21図) 1は小型丸底壺で、口縁端部は尖り気味に収める。器面は摩滅が激しいが屈曲部でハケ調整の痕跡が残る。色は淡黄褐色。2は屈曲部がなだらかな鉢である。外面屈曲部は丸味を帯びるが、内面は稜を持つ。色は淡黄褐色。3・4は碗形鉢である。3は口縁部がやや細くなり端部は丸く収める。器面が摩滅しているが外面にハケ調整の痕跡が残る。色は灰黄褐色。4は口縁部が内湾し端部は強いナデにより窪む。器面は摩滅しているが、内面はハケ調整が確認できる。色は灰色。5は壺の口縁部か。短く外反し端部は丸く収める。内面に一部ハケ調整が見られ、色は褐色である。6は屈曲壺で、口縁端部内面はわずかに立ち上がり、端部はナデによって窪む。胴部外面はハケ調整の後にタタキ調整、内面はハケ調整を行う。色は淡黄褐色。

10号竪穴住居跡(図版5、第20図)

調査区東壁際に位置する。9・11号竪穴住居跡を切り、1号溝に切られる。平面形態は方形だが、大部分が調査区外にあるため詳細な規模や内部施設は不明である

出土土器(第21図) 7は二重口縁壺で、屈曲部は方形状に高く突出し刻目を施す。口縁端部は短く外側に屈曲する。器面は摩滅しているがハケ調整の痕跡が残る。色は淡黄褐色。

11号竪穴住居跡(図版6、第20図)

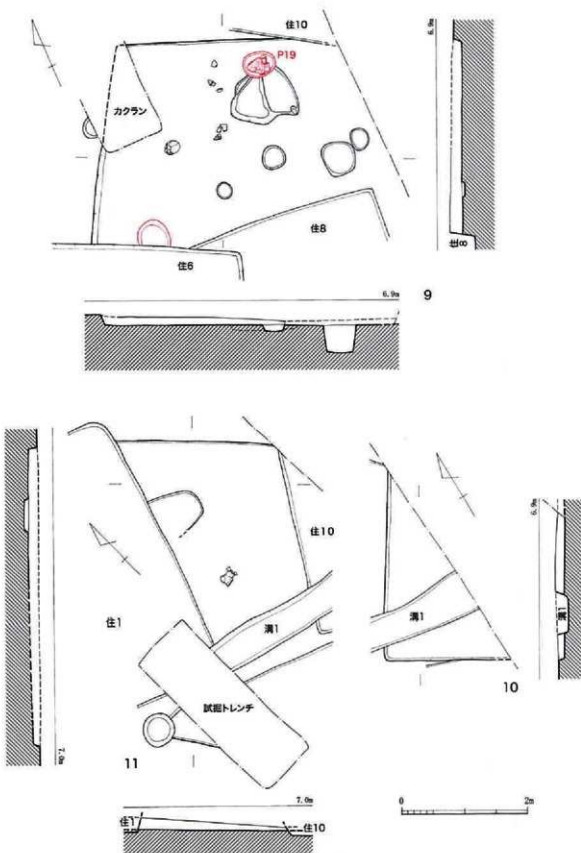
調査区東寄りに位置する。1・9・10号竪穴住居跡、1号溝に切られる。当初ベッド状遺構を伴うと判断し、中央のやや濁った土を掘削していたが、最終的にはベッド状遺構は存在せず、床面は掘りすぎってしまったと判断した。主柱穴は確認することができなかった。

出土土器(第21図) 8は小型丸底鉢で屈曲部内面に稜を持ち、口縁部はやや内湾する。器面は摩滅しており、色は灰黄褐色である。9は緩やかに外反する壺の口縁部で端部に大ぶりの刻目を施す。外面は櫛状工具により横方向に沈線を施文する。色は褐色。10は屈曲壺で口縁端部は方形状に収める。胴部外面はハケ調整とタタキ調整、内面はハケ調整を施す。色は淡橙褐色。11は壺の底部で薄い平底である。器面は摩滅しており内面にユビオサエ痕が確認できる。色は灰黄褐色。

(3) 土坑

1号土坑(図版6、第22図)

調査区北西に位置する。平面形態は円形で径は175cm～195cmである。床面は平坦で壁面は



第20図 9～11号竪穴住居跡実測図 (1/60)

外傾して立ち上がる。埋土は青灰褐色土。

2号土坑（図版6、第22図）

調査区北東に位置し、1号堅穴住居跡に切られる。平面形態はいびつな長楕円形で、規模は245 cm × 100 cm程である。当初一つの土坑と認識して掘削を行っていたが、中央に一段楕円形状に深く落ちる箇所が見られ、この部分の埋土が上層の埋土と異なっていたことから、時期の古い土坑と切り合っていることが想定される。

出土土器（第23図） 1は小型丸底鉢で口縁部は直線的に外傾する。器面は摩滅しており、色は暗褐色。2は高杯の脚部で裾は稜を持って屈曲する。器面は摩滅しており、色は灰黄褐色。3は低脚高杯で裾はゆるやかに外反する。器面は摩滅しており、色は褐色。4は布留系甕で、屈曲部外面は窪み、口縁端部は内面が若干肥厚し小さな段を形成する。端部外面は小さく突出する。色は褐色。

（4）溝

1号溝（図版6）

調査区東寄りに位置する。10・11号堅穴住居跡を切り、1号堅穴住居跡に切られる。幅は50～60 cmで、断面形態は逆台形状を呈する。床面は東に向かって緩く下がる。埋土は上層は黄褐色弱粘質土、下層は淡黄灰色粘質土であるが、漸次的に変化し明確なラインは引くことができなかった。

出土土器（第23図） 5は鉢で、胴部の立ち上がる箇所では外面に稜を持つ。口縁部は弱く外反する。器面は摩滅しており、色は灰黄褐色である。6・7は碗形鉢である。6は摩滅しているが、外面底部付近に軽いケズリ調整、また内面にミガキ調整の痕跡が残る。色は淡褐色。7は口縁部が内湾する。器面は摩滅しており、色は淡褐色である。8は高杯で器面は摩滅している。脚部内面にシボリ痕が見られる。9・10は屈曲甕である。9は口縁端部内面が浅く窪み小さな段を形成する。内外面ハケ調整を行う。色は灰黄褐色。10の口縁端部は強いナデにより窪む。内外面ハケ調整を行い、色は淡黄褐色である。11・12は丸底の底部である。11は外面に軽いケズリ調整、内面にユビオサエを施す。12の外面は摩滅しているが、内面はハケ調整を行う。

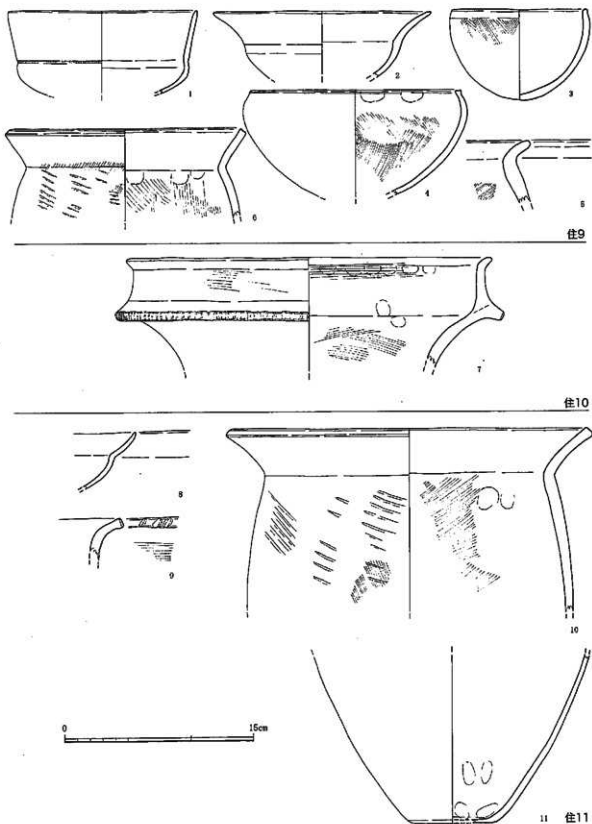
（5）ビット・包含層出土土器

包含層出土土器（第23図）

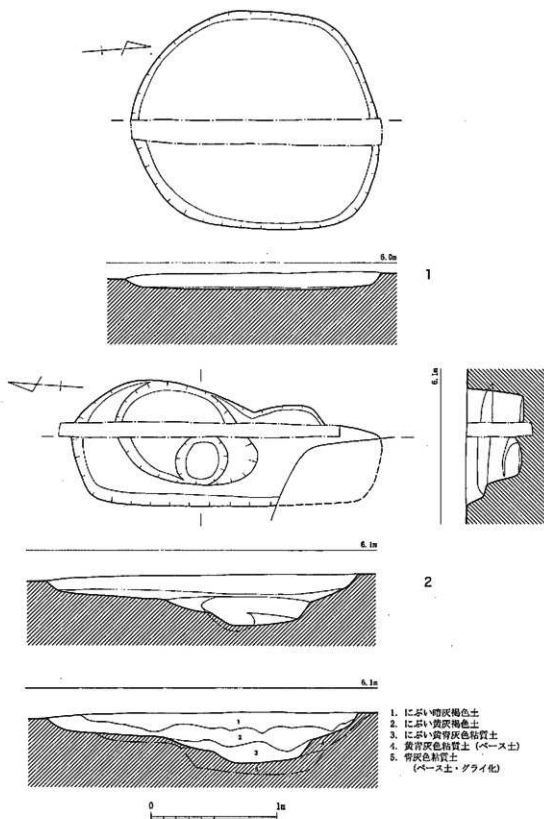
13は鉢で、口縁部が稜を持って大きく外に開く。器面は摩滅しているが内面にハケ調整の痕跡が残る。色は褐色。14は屈曲甕で口縁端部外面はナデによって突出する。胴部外面にタキ調整、内面はハケ調整を行う。色は灰黄褐色。

ビット出土土器（第23図）

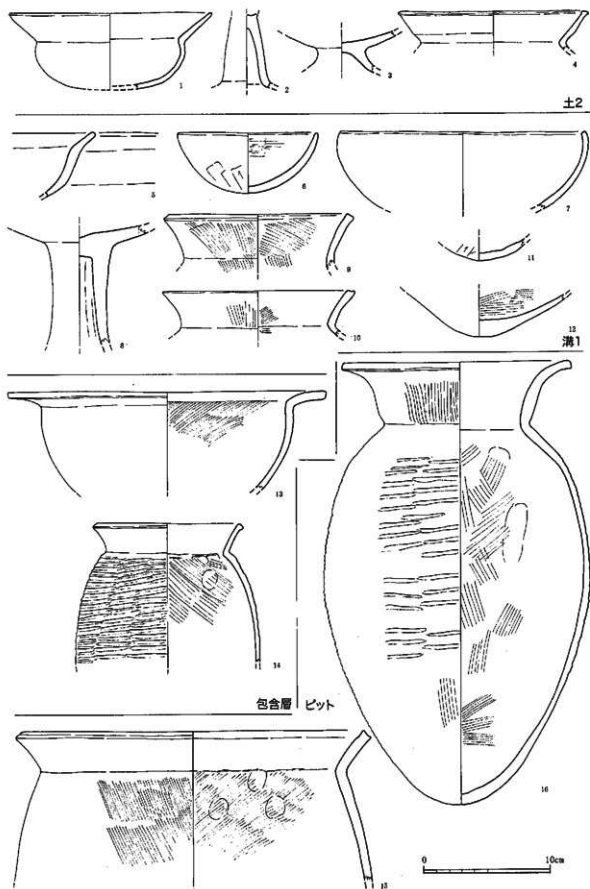
15は調査区南側のビットから出土した屈曲甕である。口縁端部はナデにより窪む。胴部内外面はハケ調整を行う。色は灰黄褐色。16はP19出土で長胴の壺とするべきか。口縁部は外に緩やかに広がり、底部は丸底を呈する。口縁部外面はハケ調整を行い、胴部外面は非常に大きなタキ調整を行う。底部付近はハケ調整が見られる。内面はハケ調整、色は灰黄褐色である。



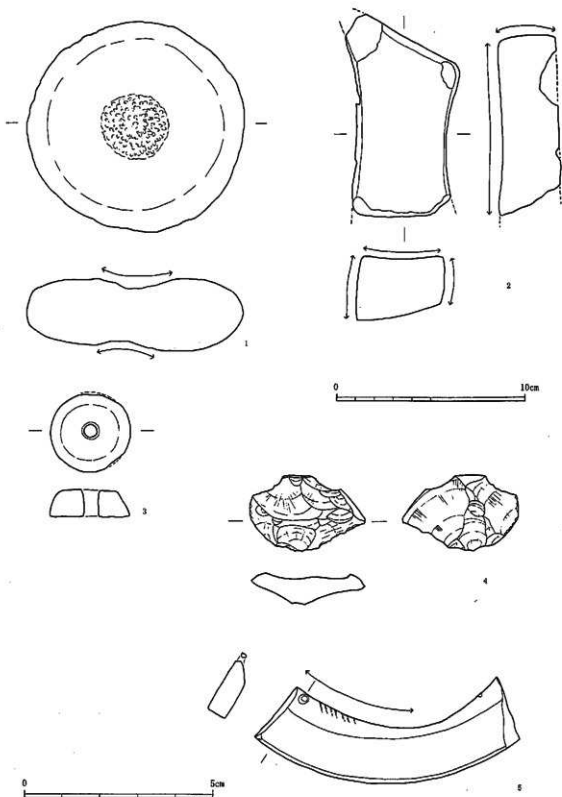
第 21 图 9 ~ 11 号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第 22 図 1・2 号土坑実測図 (1/30)



第23図 2号土坑、1号溝、ビット、包含層出土土器実測図 (1/3)



第24図 石器・青銅製品実測図 (1～3は1/2、4・5は1/1)

(6) 石器・青銅製品 (図版33、第24図)

1は1号竪穴住居跡から出土した凹石で、中央の表裏面共に使用している。被熱を受け赤変している。2は1号竪穴住居跡から出土した砥石で、欠損している裏面を除く4面を研面として使用している。3は1号竪穴住居跡から出土した滑石製の紡錘車で、断面は台形状を呈する。孔の直径は7mm。4は6号竪穴住居跡から出土した黒曜石の剥片で、一部微細剥離が確認

できる。5は1号溝から出土した青銅製の破鏡である。内側破断面の一部に研磨を施し、また小孔を穿つことで再加工をしている。穿孔は表裏両側から行い、その跡は極めて綺麗な処理をしている。穿孔は右側端部付近にもその痕跡らしきものが確認でき、2カ所に施したものと思われる。赤色顔料がわずかに付着している。

調査番号	種類	区	出土地点	長・径 (cm)	幅・厚 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	形状	材質	備考
第24図1	白石	6	住1内カマド内 埋土	11.5	—	3.8	—	完形	花崗岩	被熱を受ける
第24図2	白石	6	住1内埋土	(10.7)	5.6	3.3	—	1/2欠損	砂岩	使用面は4箇
第24図3	砂輝石	6	住1内埋土	4.3	—	1.4	0.7	ほぼ完形	滑石	
第24図4	剥片石器	6	住6埋土下層	3.1	2.1	0.7	—	完形	黒曜石	断面剥離あり
第24図5	青銅鏡	6	溝1埋土	7	1.8	0.55	0.15	ほぼ完形	—	2次加工の破鏡と してはほぼ完形

第4表 6区出土石器・青銅製品一覧表

(7) 小結

6区は小面積なこともあり、集落の断片的な様相を知るにすぎないが、時期別の集落の変遷と特筆すべき点を挙げ小結としたい。

6区で一番古い遺物は弥生時代前期のものと思われる壺の破片であるが、これは弥生時代後期と思われる3号堅穴住居跡からの出土であり、前期の遺構は確認できなかった。本格的に住居が展開しはじめるのは弥生時代後期中頃～後半であり、2～5号堅穴住居跡が該当する。出土遺物が少ないため詳細は不明ながら、2～4号堅穴住居跡は比較的短い時間幅の中での切り合いが想定される。いずれも平面形態は方形であり、2号堅穴住居跡では2本柱の構造が考えられ、3号と5号ではベッド状遺構が確認できた。

次に弥生時代後期終末～古墳時代前期の遺構としては8～11号堅穴住居跡や2号土坑、1号溝が挙げられる。住居跡は比較的短い時間幅の中での切り合いが想定でき、形態はすべて方形である。床面付近のグライ化が激しいこともあり、住居跡の構造についての詳細は不明な点が多く残念である。8号堅穴住居跡からは床面から15cm程浮いたレベルで土器が多量に廃棄されたような状態で出土しており、時間幅の少ない良好な資料になると思われる。1号溝は出土土器や切り合い関係からこれらの遺構の中では最も新しい所産と考えられ、埋土から破鏡がした点が特筆される。鏡縁は不明なものの中国鏡片であり、研磨を行い再加工している。

その後は時代が空くが、古墳時代後期の所産として1・6号堅穴住居跡が挙げられる。1号堅穴住居跡は4本柱の構造でカマドを付設する。6号堅穴住居跡も調査区際床面で焼土が確認でき、これもカマドに関係する焼土の可能性が考えられる。

3 7区第1面の検出遺構と遺物（甕棺墓以外）

（1）概要

7区第1面は、6区北端とは水路（1次調査区Dトレンチ）を挟んで約10m北、8区南端とは水路・道路（1次調査区Cトレンチ）を挟んで約12m南に位置する、南北約72m、東西約9.3m、面積約660㎡の調査区である。当区北～中ほどで、竪穴住居跡・甕棺墓を中心に多く遺構を検出したが、南は緩やかに傾斜する谷部となり、遺構・遺物ともほとんど発見できなかった。検出された遺構は、甕棺墓を除くと竪穴住居跡27棟・土坑10基・溝3条・ピット多数で、出土遺物はパンケース59箱出土した。

（2）竪穴住居跡

12号竪穴住居跡（図版8、第26図）

7区北端中央に位置し、13～15・20号住居跡、12号土坑を切る。なお、図では14号住居跡に切られるようになっているが、出土土器及び住居形態などの検討の結果、調査段階の認識は誤りで当住居跡が14号住居跡を切り、7区北端住居群（12～15・20号住居跡）の中で最も新しい住居跡となる。住居規模は断面図作成箇所で東西は400cm（B-B'）・408cm（C-C'）×南北430cm、東壁が西壁より50cmほど長い、やや歪んだ正方形住居で、深さは住居中央で5cmを測る。

住居床面ではピット7基検出し、位置・深さから壁際に近いP1・2・4・5が主柱穴の4本柱の住居跡である。なお、下層住居跡調査時に検出したP7は、位置・深さから屋内土坑の可能性が高い。住居埋土は灰黄色粘質土。

当住居跡の時期は、出土土器では弥生時代後期終末となるが、古墳時代前期後半の15号住居跡を切ること、当住居跡は正方形を呈し壁際に近い主柱穴を持つこと、また当遺跡の竪穴住居跡のほとんどは古墳時代前期後半までベッド状遺構を付設する長方形住居であることから、古墳時代中期まで下る可能性が高い。

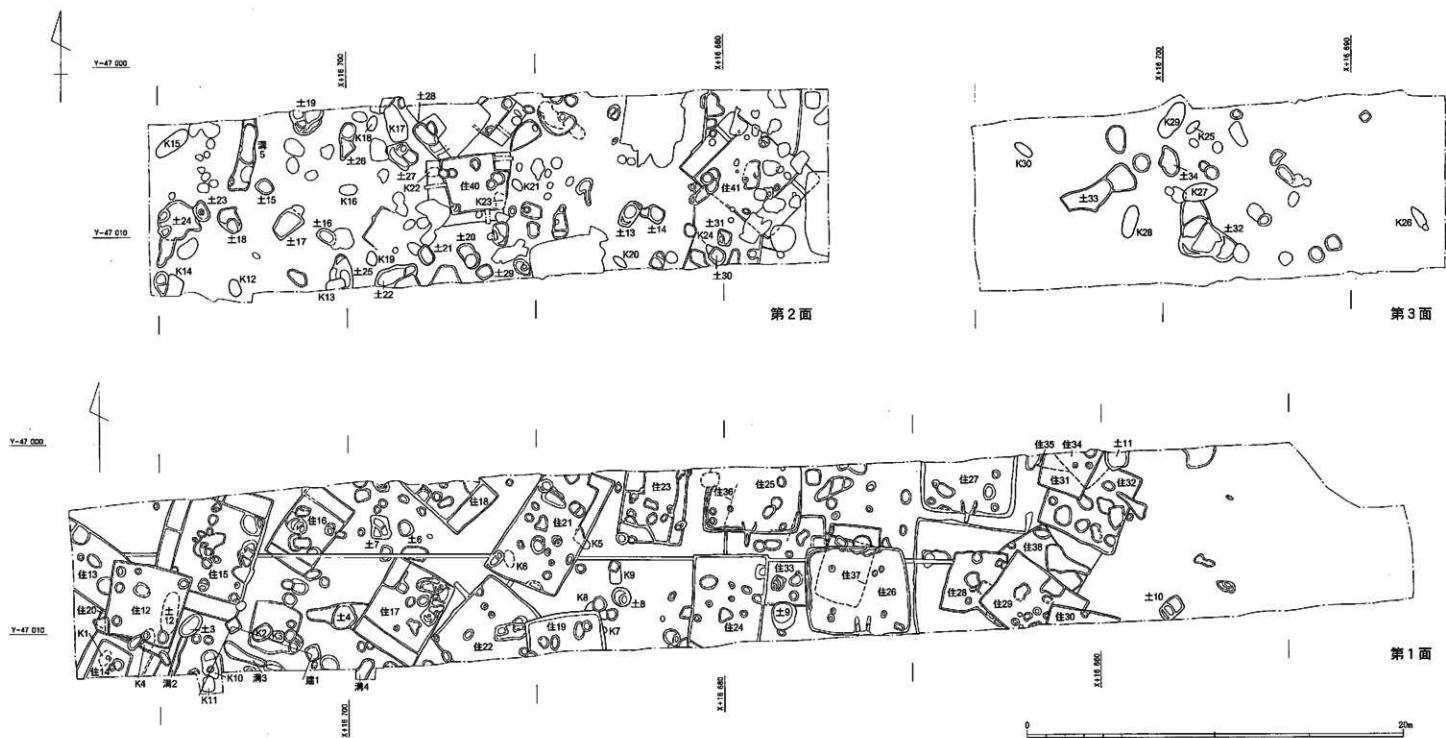
出土土器（図版34、第27図） 先述したように、図示した4点はいずれも混入品の可能性が高い。1は無頸壺で、外面はナデ、内面はハケのちナデを施す。色は黄褐色。2・3は在地系大型甕である。2の口縁端部には左→右方向にハケ工具による刻目を密に施す。色は茶褐色。3は凸レンズ底の底部で、胎土には細粒を多く含み、色は灰茶褐色。4は小型の支脚上部片で、内外面はナデで調整する。色は黄褐色。



7区第1面調査状況

13号竪穴住居跡（図版8・9、第26図）

7区北東隅に位置し、12・15・20号住居跡に切られ、7区北端住居群では最も古い住居跡となる。調査段階では当住居跡が15・20号住居跡を切ると考え掘削したが、出土土器から15号住居跡に切られる。また当住居跡ベッド状遺構検出の際に20号住居跡炉跡を検出し、かつ20号住居跡が正方形住居となることから、20号住居跡にも切られる



第25図 7区遺構配置図 (1/200)

と判断した。そのため、当住居跡南側ベッド状遺構は、南東部の一部しか確認できていない。

住居規模は南北566cm以上×東西303cmの南北に長い長方形住居で、住居堅穴部中央で深さ23cmを測る。住居北・南壁際にはベッド状遺構を付設し、北東部の一部のみ検出できた北側ベッドは高さ19cm、南側ベッドは高さ7cm、いずれも幅は不明で、地山削り出しベッドである可能性が高い。



13号住居跡出土状況（南東から）

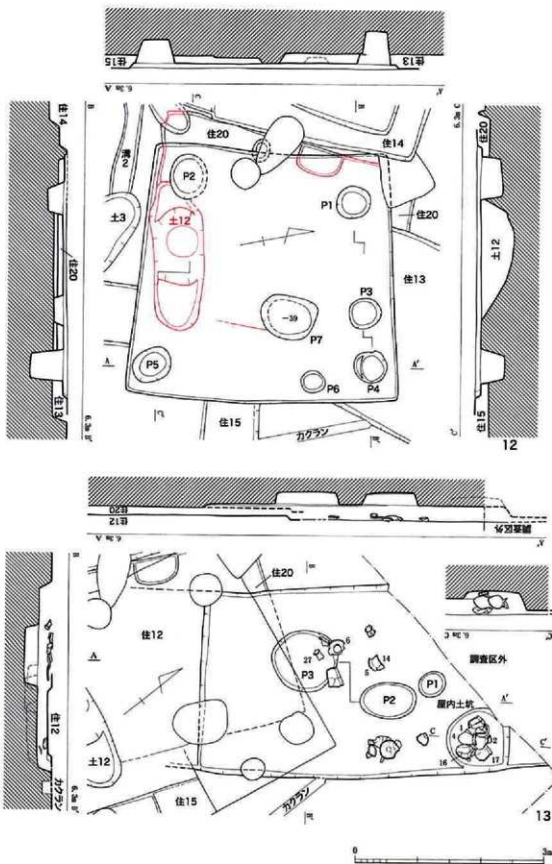
堅穴部床面では、ビット3基、屋内土坑1基検出した。位置からP1が主柱穴の可能性が高いものの、対となる主柱穴を精査したが検出できなかった。またP2・3とも埋土に炭を含まないため、炉も確認できていない。

住居堅穴部北東隅で検出した、北側ベッド状遺構と接する屋内土坑は、東西93cm×南北90cm、深さ14cmを測る。屋内土坑上及び土坑埋土内から出土した完形の壺(1・2・4)や甕(16・17)と住居埋土上層から出土した土器群は、いずれも住居廃絶時に廃棄したものと考えられるが、屋内土坑土器群は完形に近いもののみで構成され、かつ壺・甕という器種のみであることは、住居廃絶行為の面から注目される。住居堅穴部埋土は灰黄色粘質土を基調とし、炭層が埋土中層でレンズ状に堆積する。

なお、覆土からスクレイパー(第91図2)、磨製石包丁(第91図15)各1点が出土した。

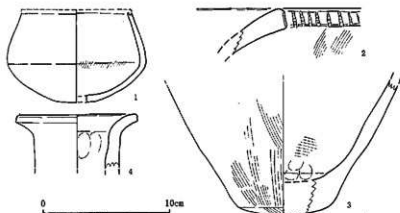
出土土器から弥生時代後期末の住居跡と考えられる。

出土土器(図版34、第28～31図1～34) 1～8は口縁部が立ち気味に開く在地系広口壺である。1は2/3ほど残存するもの。底部は凸レンズ底で、器壁は厚く、口縁部と胴部との境には三角突帯を貼り付け、全体的に歪みが認められる。法量は口径17.0cm、器高29.8cmを測る。外面調整は底部付近の工具ナデ以外はハケを施し、内面の口縁部はハケのちナデ、肩部はナデ、胴部中位以下はハケを施す。外面には大きな黒斑が2ヶ所認められ、色は黄褐色。2も凸レンズ底のほぼ完形の壺で、口径18.4cm、器高31.0cmを測る。口縁部と胴部との境には最終調整として2条の横ハケを文様状に施し、さらに5と同じようにその上から同じハケ工具により、「C」字状の文様を1ヶ所施す。また、外面胴部中位以上は荒いハケ目、中位は通常のハケ目、下位は板ナデを行い、内面頸部及び底部はナデ、それ以外はハケで調整する。外面には小さい黒斑が2ヶ所認められ、色は橙褐色を基調とし、胴部内面は灰色を呈する。3はやや長胴の締まりがない頸部の壺。口縁部と頸部との境にはハケ工具による短斜線の刻目を密に施す。底部は凸レンズ底で、外面底部付近のハケ原体と胴部中位以上のハケ原体は異なったものを使用する。外面には黒斑があり、色は茶褐色。4は胴部中位に外→内の焼成後穿孔が1ヶ所施したほぼ完形の壺で、法量は口径21cm、器高31cmを測る。強く外反する口縁端部には工具による刻目を密に施す。底部は尖り気味の丸底。外面底部付近の大きな黒斑と対応する内面も変色し、口縁部内面にも黒斑が認められる。色は橙褐色。5は器壁が厚く、1～4に比べ口頸部の立ち上がり部分が少なく、口縁部が強く外反する。外面胴部中位及び口縁部は縦ハケを施すが、肩部～頸部は横ハケを施し、2と同じく最終調整として「C」字状の文様をハケ工具に



第26図 12・13号竪穴住居跡実測図 (1/60)

より施す。色は黄褐色。6は大型品で、口縁端部にはハケ工具による刻目を密に施し、口縁部と頸部との境には低平な三角突帯を巡らす。色は茶褐色。7・8は頸部が締まった肥後系広口壺。7は口縁端部外面には指押さえ痕が顕著である。胎土には細粒をやや多く含み、色は淡橙褐色。8は口縁端部を水平まで外反さ



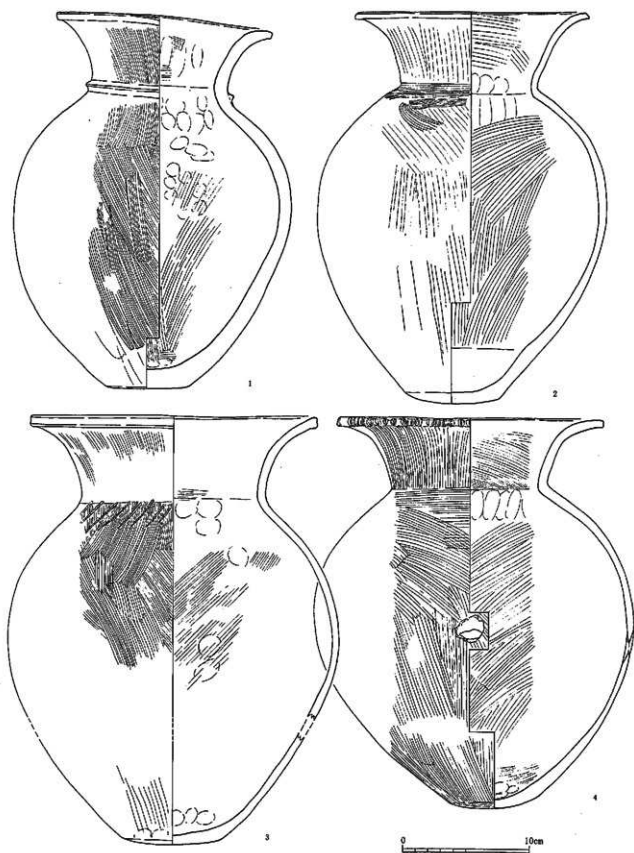
第27図 12号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

せた壺で、口縁上端部にはハケ工具による刻目を密に施す。口縁端部内面はナデにより凹み、内面の口縁部と頸部との境は稜を持つ。また胴部上位には最終調整として、横ハケを2条施す。胎土には細粒をやや多く含み、色は茶褐色を呈する。

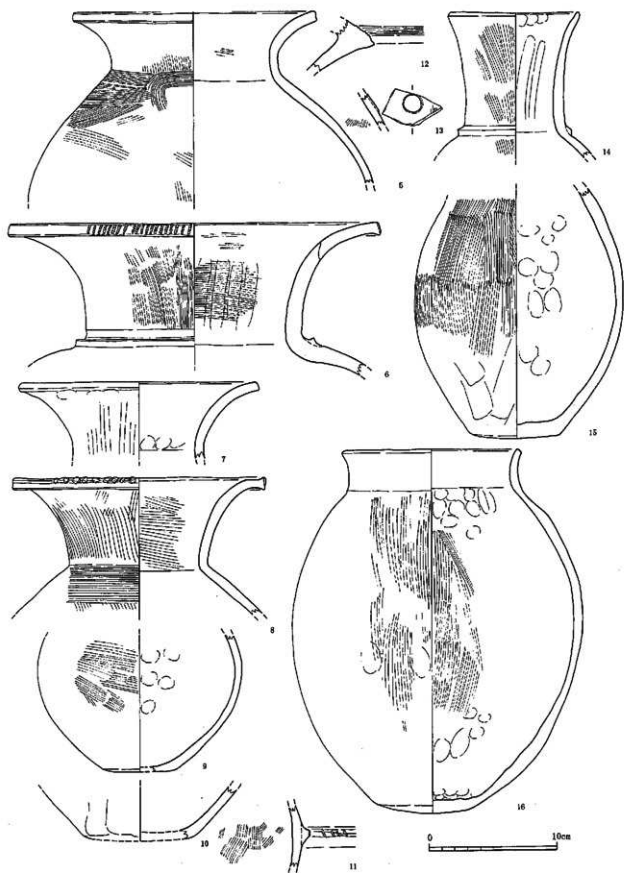
9は凸レンズ底の底部に球状の胴部を持つ壺。外面底部付近には黒斑が認められ、色は黄褐色。10は凸レンズ底の壺底部。外面にはナデの鈍い稜が認められ、色は黄橙色が基調。11はハケ工具による浅い刻目を施した三角突帯を持つ壺胴部中位片で、色は黄褐色。

12は在地系複合口縁壺口縁部で、外面上位には現状で最大5条のハケ工具による沈線を巡らす。色は黄褐色。13は円形浮文を貼り付けた壺肩部片。黒斑があり、色は黄褐色～灰黄褐色。14は緩やかに外反する長頸壺で、頸部には低平な三角突帯を巡らす。色は黄褐色。15は弱く突出する凸レンズ底を持つ壺で、肩部以上は欠損する。外面下位は板ナデのちナデ調整。黒斑は外面に2ヶ所認められ、色は黄褐色。16は直立口縁の在地系短頸壺で、ほぼ完形品である。外面中位付近には二次加熱痕が認められるため、甕として使用されたものか。法量は口径13.3 cm、器高28.7 cmを測り、底部はほぼ丸底となるが、わずかに稜が残る。外面底部付近はハケのちナデを施した可能性がある。外面底部付近には黒斑が認められ、胎土には細粒を多く含み、色は黄褐色を基調とする。

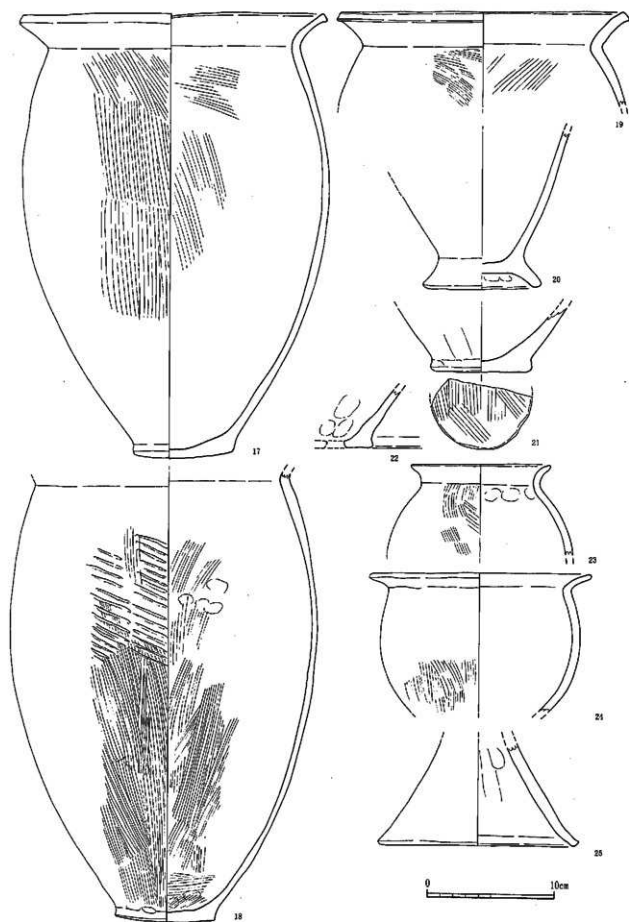
17～24は在地系甕。17は7割残存の凸レンズ底の甕で、法量は口径23.6 cm、底径7.7 cm、器高35.2 cmを測る。外湾する口縁部内面にはふきこぼれ痕が残る。外面下位は縦ハケのちナデを施す。外面には黒斑が認められ、内面下位は黒化する。胎土には細粒を多く含み、色は橙褐色～黄褐色を基調。18は凸レンズ底を持ち、外面胴部上位にハケ前のタキヤ痕が残る長胴の甕。内面上位はハケのちナデで調整し、外面全体にはススが付着する。胎土は細粒を多く含み、色は外が灰褐色、内が橙褐色。19は器壁はやや厚めの甕で、色は茶褐色。20は台付甕底部で、胴部にはかなりの歪みがあるため、胴部反転復元は行っていない。胴部外面には二次加熱痕がある。胎土には細粒をやや多く含み、色は褐色。21は凸レンズ底で、底部外面にはハケがよく残り、外面胴部は工具ナデのちナデ調整を行う。胎土には細粒を多く含み、色は黄灰色。22は小さな平底の甕底部で、底部中央には外→内の焼成前穿孔を施す。外面には二次加熱痕があり、胎土にはやや大きめの細粒を含む。色は褐色。23・24は小型甕。23の色は黄褐色。24は強く外折する口縁部で、外面胴部は中位以上は縦ハケのち横ナデを施す。外面には黒斑あり。胎土には大きめの細粒を含み、色は淡黄褐色を呈する。



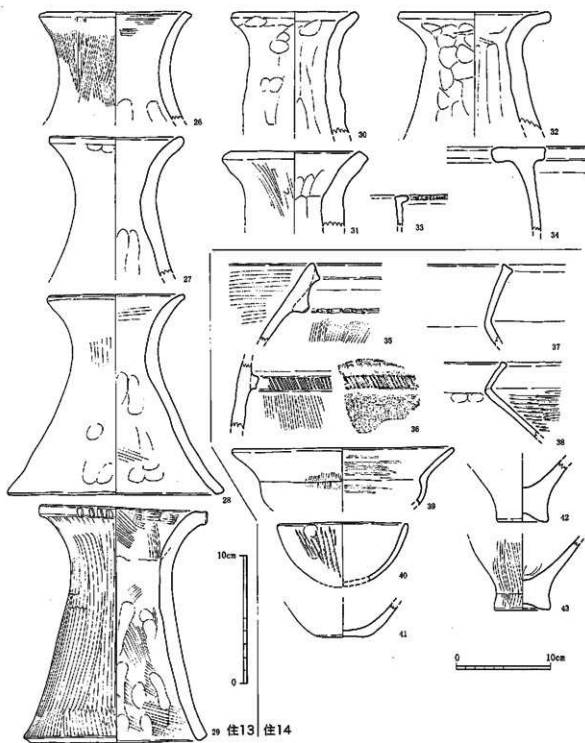
第 28 图 13 号竖穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3)



第29图 13号竖穴住居跡出土土器実測図(2)(1/3)



第30图 13号竖穴住居跡出土土器実測図(3)(1/3)



第31図 13(4)・14号堅穴住居跡出土土器実測図 (33・34・42・43は1/4、他は1/3)

25はハの字状に開く在地系高坏脚部。胎土には細粒をやや多く含み、色は黄橙色～黄褐色。
 26～32は器台で、26～28・30・31の色は黄褐色を呈する。26は締まりが弱い。27の胎土には細粒をやや多く含む。28は1/2ほど残存するもので、内外面は部分的にナデ前のハケ目が残存する。29は内外面ハケが顕著に残るもので、器台上端部には工具による浅い刻目を施す。1/2ほど残存し、色は茶褐色。30はナデによる外面の凹凸が顕著な粗製品で、胎土には

細粒を非常に多く含む。外面には黒斑あり。31は器壁が厚い。32は器台上部口縁が強く外反し、口縁部内面はナデによる窪む。外面には工具痕が残る。色は暗茶褐色。P2出土。

33・34は混入品である。33は弥生前期後半の甕口縁部で、口縁端部には工具による浅い刻目を密に施す。外面全体にはススが附着し、色は黄褐色を基調。34は弥生中期中葉の甕口縁部片である。色は灰黄褐色～橙褐色を基調とする。

14号竪穴住居跡（図版9、第32図）

7区北西隅に位置し、12・20号住居跡に切られ、1・4号甕棺墓を切る。遺構図のように調査当初は、当住居跡が12・20号住居跡を切ると考えたが、住居形態や12・15・20号住居跡との切り合い関係及び出土土器から、調査時の認識は誤りで12・20号住居跡に切られると判断した。

住居西半分は調査区外であり、また調査の際に誤って南壁を掘り失ってしまったため、壁下端から推測した上端推定ラインを破線で示す。住居規模は東西290cm以上×南北340cm、住居竪穴部中央で深さ20cmを測る、東西にやや長い長方形住居となるか。住居北・南・東壁3方向にベッド状遺構を付設し、北側ベッドは高さ16cm、幅52cm、東側ベッドは高さ16cm、幅45cm、南側ベッドは高さ20cm、幅93cmを測り、いずれも地山削り出しによるものである。

竪穴部床面では、ビット3基を検出した。位置・深さからP2・3のいずれかが主柱穴の可能性が高いか。また、赤で示すように住居下層で深さ20cmの隅丸正方形のビットを検出した。

住居竪穴部埋土は上層が灰褐色粘質土、下層が灰黄褐色粘質土、竪穴部床面直上が暗茶褐色粘質土で炭を多く含む。

出土土器から古墳時代前期前半の住居跡と考えられる。

出土土器（第31図35～43）35は在地系複合口縁壺の系譜を引く在地系壺口縁部で、口縁部外面には突帯を2条貼り付け、下の突帯にはヘラ工具による浅い刻目を施す。色は黄褐色。36は大型甕胴部片で、ヘラによる刻目を浅く密に施した突帯を貼り付ける。色は橙褐色。37は外傾する長い口縁部の在地系壺。色は黄褐色。38は畿内系壺の口縁部で、口縁端部はわずかに肥厚させる。頸部外面にはやや右上がりのタタキ痕が明瞭に残る。色は黄褐色を基調とする。39は外反口縁部で、内外面にミガキを施す。色は橙褐色。40は碗状の小型鉢で、外面は縦方向のタタキのちナデで調整する。外面には黒斑があり、色は灰黄色。41は小さな平底を残す、小型鉢の底部。外面には二次加熱及び黒斑があり、色は黄茶褐色。

42・43は弥生時代中期初頭～前半の甕底部。42の色は外が灰褐色～黄褐色、内が灰黒色。43の色は黄褐色である。いずれも混入品。

15号竪穴住居跡（図版9、第33図）

7区北東壁際に位置し、12・20号住居跡、1号掘立柱建物跡P1に切られ、13号住居跡・12号土坑を切り、東壁中央で接する3号土坑との切り合いの前後関係は不明である。13号住居跡で先述したように、調査段階では当住居跡が13号住居跡に切られると考えたが、整理段階の検討の結果、調査時の認識は誤りで、出土土器から当住居跡が13号住居跡を切る。住居北東隅は調査区外で、住居北壁中央西から住居南壁中央にかけて排水管による攪乱を受ける。また住居南壁中央は一部掘り過ぎている。

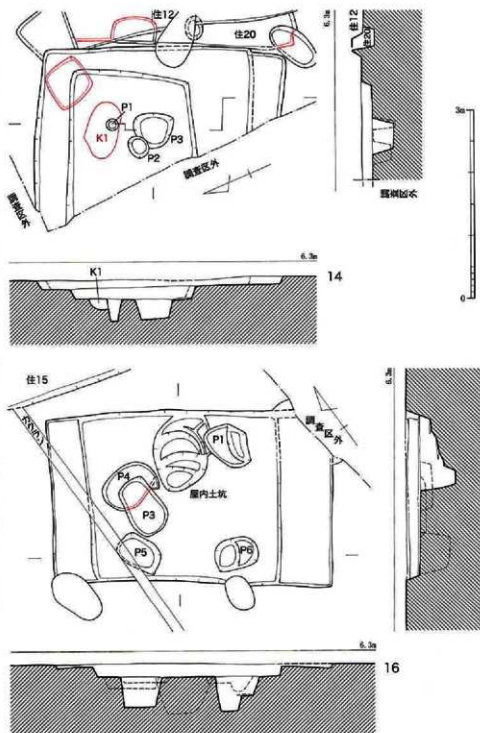
住居規模は南北505cm以上×東西680cmの東西に長い大型長方形住居で、住居竪穴部中央で深さ27cmを測る。住居北・東・西壁際には地山削り出しのベッド状遺構を付設する。北側ベッドは、東側で高さ13cm、幅88cm、東側ベッドは高さ11cm、幅105cm、西側ベッドは高さ10cm、幅98cmを測る。

なお、調査段階では北側ベッドは貼りベッドと考えたので、掘り下げ途中で拳大の礫を発見し、その礫の下端まで掘り下げてしまったので、西側半分を7cmほど掘り下げすぎてしまった。また、東側ベッドの北側壁際も掘り下げてしまい、段が付く。

竪穴部床面では、ビット14基、屋内土坑2基検出し

た。東西ベッドに近いP2・13が深さ・位置から主柱穴の可能性が高い。中央に位置するP10・11、住居南西隅に位置するP6は深さ・位置から主柱穴を支える補助的な柱穴であった可能性が考えられる。またP5は焼土・炭のみが埋土の、東西160cm×南北112cm、深さ7cmの浅く、広範囲に広がる炉である。

住居竪穴部南東隅で東側ベッドに接する屋内土坑1は、東西100cm×南北115cm、深さ30cm



第32図 14・16号竪穴住居跡実測図 (1/60)



7区15号住居跡出土状況（南から）

を測る。埋土は茶褐色粘質土。屋内土坑2は住居南壁中央やや東寄りに位置し、西側の浅い段は掘りすぎてしまったものである。東西145cm×南北75cm、深さ25cmを測り、埋土は茶褐色粘質土である。なお、9・10は当土坑から出土した土器である。また、覆土から石包丁（第91図16）、凹石（第92図24）が各1点出土した。

住居埋土は灰黄褐色粘質土で、住居竪穴部北東隅で床下掘り込みを確認した。

出土土器から古墳時代前期後半の住居跡と考えられる。

出土土器（図版35、第34図1～13） 1・2は在地系大型甕。1は口縁端部に工具による浅い刻目を施す。色は黄褐色。2は胴部下片で、ヘラ工具による浅い刻目を密に施した突帯を貼り付け、外面には黒斑あり。色は黄褐色。3～5は在地系甕。3は胎土に細粒をやや多く含み、色は橙褐色。4の口縁端部には二次加熱痕あり。胎土には細粒をやや多く含み、焼成はやや甘く、色は橙褐色。5は小型の台付甕底部で、色は外が橙褐色、内が灰黒色。6は1/2ほど残存する球状胴部の布留系甕で、外面肩部にはタタキのち縦ハケ、下位は横ハケを施し、外面中位下部は板ナデのちナデを施す。内面はハケのちナデ。外面には二次加熱痕及び黒斑があり、色は淡黄褐色～灰黄色が基調。

7・8は畿内系精製高坏。7は覆土下層出土の高坏坏部口縁部で、内外面とも剥離が顕著である。色は灰橙色。8は脚裾部で、外面には黒斑が認められ、色は橙褐色。屋内土坑2出土。

9～12は在地系鉢である。9は直立する口縁部に扁球状の胴部を持ち、胎土には細粒を多く含み、色は橙褐色。10は弱く外傾する口縁部で、外面胴部中位には黒斑あり。色は褐色。11は碗状の鉢で、外面中位以下はケズリを施す。色は橙褐色～灰黄色。12は小さな平底の小型鉢。色は黄褐色を基調とする。

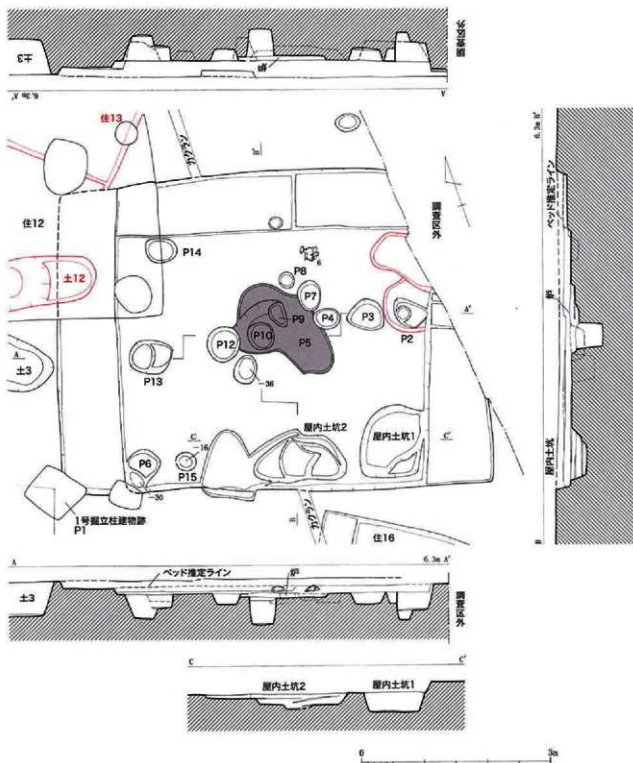
13は弥生中期の甕棺胴部片。低平な三角突帯を貼り付け、色は黄褐色を呈する。混入品。

16号竪穴住居跡（図版10、第32図）

7区北中央の東壁際、15号住居跡の南に位置する。住居北東隅は調査区外で、住居北西から住居中央にかけて排水管による攪乱を受ける。また、当初住居北東隅に当住居を切る土坑が存在すると考え掘り下げたが、調査途中で下層の遺構（19号土坑）の一部を誤って掘り下げていることが分かり、住居北東隅の大部分を掘り失った。

住居規模は南北270cm×東西440cmの東西に長い長方形住居で、住居竪穴部中央で深さ20cmを測る。住居東西壁にはベッド状遺構を付設し、東側ベッドは高さ15cm、幅83cm、西側ベッドは高さ15cm、幅63cmを測り、19号土坑をベッド上面で検出できたことからいずれも地山削り出しベッドとなる。

竪穴部床面では、ビット5基、屋内土坑1基検出した。深さからP5・6が主柱穴の可能性が高いものの、いずれも南側に偏るため主柱穴と断定するには躊躇する。炉も確認できなかった。



第33図 15号竪穴住居跡実測図 (1/60)

住居竪穴部北壁中央で検出した屋内土坑は、東西93cm以上×南北120cm、深さ60cmを測り、北側に複数のテラスを持つ。住居埋土は灰黄色粘質土を基調とする。

出土土器から古墳時代前期前半の住居跡と考えられる。

出土土器(図版35、第34図14～23) 14は在地系複合口縁壺。色は黄褐色。15は凸レンズ

底の在地系甕底部で、底部外面にはハケを施す。色は外が灰黄色、内が灰黒色。P 6 出土。16 は小さな平底・厚底の畿内系甕底部で、外面はヘラナデ、底部外周は工具によるケズリ、中央はナデを施す。胎土には細粒をやや多く含み、色は外が灰茶色、内が灰黄褐色。P 6 出土。17 は凸レンズ底の甕底部で、色は黄褐色を呈する。P 2 出土。18 は在地系甕口縁部で、口縁端部はナデにより窪む。色は灰黄褐色。

19 は在地系高坏坏部で、長く外反する口縁部と碗形の体部との境はやや不明瞭。口縁部内面にはスガが付着し、色は黄褐色を基調。20 は小型の在地系鉢で、口縁内端部はわずかに肥厚させる。色は黄褐色。21 は小型鉢底部で、突出する丸底となる。色は黄褐色。

22 は弥生前期後半の壺口縁部。口縁部は肥厚させ、内外面にはミガキを施す。色は外が灰黄色、内が灰黒色を呈する。P 5 出土。23 は弥生時代前期末の亀ノ甲系罐甕で、口縁端部と口縁部下突帯端部には棒状工具による、押し引き傾向の小さな刻目を密に施す。色は外が黄褐色～暗灰褐色、内が黒色。P 5 出土。22・23 は混入品。

17 号竪穴住居跡（図版 11、第 35 図）

7 区北中央の南寄りに位置する。当住居は 22 号住居跡北西隅壁・4 号土坑と近接し、切り合い関係を持つと考えられるが、22 号住居跡とは出土土器の比較から当住居跡の方が新しく、4 号土坑との切り合いの前後関係は不明である。住居南東隅は調査区外で、住居北東隅は排水管による攪乱を受ける。

住居規模は南北 365cm × 東西 490cm の東西に長い長方形住居で、住居竪穴部中央で深さ 30cm を測る。住居西壁前面及び北東部にはベッド状遺構を付設し、西側ベッドは高さ 18cm、幅 90cm、北東側ベッドは高さ 11cm、幅 80cm を測り、いずれも地山削り出しのベッドとなる。

竪穴部床面では、ビット 5 基、屋内土坑 1 基検出した。主柱穴は位置・深さから住居短軸の P 1・4 や長軸上に位置するが対の主柱穴は未検出の P 6 や屋内上坑内柱穴状の掘り込みなども主柱穴及び住居補助柱の候補に上がり、断定しがたい。P 1 から東側に延びる細長い溝は住居内仕切り溝の可能性もある。また P 7 は妒である。

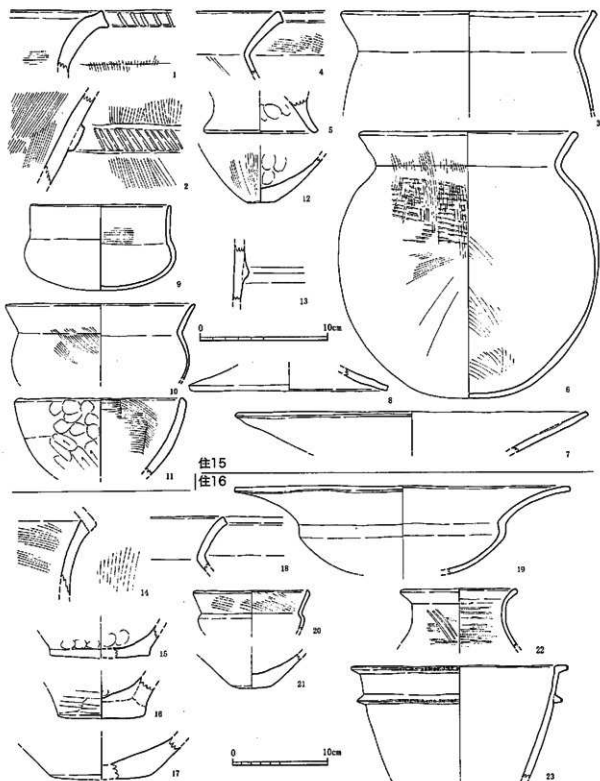
住居南東隅に位置する屋内土坑は東西 245cm × 南北 193cm、最も深さがある南東隅で深さ 1m を測る大型の土坑であるが、上坑の形状から複数の土坑と一緒に掘ってしまった可能性がある。

また住居埋土 5・6 層は炭を多く含むことから、住居廃絶時に住居建材を燃やしたもののか。

覆土からスクレイパー 3 点（第 91 図 3～5）が出土した。

出土土器から古墳時代前期後半の住居跡と考えられる。

出土土器（図版 35、第 36 図） 1 は口縁部が逆ハの字状に開く広口甕である。焼成はやや甘く、色は橙色。2～8 は在地系甕。2 は胴が張らない小型長胴甕で、色は灰黄色。3 も胴が張らない長胴甕で、胴部外面はタキのち一部ハケを施す。色は黄褐色。4 は口縁部外面にタキ痕と外面肩部に黒斑あり。色は灰黄褐色。5 の色は黄褐色。6 は口縁端部にハケ工具による密な刻目を施す。口縁部内面は一部黒化する。色は茶褐色。7 は口縁端部までハケを施すもので、色は灰黄褐色。内外面に黒斑あり。8 はかなり長胴の甕で、残存高は 27.5 cm を測る。外面には二次加熱及び黒斑が認められる。色は黄褐色。9 は布留系甕口縁部。口縁端部をわずかに肥厚させる。色は黄褐色。10 は球状の胴部を持つ畿内系甕で、外面は左上がりのタキのち縦



第34図 15・16号竪穴住居跡出土土器実測図（22・23は1/4、他は1/3）

ハケを施す。口縁端部はナデにより窪む。色は灰黄褐色～黄褐色。

11は在地系高坏坏部で、内外面は二次加熱痕が顕著に残る。色は黄褐色が基調。12は低脚の脚付鉢。色は灰黄褐色～黄褐色。P3出土。13は高坏脚部片。外→内方向の焼成前穿孔が1ヶ所残る。色は淡黄褐色。

14～17は在地系鉢。14は長く直立する口縁部に扁球状の胴部を持つ。色は淡橙色。15は口縁部が逆ハの字状に開く鉢で、内外面とも二次加熱痕が顕著である。色は黄褐色が基調。炉内出土。16は小型の鉢で、口縁部と胴部との境には横ハケを文様状に施し、胴部外面はミガキを施す。色は橙褐色。17は口縁部と胴部との境の屈曲が不明瞭な、ほぼ完形の小型鉢で、胴部外面は板ナデのちナデで調整する。外面には黒斑があり、色は淡黄褐色～肌色。

18は1/2ほど二次加熱による剥離が顕著な支脚で、タタキのちナデを施した上部中央は外→内方向の生乾き時の穿孔が認められる。外面全体に左上がりのタタキを施すが、最後に底部のみタタキを再度行う。色は黄褐色が基調。

19は弥生前期後半の小型壺頸部で、外面頸部はミガキ調整のちヘラ工具により3条の沈線及びその下には重弧文を施文する。色は黄褐色。20は弥生前期末の甕口縁部で、三角口縁端部には棒状工具による浅い刻目を施す。色は黄褐色。21は弥生中期前半の甕口縁部。口縁上端部には黒斑があり、色は橙褐色。22は上げ底の弥生中期前半の甕底部で、色は外が黄褐色、内が黒色。

18号竪穴住居跡（図版11、第35図）

7区北中央の南寄りの東壁際に位置する。住居東半分は調査区外であるため、住居規模は北西・南東301cm、北東・南西は現状で410cm以上、北東側ベッドが南西側ベッドと同程度の規模であったとすると、推定で住居北東・南西幅は430cmとなり、北東・南西が長い、長方形住居となる。深さは住居竪穴部中央で47cmを測る。住居北東・南西壁にはベッド状遺構を付設し、南西側ベッドは高さ27cm、幅116cm、北東側ベッドは高さ6cm、幅63cm以上を測る、いずれも地山削り出しベッドである。

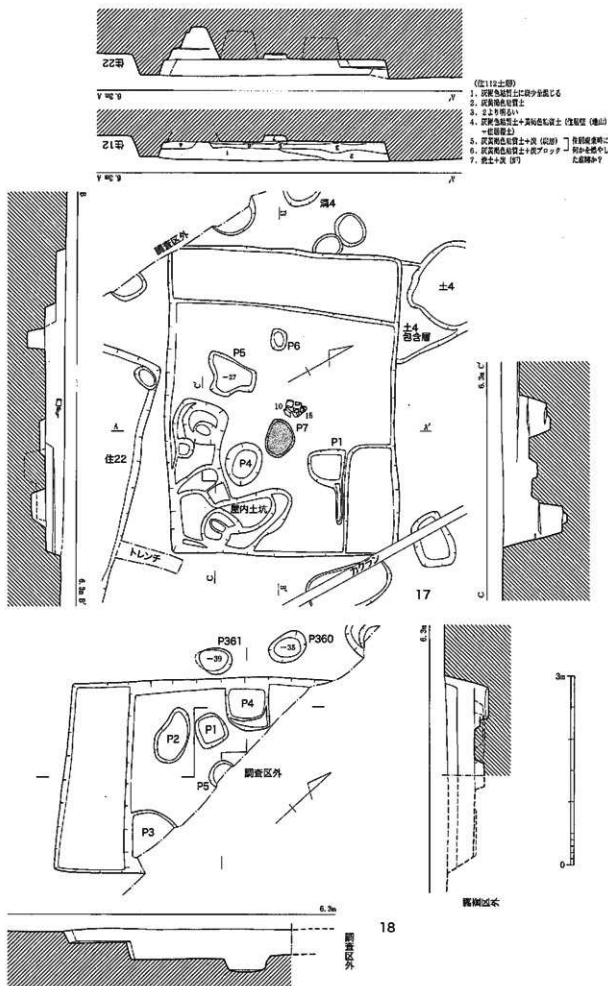
竪穴部床面では、ビット4基、屋内土坑1基検出した。位置からP5が支柱穴の可能性が高い。住居竪穴部北壁で検出した方形を呈する屋内土坑は、北東・南西70cm×南東・北西70cm、深さ22cmを測る。住居埋土は上層が灰褐色粘質土+黄褐色粘質土、下層が茶褐色粘質土である。なお、住居北壁に沿って位置するP360・361は、位置・埋土から支柱穴の可能性がある。

出土土器から弥生時代後期末の住居跡と考えられる。

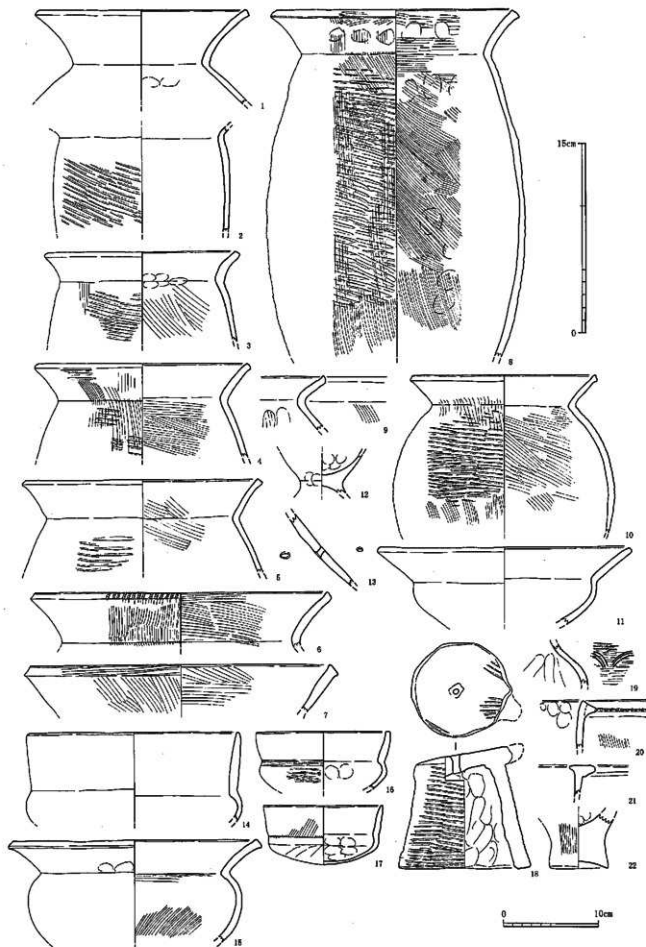
出土土器（図版35、第37図1～11）1は在地系甕口縁部である。口縁端部をヘラ工具により細かく切り取る形の刻目を施したため、口縁部内面から見ると細かい凹凸が付いたようになる。口縁端部には黒斑があり、色は外が橙茶色、内が灰色。覆土下層出土。2・3は在地系甕底部。2は小さめの平底を呈し、色は灰黄褐色。3は凸レンズ底で、色は淡灰黄色。

4は在地系の短く立ち上がる高坏の口縁部で、外面には黒斑あり。胎土には細粒をやや多く含み、色は暗橙色。5は在地系高坏口縁部で、色は橙色。6は鉢に付けた可能性が高い注口で、胎土から弥生後期に属する。外面には本体と注口を取り付ける際のハケが残り、孔径は3mmを測る。色は淡黄褐色を呈する。P2出土。

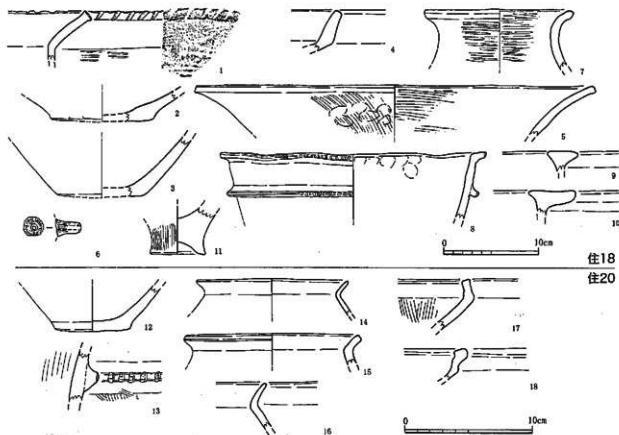
7～11は混入品。7は弥生前期後半の甕口縁部で、内外面にミガキを施す。色は白灰色。P2出土。8は弥生前期末の亀ノ甲系譜の甕で、2条の突帯端部にはヘラ工具による、押し引きによる刻目を密に施す。色は黄灰色で、P2出土。9は弥生中期前半の甕口縁部。色は淡橙褐色。10は弥生中期前半の甕口縁部。外面には甕棺から遊離した際に受けたと考えられる二次加熱痕が認められる。色は灰黄褐色で覆土下層出土。11は弥生中期前半の甕底部。外面には黒斑があり、色は黄褐色。



第35図 17・18号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第36図 17号竪穴住居跡出土土器実測図 (19～22は1/4、他は1/3)



第37図 18・20号竪穴住居跡出土土器実測図（7～11は1/4、他は1/3）

19号竪穴住居跡（図版11、第38図）

7区中央の西壁際に位置し、22号住居跡、7・8号甕棺墓を切る。住居西半分は調査区外であるため、住居規模は南北408cm×東西213cm以上、深さ48cmを測る。

床面ではビット4基検出したが、いずれも浅く主柱穴となる可能性は低い。住居埋土は上層が灰黒色粘質土、下層が灰黒色粘質土に黄褐色ブロックが混じる土となる。住居北側では床下掘り込みを確認した。

出土土器から古墳時代後期後半の住居跡と考えられる。

出土土器（図版36、第39図） 1は口縁部が内湾する土器器腕形坏である。外面体部中位まで手持ちヘラケズリを施す。内外面はミガキのち黒塗りを施す。生地は茶褐色が基調。2～4は坏部中位で屈曲させた土器器高坏坏部。2は屈曲部が粘土接合部となり、そのまま突帯状に仕上げる。脚部との接合は付加法となる。外面には二次加熱が認められ、色は黄土色～橙褐色が基調。3は充填法で脚部を接合したもので、屈曲部は突帯状に仕上げる。内外面とも最終調整はミガキ仕上げ。色は橙褐色。4は器壁の薄いもので、内外面とも二次加熱が顕著。色は灰黄褐色が基調。

5～9は土器器裏である。5の外面は二次加熱により、器表が荒れる。色は外が橙褐色、内が灰黄褐色が基調。6はくの字形口縁の甕で、内面頸部付近までヘラケズリを施す。色は橙色。7は2/3ほど残存するもので、口径21.2cm、器高21.2cmを測る。外面肩部以下は縦ハ

ケのち横・斜め方向の粗いハケを施し、内面底部にはコゲが付着する。外面は二次加熱痕があり。胎土には大きめの細粒を多く含み、色は黄褐色が基調。8・9の内面は頸部までヘラケズリを施し、外面は二次加熱が顕著な小型甕。8の色は灰黄色が基調。9は薄くススが付着し、色は灰黄色。覆土下層出土。10～12は小型丸底壺。10は2/3ほど残存するもので、口径6.6cm、器高6.3cmを測る。胴部外面下位は手持ちヘラケズリのちナデ調整。色は灰黄褐色。11の色は灰黄色。覆土下層出土。12は球状の胴部を持ち、肩部外面には黒斑がある。色は橙褐色。覆土下層出土。13は土師器鉢で、胴部下部は手持ちヘラケズリ、内面胴部上位はハケ後ナデを施す。外面には黒斑あり。色は黄褐色。

14～16は混入品。14は土師器二重口縁壺で、口縁端部を外につまみ出し、口縁部と頸部との屈曲は鈍い。内面は頸部までヘラケズリを施す。色は淡灰黒色。15は弥生後期広口壺口縁部で、水平まで屈曲させた口縁端部にはハケ工具により、山形文を施文する。色は黄褐色。16は弥生中期前半の甕口縁部。口縁端部をヘラ工具によりやや右斜め方向に刻む。色は暗橙褐色。

20号竪穴住居跡(第38図)

7区北中央の北寄りに位置する。12号住居跡に切られ、13～15号住居跡、12号土坑を切る。また南壁中央で3号土坑と接するが、切り合いの前後関係は不明である。12～15号住居跡で先述したため詳述は避けるが、調査時の切り合いの認識は誤りで、住居北東部の大半、南東部の大半、西壁の一部を掘り失った。

住居規模は南北395cm×東西300cm程度の南北にやや長い長方形住居で、深さ18cmを測る。床面ではピット2基・屋内土坑1基検出した。埋土に炭を非常に多く含むP1が炉となるが、支柱穴は不明である。屋内土坑は西壁中央北寄りに位置し、南北70cm×東西38cm、深さ22cmを測る。住居埋土は黄茶褐色粘質土に焼土・炭を多量に混じる土である。

覆土から打製石鏃(第91図1)が出土した。

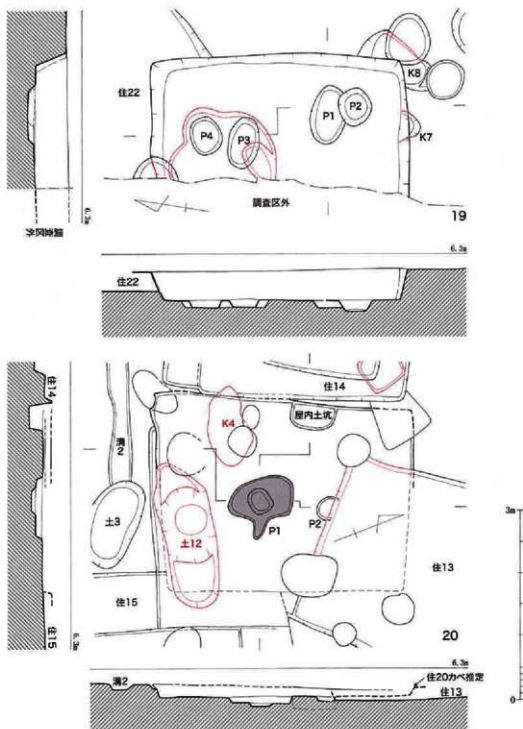
出土土器は古墳時代前期前半のものが多いが、切り合い関係から古墳時代中期に下る住居跡である可能性が高い。

出土土器(第48図11～20) 12は凸レンズ底の在地系甕底部で、外面は二次加熱痕が顕著である。胎土には細粒をやや多く含み、色は黄褐色。13は在地系大型甕胴部で、断面台形を呈する突帯端部にはハケ工具による浅い刻目を密に施す。色は橙褐色。14～16は小型丸底鉢口縁部。14は畿内系精製鉢で胎土は精良、色は橙色。15は在地系で、口縁端部はナデにより窪む。色は白黄褐色。16も畿内系で、外面は二次加熱痕があり、色は黄褐色。

17は口縁部が短く直立する在地系高坏口縁部。内面には黒斑が認められ、色は黄褐色。18は口縁端部が玉縁状に肥厚した在地系高坏口縁部。外面には二次加熱痕があり、色は黄橙色。P1出土。

21号竪穴住居跡(図版12、第40図)

7区中央の東壁際に位置し、5・6号甕棺墓を切る。当住居西壁で接し、切り合い関係を持つと考えられる22号住居跡とは、出土土器の比較から当住居跡の方が新しい。住居北東隅は調査区外で、住居北西隅から南壁中央やや西寄りにかけて排水管による擾乱を受ける。



第38図 19・20号竪穴住居跡実測図 (1/60)

住居規模は南北380cm×東西695cmの東西に長く、少し歪んだ大型の長方形住居で、住居竪穴部中央で深さ28cmを測る。住居東～西壁中央にかけて、高さ4cmのL字形の地山削り出しによるベッド状遺構を付設する。なお、本ベッド状遺構検出時に5号甕棺墓墓域をビットと考え掘り下げたため、ベッド西側を掘り飛ばしてしまったが、5号甕棺墓の状況からベッドの範囲はおおよそ破線で示した範囲となろう。

竪穴部床面では、ビット 16 基、屋内土坑 1 基検出した。P 14 は炉であり、主柱穴は住居長軸では P 15 と屋内土坑、住居短軸では P 3 と P 8 が位置・深さから主柱穴、また深さのある P 1・4・5・9・10 が主柱穴を支える補助的な柱穴であった可能性がある。なお、P 8 内部には炭が充填されていた。18・29 は屋内土坑出土。

埋土は灰褐色粘質土を基調とし、壁際には住居壁土である黄褐色粘質土が一部堆積し、竪穴部床面直上には炭層が堆積する。住居竪穴部では床下掘り込みを確認した。

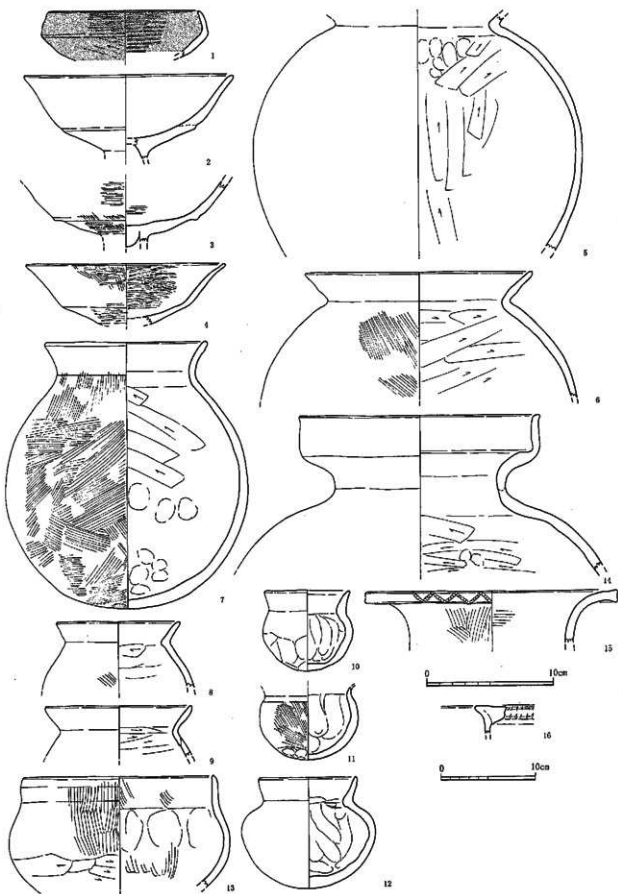
出土土器から古墳時代前期前半の住居跡と考えられる。

出土土器（図版 36、第 41・42 図） 1～10 は在地系壺。1 は複合口縁壺系譜の壺で、端部に棒状工具による刻目を密に施した突帯を口縁下に貼り付けるため、二重口縁状となる。胎土には細粒をやや多く含み、色は灰褐色～黄褐色。2 は広口壺で、口縁端部にハケ工具による刻目を密に施す。外面にはスズが付着し、色は橙褐色。3・4 は直立する口頸部から口縁部を強く外反させた直口壺。3 は外面に黒斑があり、色は暗灰黄色。4 の色は灰褐色。5 は直口壺で、端部はハケ工具による刻目、口縁部と頸部との境には棒状工具による刺突文を施す。色は外が橙褐色～灰黄色、内が橙褐色。6 はやや外傾する短頸直口壺で、端部は工具による刻目を施す。色は淡黄褐色。7 は肩が張る直口壺で、胎土には細粒をやや多く含み、色は黄褐色を基調とする。8 は外反する長い口縁部の広口壺で、焼成はやや甘く、色は橙色。9 は口縁端部にハケ工具による刻目を施したやや大型の広口壺口縁部で、色は黄褐色。10 は在地系大型壺口縁部で、口縁外面にはハケ工具による短斜線文、口縁上端部には刻目を施す。色は橙色。

11～19 は在地系甕。11 はくの字形に屈曲する、弥生後期前半の甕口縁部で、外面には二次加熱が認められる。色は黄褐色。混入品。12 の外面には黒斑があり、色は橙褐色。13 の胴部外面はタタキのち部分的なナデが認められる。外面には二次加熱痕・スズがあり、色は橙灰色。14 の胴部外面には黒斑があり、色は黄褐色～橙褐色。15 はほぼ直立する口縁部で、外面には黒斑が認められる。色は灰黄色が基調。16 は胴が全く張らない器形で、外面には黒斑が認められる。色は灰黄色を基調とする。覆土下層出土。17 は口縁外端部下及び内面頸部に粘土継ぎ目が残る。色は灰黄色。18 は台付甕底部で、脚部は欠損する。底部には二次加熱痕があり、色は外が橙褐色、内が黄褐色。

19 は碗状の坏部の畿内系低脚高坏で、脚部には外→内方向の焼成前穿孔が 2ヶ所残存するが、本来は 4ヶ所穿孔されていたと考えられる。色は黄褐色。20 は付加法で接合した高坏脚部。外面には二次加熱が認められ、色は外が橙色、内が灰黄色。21 は精製の畿内系小型高坏で、脚部外面にはハケを施す。孔径 6mm ほどの外→内方向の焼成前穿孔が 1ヶ所残る。色は橙褐色。

22・23 は在地系小型丸底鉢である。22・23 はほぼ直立する、内湾気味の長い口縁部と扁球状の胴部を持つ。22 は精製品で、外面底部付近はミガキ前にケズリを施す。色は橙褐色。23 は胎土に細粒を多く含み、色は橙褐色を基調とする。24 は畿内系小型丸底鉢。外面底部付近には工具ナデを施し、色は黄褐色を呈する。25 は在地系鉢で、色は橙色。覆土下層出土。26 は在地系小型甕で、胴部内面の一部は黒化する。色は黄褐色。27 は在地系丸底鉢口縁部で、外面胴部中位以下は工具ナデを施す。色は淡黄褐色。28・29 は在地系碗状鉢である。28 の外面底部は工具ナデ調整で、外面には二次加熱痕が顕著に認められる。色は橙色。29 はほぼ完形のもので、口径 16.0 cm、器高 8.2 cm を測る。外面体部中位以下はケズリを施し、色は黄褐色～橙褐色。30 は口径 28.4 cm を測る大型の在地系鉢である。口縁端部には工具による刻目を



第39図 19号竪穴住居跡出土土器実測図（16は1/4、他は1/3）

施し、外面肩部は下のハケが上のハケを切る。色は黄褐色が基調。31は小さな平底の小型甕か鉢底部。外面には二次加熱痕が認められる。色は橙褐色。32・33は支脚。32の色は黄褐色～橙褐色。33は一部が嘴状に突出した支脚で、外面は全体的に二次加熱痕が認められる。色は黄褐色～橙褐色。

34～40は混入品。34～38は弥生中期初頭～前半の甕口縁部。34・35は玉縁状口縁で、35～37は口縁下に鈍い三角突帯を巡らす。34の色は黄褐色。35の色は灰黄色。36の色は淡黄褐色。37は台形口縁部が外に突出し、三角突帯の位置がやや下がった甕。色は灰黄色。P1出土。38はL字状に外折した口縁部で、色は茶褐色。39は弥生中期前半の上げ底・厚底の甕底部で、外面には二次加熱痕あり。色は褐色。40は古墳後期の土師器甕底部。外面はケズリ状の工具ナデを施し、色は橙色～灰黄色。

22号竪穴住居跡（図版12・13、第40図）

7区中央の西壁際に位置し、19号住居跡に切られる。当住居と接する17・21号住居跡とは、切り合い関係を持つと考えられるが、出土土器から両住居より当住居の方が古い。住居南西部は調査区外、住居南側は19号住居跡に壊されるため、住居規模は南北460cm以上×東西493cmのおそらく南北に長い長方形住居で、住居竪穴部中央で深さ33cmを測る。

床面ではビット7基検出し、深さ・位置からP4が主柱穴となる可能性がある。住居北東床面のトーンで示した範囲には焼土・炭が薄く広がる。住居床面から少し浮いた状態で、完形の甕（1）や土器群（6・9・10）が出土した。住居埋土は暗灰褐色粘質土。

覆土からスクレイパー2点（第91図6・7）が出土した。

出土土器から古墳時代前期前半の住居跡と考えられる。

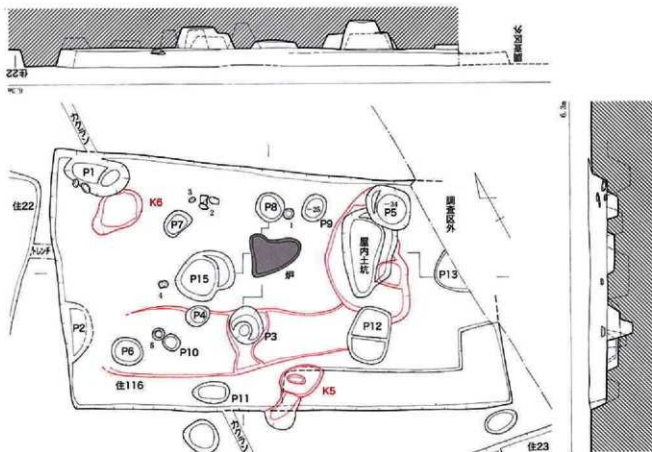
出土土器（図版36、第43図） 1は小さな平底を残す完形の在地系直口壺。口径8.5cm、器高19.8cmを測り、外面胴部中位以下はハケのちナデを施す。外面には黒斑があり、色は黄褐色を基調とする。2～4は在地系甕底部。2は凸レンズ状底で、外面には二次加熱痕が認められる。胎土には細粒をやや多く含み、色は灰黄色。3は小さめの平底で外面に黒斑があり、色は外が灰色、内が灰黄褐色。4は外面には板ナデ痕あり。胎土には石英をやや多く含み、色は橙褐色。覆土下層出土。5は在地系大型甕胴部で、板状工具により突帯端部に刻目を密に施す。外面のハケは突帯を貼り付けた後に行う。色は橙褐色。

6～9は在地系甕。6の外面肩部は左上がり方向のタタキのちに平行タタキを施す。外面胴部中位にはススが附着する。色は灰橙褐色。

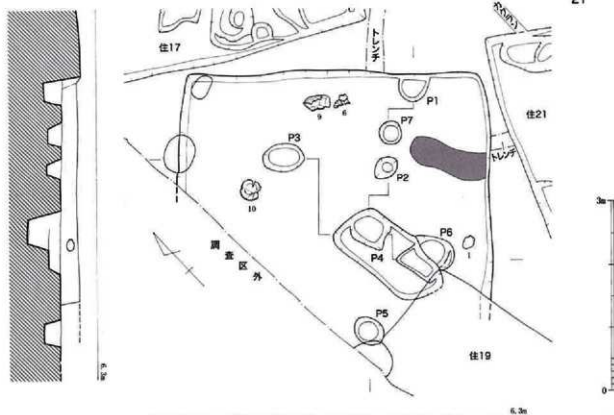
7は胴部内面のハケは下が上を切る。色は淡灰黄色。8の外面は左上がり方向のタタキのちに平行タタキを施す。外面肩部及び胴部中位にはススが附着し、色は灰黄色。9は3/5ほど残存したもので、口径24.6cm、器高36.5cmを測る。底部は尖底で、外面胴部下位及び口縁部はタタキのちハケを施す。外面には黒斑があり、色は白黄褐色を基調とする。



7区22号住居跡出土状況①
（北東から）

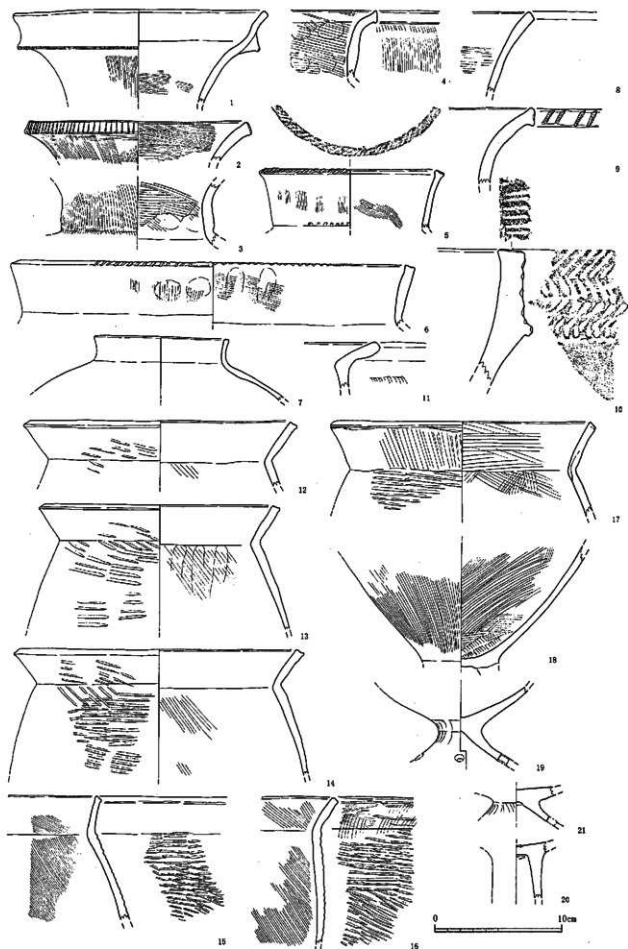


21

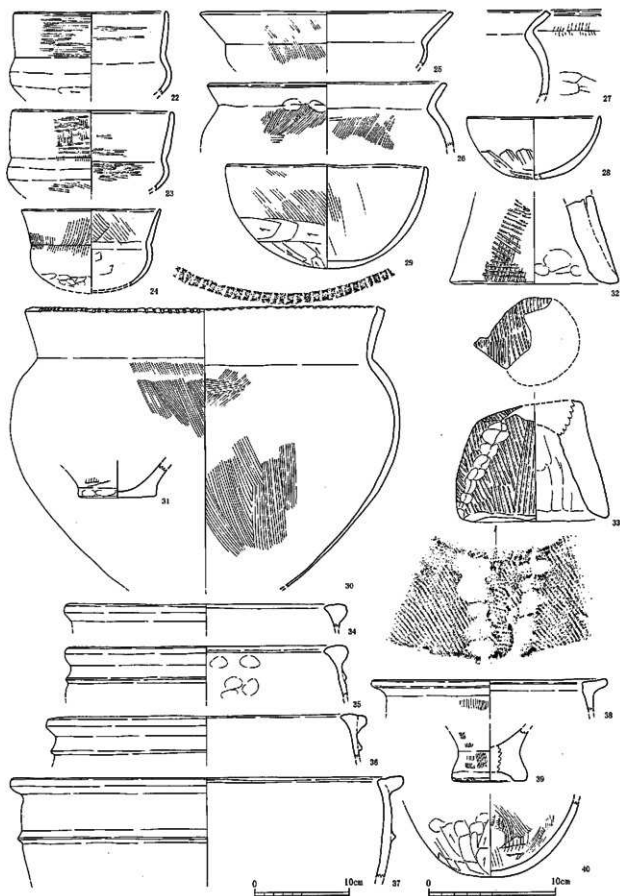


22

第40図 21・22号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第41图 21号竖穴住居跡出土土器実測图(1)(1/3)



第42図 22号竪穴住居跡出土土器実測図(2)(34~39は1/4、他は1/3)



22 号住居跡出土状況②（北西から）



22 号住居跡出土状況③（北西から）

10～12 は在地系高坏。10 は坏部内外面ともミガキを施し、外面のみスリップを施す。口縁端部には黒斑があり、脚部との接合部は貼り付けやすくするために工具により刻目を施す。生地は黄褐色。覆土下層出土。11 の脚部外面には縦ナデの稜がよく残り、坏部底部は工具により窪む。色は淡褐色。12 は脚部で、外面には黒斑あり。色は橙褐色。13 は精製の畿内系低脚高坏で、坏底部は工具により窪む。脚部には外一内の焼成前穿孔が3ヶ所認められる。色は橙褐色。14 は在地系小型丸底鉢で、色は黄褐色。15 は深い碗状の在地系大型鉢で、底部付近はヘラケズリのちハケを施す。内外面ともハケが下→上方向となる。色は灰色。P1 出土。

23 号竪穴住居跡（図版 13、第 44 図）

7 区中央の東壁際、25 号住居跡の北に位置する。住居東側は調査区外で、住居規模は南北 337cm × 東西 383cm 以上の東西に長い長方形住居で、竪穴部中央で深さ 35cm を測る。

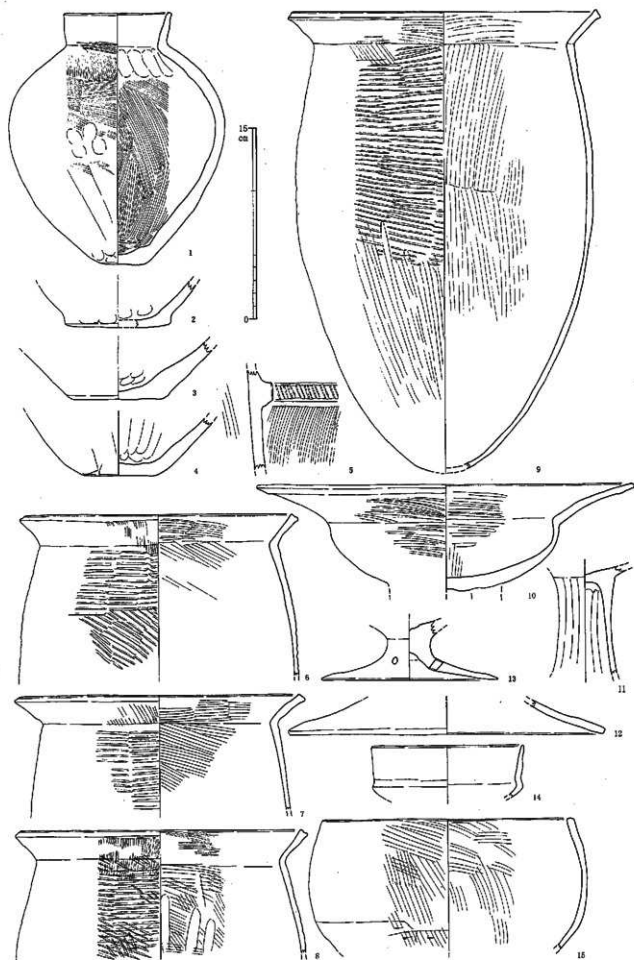
住居北西・北・南壁にはベッド状遺構を付設し、北西側ベッドは高さ 13cm、幅 75cm 前後、南西隅が崩落のため段が付いた北側ベッドは、高さ 16cm、幅 96cm、南側ベッドは高さ 12cm、幅 65cm を測り、いずれも地山削り出しベッドとなる。

竪穴部床面では、ビット 8 基検出し、位置から P3・7 が主柱穴の可能性が高いものの、P7 が深さ 10cm ほどであるため、断定できない。また、埋土に炭を多く含む P6 が妒である。

住居埋土はレンズ状に堆積し、床面直上には炭を多く含む 7 層が堆積する。また、住居竪穴部南側では床下掘り込みを確認した。

出土土器から古墳時代前期前半の住居跡と考えられる。

出土土器（図版 37、第 45・46 図） 1～3 は在地系大型壺口縁部。1 の口縁部外面にはハケ工具による左→右方向の斜格子文を施し、その後同じハケ工具により、口縁上端と外端部及び口縁と口頸部との境の突帯上に刻目を密に施す。内外面には黒斑があり、色は灰黄色。2 は口縁部外面にハケ工具による上下 2 段の短斜線文を施す。外面はうすく黒変し、色は黄褐色。3 は口縁部外面に同じ原体による上 5 条・下 8～10 条の波状文及び口縁外端部及び突帯上に工具による浅い刻目を施す。色は橙褐色。4・5 は在地系壺。4 は長胴の広口壺で、外面頸部はタタキのちハケを施す。色は灰黄色。5 は肩部にハケ工具により「C」字状の文様を施す。7 区 13 号住居跡出土土器（第 28・29 図 2・5、第 45 図 5）にも類例がある。胎土には細粒を多く含み、色は橙色。



第 43 图 22 号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

6は口縁部がやや長めの在地系甕。胎土は精良で、色は橙褐色。7は在地系高坏口縁部。口縁部と体部との境には工具による沈線を1条巡らせる。色は黄茶色。8は精製の在地系高坏。脚部との接合部にはヘラ工具による山形の刻目を行い、貼り付けやすくする(図版37)。内面のミガキは口縁→底部方向に施し、外面は黒変する。色は外が黄褐色、内が灰色を呈する。覆土下層出土。9は在地系大型鉢で、口縁端部は肥厚させる。色は黄褐色。10はいわゆる有明海沿岸型器台の脚部。外→内方向のほとんど乾いた状態で施した穿孔が1ヶ所残る。色は灰黄色。

11は覆土上層から出土した内面朱付着土器で、内面全体と把手のほぼ全面に朱が付着し、いずれも土器表面の細かな亀裂等の胎土深くまで朱が染み込み、内面の方が朱の付着が顕著である。器形は把手と体部の一部しか残存していないため不明であるが、弥生時代後期終末の在地系甕底部に下部にエラ状の突起が半円形に巡る把手と胴部をそのままを利用した立ち上がりをも有すると考えられる形状である。把手外面は一部工具ナデのちナデ調整、体部外面は被熱のため摩滅しているがハケのちナデを施した可能性が高く、内面はナデで調整する。外面把手及び体部下部はススが付着し、胎土には石英系の主体とする細粒が混じり、焼成は良好で、色は黄褐色を呈する。

本例は福岡県行橋市辻垣長通遺跡出土の朱付着土器(広片口三耳鉢)の尾部把手付近の形態に似ており(第46図14)、本例は尾部把手付近の小片であるが、甕を利用し、把手を有することからその類であると判断した。辻垣長通遺跡出土広片口三耳鉢例は甕を縦半裁にして、尾部と両側面に把手を付け、尾部に立ち上がりを設けている。報告者はこの広片口三耳鉢の用途について、尾部把手の反対側の甕の口縁にあたる方が片口となり、両側面の把手を抱えて、他の容器に液体の朱を注ぐと推測する。

なお、本例は140号住居跡出土の内面朱付着在地系甕(第75図10)と同一個体となる可能性があり、そうすると辻垣長通遺跡広片口三耳鉢とほぼ同一の器形となるか。

12は弥生前期末甕口縁部で、口縁外端部にやや先の丸い工具による刻目を密に施す。色は黄褐色。13は弥生中期前半の三角口縁甕で、口縁外端部は二次加熱を受ける。色は橙褐色。

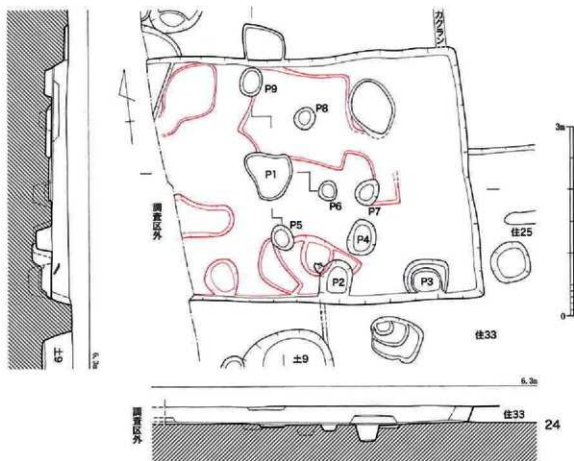
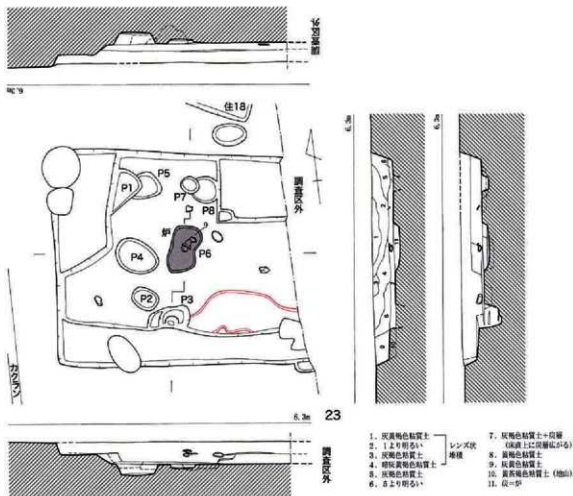
24号竪穴住居跡(図版13、第44図)

7区中央南寄りの西壁際に位置し、33号住居跡を切る。住居西側は調査区外であり、住居規模は南北385cm×東西490cm以上の東西に長く、少し歪んだ長方形住居となる。住居竪穴部中央で深さ30cmを測る。住居北西の調査区壁際で高さ6cmを測るベッド状遺構を確認した。また住居中央北東寄りで、南北90cm×東西73cm、高さ10cmの楕円形を呈する地山の削り出しによる高まりを検出したが、本遺構の性格は不明である。

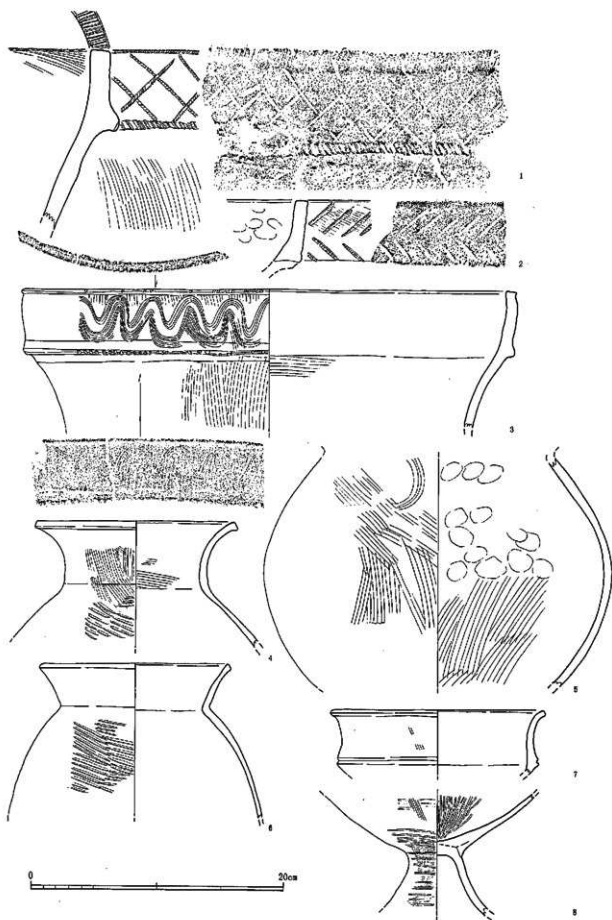
床面ではビット9基検出したが、主柱穴候補となるビットは、深さからP2・4・5・7・8があるが、確定することができない。住居埋土は上層が灰褐色粘質土、下層が灰黄褐色粘質土である。住居竪穴部はほぼ全面で床下掘り込みを確認した。

出土土器から弥生時代後期終末の住居跡と考えられる。

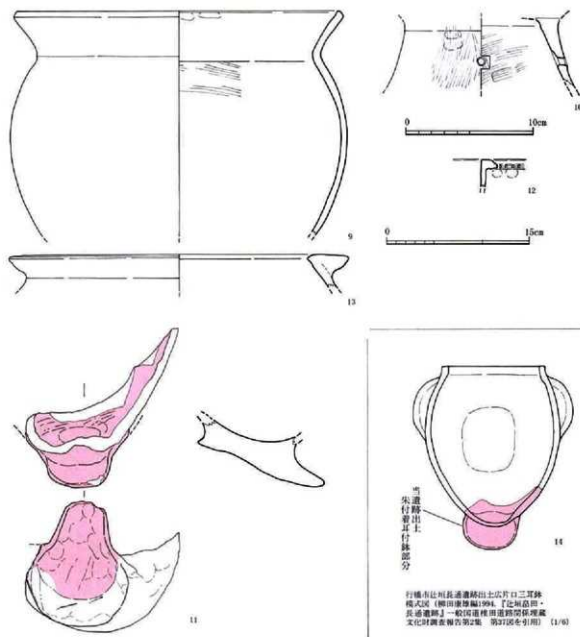
出土土器(図版37、第47図1～18) 1は在地系大型直口壺口縁部で、口縁端部は工具による浅い刻目を施す。色は茶褐色。2～7は在地系甕。2は大型甕で、口縁端部には工具による浅い刻目を施す。外面には二次加熱痕があり、色は橙褐色。3は口縁部外面全体にススが付着



第44図 23・24号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第 45 图 23 号竖穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3)



第46図 23号竪穴住居跡出土土器実測図(2)(12・13は1/4、他は1/3)

する。色は灰黄色。4・5は凸レンズ底の甕底部で、床下掘り込み出土。4の色は灰色。5の外面には工具痕、内面には粗いハケ目が認められる。5の胎土には細粒がやや多く含み、色は外が暗黄褐色、内が黒灰色。6は台付甕。6の外面には黒斑及び二次加熱痕あり。色は外が黄褐色、内橙色。7は内面朱付着土器の在地系甕胴部片で、濃いトーン部分には朱が濃く付着する。断面の朱が認められる箇所は、割れた際に付着した可能性が高い。外面はススが付着し、液状の朱を保管する容器としての甕であったと考えられる。覆土上層出土。8は碗状を呈する在地系小型高坏坏部。外面には黒斑があり、胎土は精良で、色は灰黄色。

9～12は在地系鉢。9の胴部下位はケズリを施し、外面にはススが付着する。色は暗茶褐色～黒灰色。覆土下層出土。10の色は外が灰黄褐色、内が橙褐色。11は口縁外端部がナデに

より窪み、外面は黒化する。色は灰黄色。12は小さな平底の鉢底部。色は灰黄色。13～15は手づくね土器。13の胎土は精良で、色は外が灰黄褐色、内が橙褐色。14は完形品で、口径7cm、高さ3.4cmを測る。底部付近には工具痕あり。色は黄褐色。15も完形品で、口径6.2cm、高さ3.25cmを測る。内面口縁部付近はハケのちナデを行う。色は肌色。覆土下層出土。16は在地系台付鉢の脚部。低脚である脚部には2孔1セットとなる外→内方向の焼成前穿孔を4ヶ所、計8孔施す。色は灰橙褐色～灰黄褐色。

17は弥生中期初頭頸口縁部。色は灰黄褐色。18は上げ底・厚底の弥生中期前半底部で、底部外面には黒斑あり。色は黄褐色。

19は覆土中出土の粘土塊。丁寧にナデを行った面を持ち、厚さ3cm以上を測る。胎土にはスサを少量含み、色は黄褐色を呈する。住居の土壁であった可能性がある。

25号竪穴住居跡 (図版14、第48図)

7区中央南寄りの東壁際に位置し、33号住居跡を切る。住居東側は調査区外であり、現状で住居規模は南北505cm×東西342cm以上、深さ24cmを測る。また、当住居北・南壁東調査区壁際はいずれもやや内湾することから、住居東壁は調査区壁からさほど離れない場所に位置すると考えられる。

住居西壁中央には煙道部を持つカマドを付設し、住居床面上ではビットを8基及び壁周溝を検出した。西側主柱穴は位置・深さからP3・5で4本柱の住居跡になると考えられるが、東側の主柱穴は検出できなかった。壁周溝は住居西半分のみ確認でき、深さ5cm前後を測る。

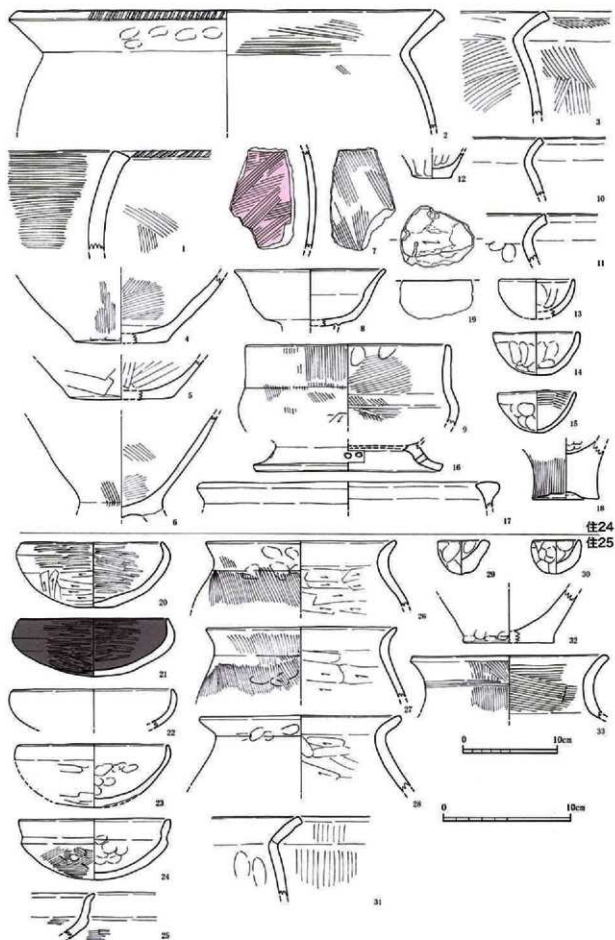
カマド下から、東西130cm×南北54cm、深さ20cmのカマド床下土坑を検出した。土師器椀形坏(19)と甕(26)が出土し、当住居跡と同時期であることから、カマド構築前に地鎮的な行為をした痕跡である可能性がある。また、住居ほぼ全面で床下掘り込みを確認した。

覆土下層から砥石(第92図22)が出土した。

出土土器から古墳時代後期末の住居跡と考えられる。

カマド 住居西壁中央に付設されたカマドで、両袖とも壁から58cmほど燃焼部を囲むようにやや内湾しつつ突出し、左袖先端部の段は掘り過ぎたものである。燃焼部奥壁から38cm手前で、大きさ6×8cmの支脚を固定した可能性が高い粘土塊(6層)を検出した。26号住居跡カマドの石製支脚はビットで固定していることから、当住居跡カマド支脚は27号住居跡カマドや当遺跡100m南に位置する山門北池遺跡で検出したカマドと同様の土製支脚であった可能性が高い。なお、支脚固定用と思われる粘土は焼けていない。燃焼部奥壁から62cm手前で、16×18cmの範囲のかなり硬化した焼面を検出した。カマドの形状は粘土塊部分で燃焼部幅は56cm、奥壁幅は30cmのやや内湾しつつ「ハ」の字状に開く平面形態となり、また奥壁側両袖断面から、かなり内湾して立ち上がる断面形態となる。

燃焼部粘土周囲の床面よりやや浮いた位置で土師器甕(25・27)及び土師器坏(20・22)を検出したが、主に2層と対応することから、これらの土器はカマドに直接使用したものでないと思われる。また、焼面周辺で長さ5cm前後の礫を7個検出したが、27号住居跡カマド内にも同様の例があり、礫は良く焼けているものが多いことから、カマド使用時に使用したものであることは確実である。5層はカマド使用時堆積土が主体となり、4・5層では山門北池遺跡



第47図 24・25号竪穴住居跡出土土器実測図 (17・18・33は1/4、他は1/3)

5区47・55号住居跡と同じく、埋土中から骨片が出土した。また1～3・8層はカマド構築土が崩落した土である。

燃焼部奥壁から西に長さ75cmほど延びる煙道部は、最も広い箇所では幅19cm、深さ2cmほど残存する。煙道部床面は中央がわずかに窪む形態で、煙道部先端にむかって緩やかに上昇する。

カマド燃焼部内より土製模造鏡（第90図5）が出土し、カマド右袖横で台石及び土師器模倣坏などが出土した。また、住居の項で先述したが、当カマド下層でカマド構築に関わると想定されるカマド床下土坑を検出した。

出土土器（図版37、第47図）20～23はいずれも胎土が精良な土師器碗形坏。20・21の外面部体部中位以下は手持ちヘラケズリを施し、胎土は精良。20は強く内湾する口縁部で、外面には黒斑が認められる。色は橙褐色。21～23は口縁部が内湾気味に直立する器形となる。21は内外面に黒塗りを施した完形品で、口径11.8cm、器高さ4.5cmを測る。生地は淡橙褐色。22の色は灰黄褐色。23の外面は口縁部近くまで手持ちヘラケズリを行った後にナデ、内面はナデを施したもの。外面は二次加熱痕及びススが付着し、色は橙褐色。24・25は受部が痕跡的となる土師器模倣坏。いずれも胎土が精良。24はやや器壁が厚く、口縁部が弱く外傾する。口縁部内外面は横ナデ、体部中位以下はハケ、内面部はナデで調整する。外面には二次加熱痕及びススが認められ、色は灰黄褐色。カマド内出土。25は口縁端部を強く外折したもの。内外面ともミガキを施す。色は橙褐色。覆土下層出土。

26～28は小型の土師器甕。いずれも内面頸部までヘラケズリを施す。26は外面に二次加熱痕及びススが付着し、色は灰黄褐色。27は口縁部内外面にススが付着し、色は灰黄褐色。P3出土。28はやや強く外反する口縁部で、色は暗茶褐色。29・30は手づくね土器。いずれも胎土は精良で、色は黄土色を呈する。29は完形品で、口径4.1cm、器高2.6cmを測る。30は外面にススが付着。

31～33は弥生後期に属する混入品。31は在地系甕口縁部。内面には黒斑があり、色は黄褐色。32は小さな平底の在地系甕底部。外面には黒斑があり、色は淡黄褐色。33は壺口縁部。口縁部と頸部との境には大半が2条、一部1条の棒状工具による浅い沈線を巡らす。外面には黒斑が認められ、色は橙褐色が基調。P3出土。

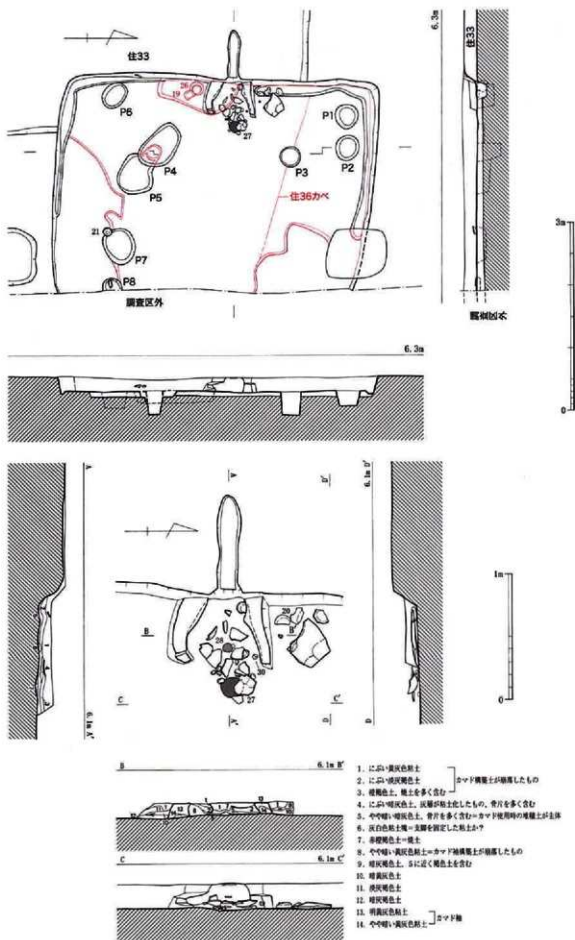
26号竪穴住居跡（図版15、第49図）

7区中央南の西壁際に位置し、33・37号住居跡を切る。カマド煙道部の大半が調査区外となる以外は残りの良い住居で、住居規模は南北550cm×東西457cm、深さ24cmを測る、南北にやや長い隅丸方形の住居跡である。



26号住居跡カマド出土状況①
（南東から）

住居西壁中央にはカマドを付設し、住居床面上ではピットを7基及び壁周溝を検出した。主柱穴は位置・深さからP1・3・4・6の4本柱住居となる。壁周溝は住居北～北東隅、東壁中央で検出し、いずれも深さ5cm前後を測る。住居埋土は暗灰褐色粘質土に黄褐色粘質土ブロックが混じる土で、住居全面で床下掘り込みを確認した。



第48図 25号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



26号住居跡カマド出土状況②（東から）

覆土下層から石製紡錘車（第92図21）が出土した。

出土土器から古墳時代後期後半の住居跡と考えられる。

カマド 住居西壁中央に付設されたカマドで、両袖とも先半分近くがカマド廃棄時にほとんど壊された状態であったため、両袖先端部は下端のみ検出したにとどまる。両袖とも壁から88cmほど直線的に突出する。

燃焼部奥壁から39cm手前で、石製支脚を検出した。石製支脚固定ピットはカマド床面

が焼けていたため（1点破線内）、平面では検出できなかったものの、カマド縦断面から深さ5cmほどの浅いピットに入れ、かつ支脚背面を焼土が主体となる粘土で支えることで固定していたと考えられる。石製支脚は長さ13.3cm、幅13.7cm、厚さ8.7cmを測り、材質は凝灰岩で、上端部分に被熱痕（トーンで示した範囲）が認められる。なお、山門北池道跡及び藤の尾垣添道跡1次調査で発見した支脚はすべて土製支脚である。

燃焼部奥壁から68cm手前で、25×20cmの範囲にかなり硬化した焼面を検出した。先述したように1点破線内の燃焼部床面は全体的に熱により地山が硬化している。支脚部分で燃焼部幅は49cm、奥壁幅は30cmの直線的に緩やかな「ハ」の字状に開く平面形態となる。

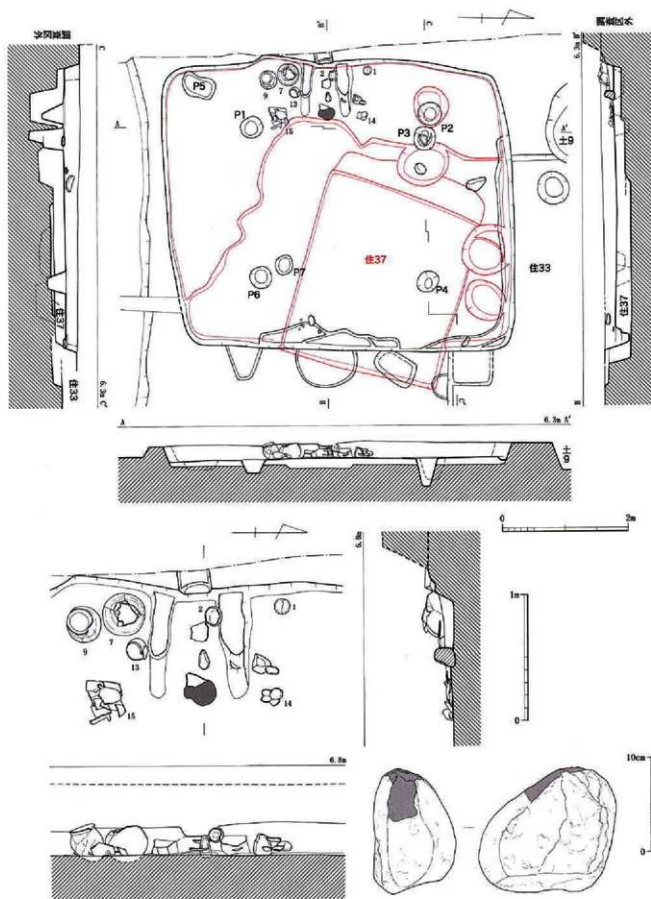
カマド埋土は上層がカマド構築土が崩落した土である灰褐色粘質土＋黄褐色粘質土、燃焼部床面上には炭を多く含む、カマド使用時堆積土が堆積する。

カマド燃焼部内から出土した土器（2）は少ないが、カマド左袖横からはほぼ完形の甕（7・9・13）、瓶（15）、右袖横からは鉢（14）・坏（1）が出土した。なお、左袖横で検出した土器群下端はカマド床面より5cmほど下がり、カマド左袖部分のみ元々窪んでいた可能性が高い。

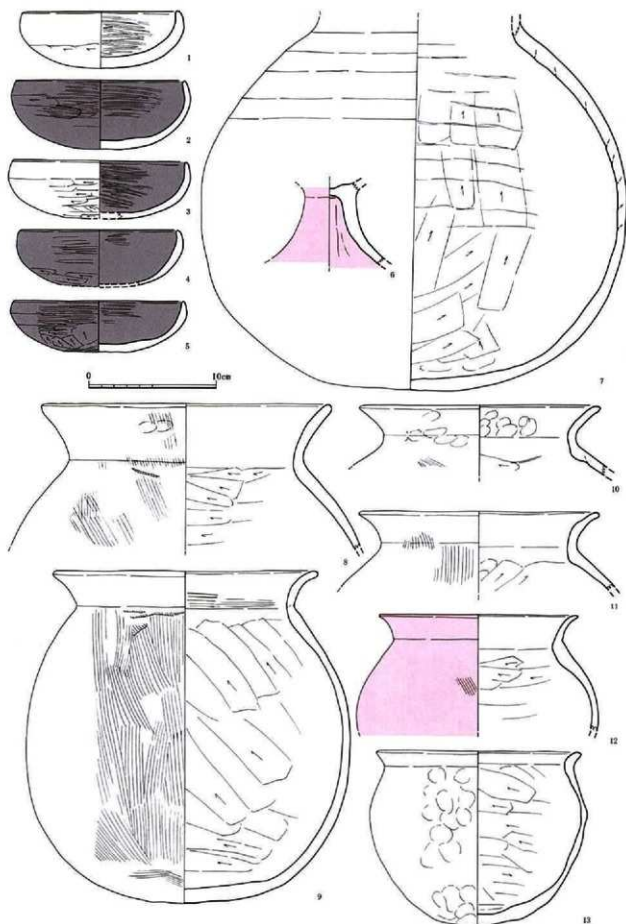
燃焼部奥壁中央で検出した煙道部はほとんどが調査区外であるため、現状で長さ18cm、幅25cmを測り、埋土は灰黒色粘質土で炭を多く含む。煙道部床面は燃焼部奥壁とは段が付き、そこから西側の先端部に向かって緩やかに上昇する。

出土土器（図版37、第50・51図1～18） 1～6はやや内湾する口縁部を持つ碗形杯で、外面体部中位～底部にかけて手持ちヘラケズリを行い、胎土はいずれも精良である。2・4・5は内外面、3は内面のみ黒塗りを施す。1・2はほぼ完形品。1は器壁が厚く、外面もミガキを施したものか。色は赤褐色が基調。2は口縁部近くまでヘラケズリを施すもので、生地は黄土色～灰黒色。3の生地は暗茶褐色。カマド内出土。4の外面のケズリ位置は低く、生地は橙褐色。5はやや低平な器形で、生地は橙褐色が基調。6は土師器高坏脚部。無い外面ともスリッブを塗布する。胎土は精良で、生地は橙褐色。覆土下層出土。

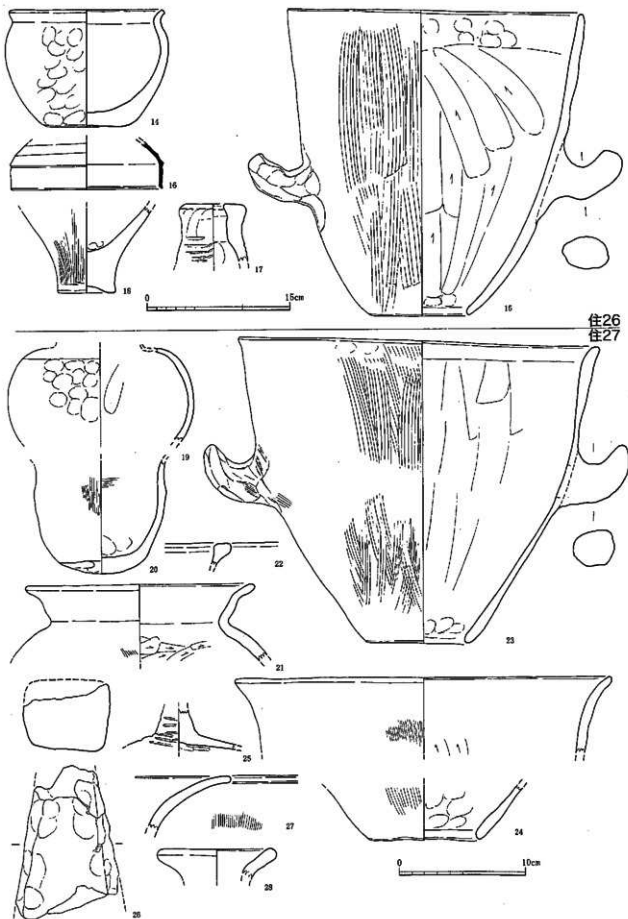
7～13は土師器甕である。7は大型品で、外面肩部はナデによる凹凸、内面肩部には粘土離れ目が顕著に残る。外面には大きな黒斑が2ヶ所認められ、色は外が黄褐色、内は黒色が基調。8は口縁部がやや長く立ち上がり気味のもの。内面頸部までヘラケズリを施す。肩部にハケ工具端部痕があるが、文様ではない。色は灰茶褐色。カマド前面出土。9は完形品で、口徑



第49図 26号竪穴住居跡・カマド・カマド支脚実測図 (1/60・1/30・1/4)



第 50 图 26 号竖穴住居跡出土土器実測图 (1) (1/3)



第51図 26(2)・27号堅穴住居跡出土土器実測図(18は1/4、他は1/3)

11cm、器高26cmを測る。外面肩部には二次加熱痕、外面全面にはススが付着する。色は灰黄褐色が基調。10は口縁部内外面に指押さえ痕が顕著に残るもので、色は暗茶褐色。11は口縁部内面に黒斑が、外面肩部には二次加熱痕があり、色は黄褐色。12は口縁部の器壁が胴部に比べ薄い小型甕で、外面全面にスリップを塗布する珍しいもの。色は外が灰褐色、内が灰褐色。13は短く外反する小型甕で、外面全体には指押さえ痕が残る。外面には二次加熱痕が顕著に認められる。色は外が灰褐色、内が橙褐色が基調。

14は平底の土師器鉢。胎土が非常に良い精製品。色は黄褐色。15はほぼ完形の土師器甕で、口径23cm前後、底径8cm前後、器高24cmを測る。外面には黒斑があり、中位以上は二次加熱痕が認められる。色は黄褐色～橙褐色を基調とする。

16は須恵器坏蓋。口縁端部はナデにより窪み、口縁部と天井部との境には鈍い稜を巡らす。色は灰色。17は弥生後期小型支脚上部片で、上部には径1.2cmほどの孔が貫通する。色は灰黄褐色。18は上げ底・厚底の弥生中期前半甕底部。色は白黄褐色～橙褐色。

27号竪穴住居跡（図版16、第52図）

7区南北寄りの東壁際に位置する。住居東半分は調査区外であり、現状で住居規模は南北500cm×東西330cm以上、深さ26cmを測る、隅丸方形の住居跡である。なお、当住居跡西側に存在する段は、重機による表土掘削の際に付いた段である。

住居床面上ではピットを6基及び壁周溝を検出した。主柱穴は位置・深さから住居隅に位置するP1・2となるが、東側の主柱穴列は調査区内では検出できなかった。幅10cm・深さ3cm前後を測る壁周溝は住居西壁中央に付設されたカマド部分以外を巡り、同じく壁周溝を検出した25・26号住居跡と比べ、やや細く・浅い周溝となる。住居埋土は上層が灰褐色粘質土、下層が暗灰褐色粘質土である。

住居全面で床下掘り込み及びピット状の窪みを確認したが、P6北に位置するピットは本来は第2面に属したピットと考えられる。

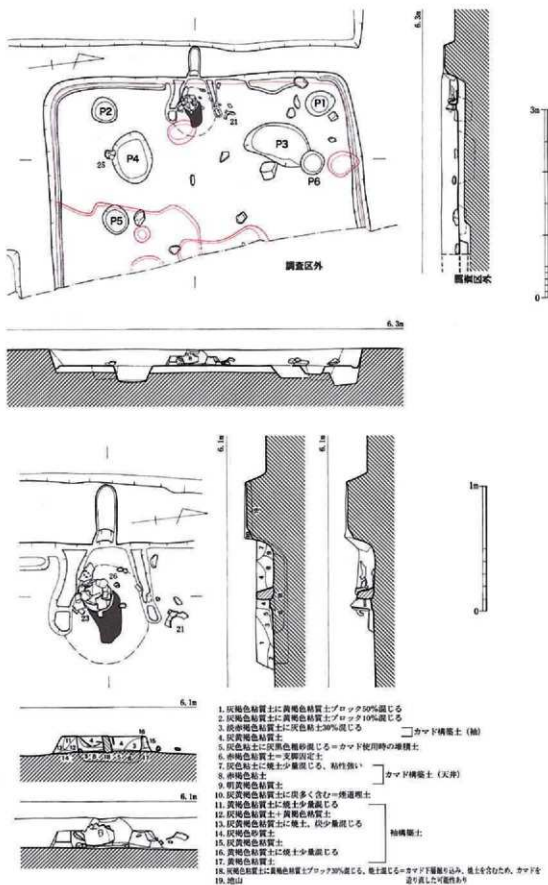
なお、この床下掘り込みから石包丁（第91図17）と覆土から複数の台石が出土したが、台石で固化したのは明瞭な使用痕が認められた1点のみ（第92図28）。

出土土器から古墳時代後期後半～末の住居跡と考えられる。

カマド 住居西壁中央に付設されたカマドで、右袖は64cm、左袖は72cmほど壁から直線的に突出する。両袖先端部の段は掘り過ぎたものである。燃焼部奥壁上端は煙道部と対応するように3cmほど西側に突出する。燃焼部奥壁から30cm手前で土製支脚（26）を検出し、その支脚前面・横で43×25cmの範囲にかなり硬化した焼面を検出した。また、その前面の1点破線内

No.	出土場所	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重さ (g)	石材	試験	備考
1	住27カマド内	6.1	4.5	1.6	62.0	千板岩	×	
2	住27カマド内	6.3	4.7	2.3	101.5	千板岩	○	2面被熱
3	住27カマド内	7.0	4.0	3.5	123.5	凝灰岩	○	1面被熱
4	住27カマド内	6.7	6.2	2.7	156.2	凝灰岩	○	2面被熱
5	住27カマド内	7.2	5.6	3.1	158.9	凝灰岩	○	1面被熱
6	住27カマド内	6.7	5.0	1.6	74.6	凝灰岩	○	2面被熱
7	住27カマド内	5.3	5.2	3.7	136.2	凝灰岩	○	2面被熱
8	住27カマド内	8.2	5.0	4.8	215.6	凝灰岩	○	全面被熱、強く火を受け、ヒビあり

第4表 27号住居跡カマド出土土器計測表



第52図 27号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

は燃焼部床面に炭が広がる範囲を示す。カマドの形状は土製支脚部分で燃焼部幅は50cm、奥壁幅は27cmの「ハ」の字状に開く平面形態となる。土製支脚は燃焼部床面にそのまま置き、その前面に粘土を配することで、固定していたと想定されるが、カマド前面の粘土は熱により硬化面の一部となっていたため、浅い掘り込みがあった可能性がある。

カマド燃焼部内では床面上で土師器甕(23)を検出したのみで、カマド袖構築土の崩落土である4層と対応することから、カマドに直接使用したものである可能性が高い。また焼面周辺で長さ5cm前後の礫を9個検出したが(第4表)、先述したように25号住居跡カマド内にも同様の例があり、礫は良く焼けているものが多いことからカマド使用時に使用したものであることは確実であろう。カマド埋土は3・4・7～9層がカマド構築土が崩落した土、5層はカマド使用時堆積土となる。また、カマド下層掘り込みである18層は焼土を含むため、当住居跡カマドは造り直しを行った可能性がある。

燃焼部奥壁から西に長さ43cmほど延びる煙道部を検出した。煙道部の幅は15cm程度、深さは2cm以下と非常に残りが悪く、床面が緩やかに上昇しながら先端部に至ることを考えると、本来はまだ長く、先端部はカットされている可能性が高い。

カマド左袖横で土師器甕(21)が出土した。

出土土器(図版38、第51図19～28) 19は球状の土師器壺胴部で、やや長めの直口する口縁部が付くものか。外面胴部中位以上は指押さえ痕が顕著である。外面には二次加熱痕・スス認められる。色は黄橙色。20は肩・胴部共に張らない土師器小型甕胴部片で、短く強く相反する口縁部を持つ。外面には黒斑及び二次加熱痕あり。胎土は良く、色は茶色。22は口縁端部をさらに外側に屈曲させた土師器甕。内面肩部付近のケズリの幅・長さは短い。色は淡黄橙色。22は玉縁状口縁の土師器鉢口縁部。色は橙色。カマド右袖外出土。23・24は土師器甕。23は器形全体に歪みが認められる。内面のケズリは浅い。色は淡橙褐色。24は胴部大半が欠損する同一個体の甕口縁部と底部。色は橙褐色～黄褐色。25の外表面はタタキのちナデ、内面はナデ調整を行った、カマドで使用したと考えられる蓋状土製品。外面にはスス・二次加熱痕認められ、色は茶色。類例が山門北池遺跡16号住居跡にある。26は長台形状のカマド土製支脚で、背面側は支脚固定用の粘土と接していたため、剥離する。また上端面・下端面も欠損する。外面には二次加熱痕が認められ、胎土にはスサを含み、色は灰黄色。

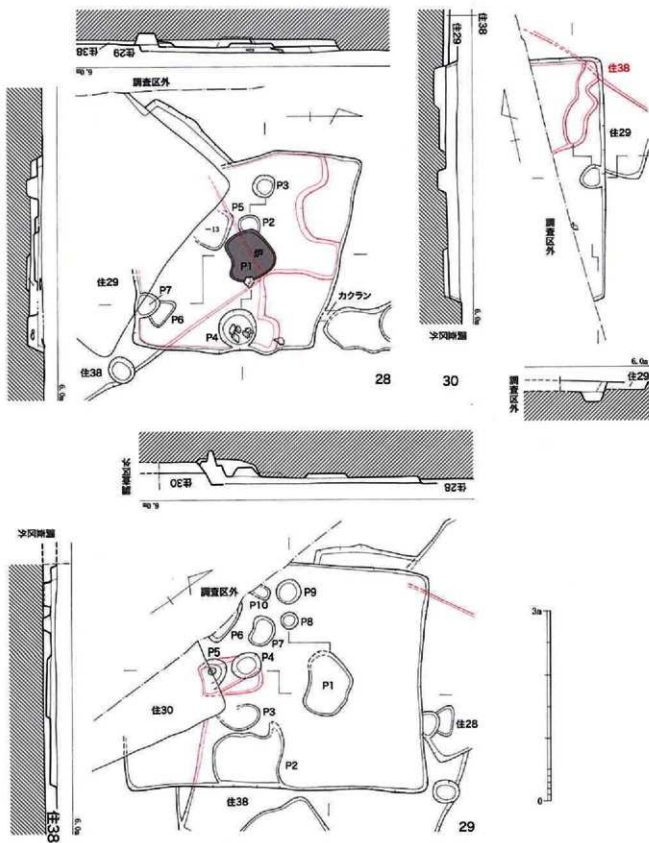
27は朝顔形に開く弥生後期直口壺口縁部。内面の一部は黒化し、色は黄褐色。28は弥生後期器台上部片。外面には二次加熱痕が認められ、色は橙褐色が基調。

28号竪穴住居跡(図版17、第53図)

7区南北西寄りに位置し、29号住居跡に切られ、38号住居跡を切る。住居南西部を29号住居跡により大きく壊されるが、住居規模は断面図作成箇所南北325cm×東西318cm、深さ7cmを測る、住居北西部が突出した、かなり歪んだ小型の正方形住居である。

床面ではピット7基検出し、焼土と炭が多く混じる埋土のP1が炉で、P3・4が位置・深さから主柱穴となる可能性が高い、2本柱の住居跡である。住居埋土は灰褐色粘質砂で、住居ほぼ全面で床下掘り込みを確認した。この床下掘り込みから石包丁(第91図18)が出土した。

出土土器から弥生時代後期終末の住居跡と考えられる。



第53図 28～30号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出土土器（図版 38、第 54 図） 1・2 は長胴の在地系広口甕で、直立気味の口縁部から強く外湾する口縁部になる。1 は口縁端部は棒状工具による浅い刻目を密に施し、頸部と胴部の屈曲部上に巡らせた三角突帯上には同じ工具による刻目を密に施す。外面肩部には黒斑あり。色は外が橙色～黄褐色、内が灰黄色を呈する。2 は外面頸部と肩部との境に三角突帯を巡らし、内外面のハケは異なる原体を使用する。外面には黒斑があり、色は灰黄色。3～5 は床下掘り込み出土。3・4 は胴部中位に 2 条の突帯を巡らせた在地系壺胴部片。3 は突帯上に丸い棒状工具による刻目を密に施したもので、外面には黒斑あり。色は灰黄色。4 は突帯上にハケ工具による押し引き法による刻目を施したもので、外面には黒斑あり。色は外が灰色、内が橙色。5 は小さな平底の在地系甕底部。色は外が黄褐色、内が淡橙色。6 は 2 条の突帯上にヘラ工具による浅い刻目を密に施し、突帯間に竹管文を上下 2 段に施文した、壺胴部片。色は外が灰色、内が灰色。7・8 は在地系甕。7 はやや器壁が厚く、頸部下にはハケ調整後やや大振な三角突帯を巡らせる。色は灰黄色。8 は胴が張らない器形で、口縁端部には工具による刻目を施す。口縁部内面と胴部内面のハケ原体は異なる。外面には二次加熱痕及び黒斑があり、色は橙褐色。

29 号竪穴住居跡（図版 17・18、第 53 図）

7 区南・北西寄りの西壁際に位置し、30 号住居跡に切られ、28・38 号住居跡を切る。住居南西部 1/3 ほどは調査区外であり、住居規模は南北 477cm × 東西 360cm、深さ 10cm を測る、南北に長い長方形住居となる。

床面ではビット 10 基検出した。主柱穴は柱痕を確認した P 5 は候補となるが、対となる主柱穴は検出できず、また炉も確認できなかった。なお、P 9 は図面作成の際にビット下端レベルを記録し忘れたため、写真から判断した下端推定ラインを破線で示す。住居北西隅の床面から少し浮いた状態でまとまって土器が出土した（図版 17・18）。これらの土器は破片となっている個体が多いため、住居廃絶の際に遺棄したものと考えられる。

住居埋土はレンズ状に堆積し、住居中央が灰褐色粘質土、外側が灰黄褐色粘質土となる。

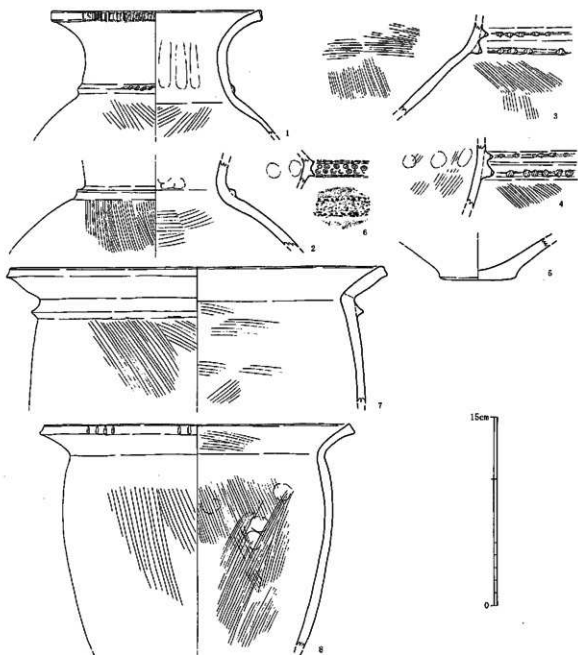
覆土から石包丁 1 点（第 91 図 19）及び凹石 1 点（第 91 図 25）が出土した。

出土土器から古墳時代中期前半の住居跡と考えられる。

出土土器（図版 39、第 55～58 図） 1・2 は球状の胴部から口縁部が逆「ハ」の字状に開く土師器小型丸底甕。1 の外面底部付近は板ナデ痕が残り、外面全体及び口縁部内面は最終調整としてミガキを施したか。色は灰黄褐色。2 は大きく開く口縁部で、胴部内面は板ナデを施す。色は外が暗黄褐色、内が黒色。

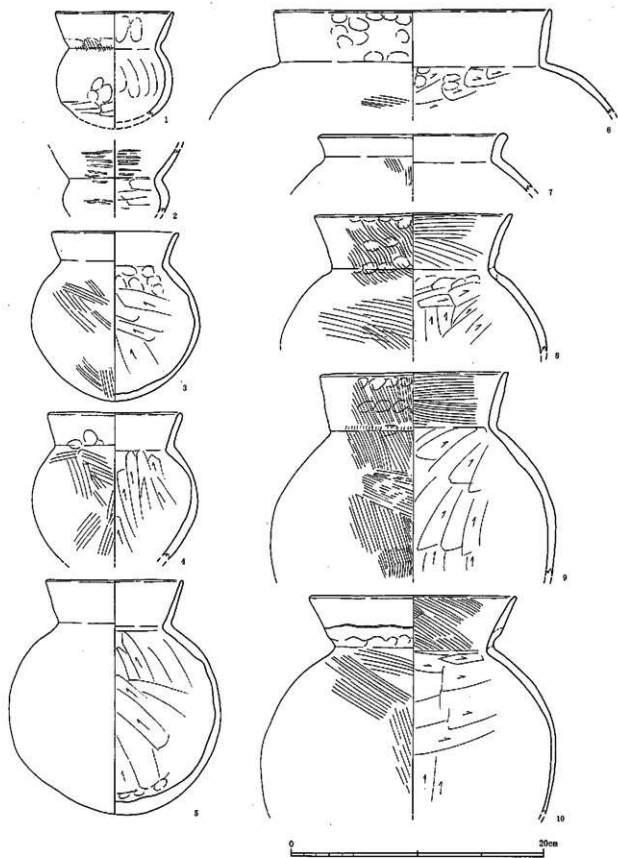
3～5 は球状の胴部に、外傾する長めの口縁部を持つ中型の土師器甕で、いずれも色は黄褐色を呈する。3 は内外面ともに二次加熱痕が顕著。4 は口縁部に二次加熱痕あり。5 は外面全体に二次加熱痕が顕著である。6 はやや外傾した直立口縁の土師器甕。色は灰黄褐色。7 は器壁がやや厚く、短い口縁部の土師器甕で、色は黄褐色。

8～17 は肩が張らない卵形の胴部に、やや長めの外傾する口縁部が付いた土師器甕である。9・10・11・13・14・17 は内面頸部付近までヘラケズリを施す。10・12・14・15 は黒斑、8・9・11・13・16 はスス、11・12・14 は二次加熱痕が認められ、色は 8・9・12・16 が黄褐色を基調とする。8 は胴部内面のケズリの幅・長さとも短い。9 は直立気味の口縁部を持つ。10

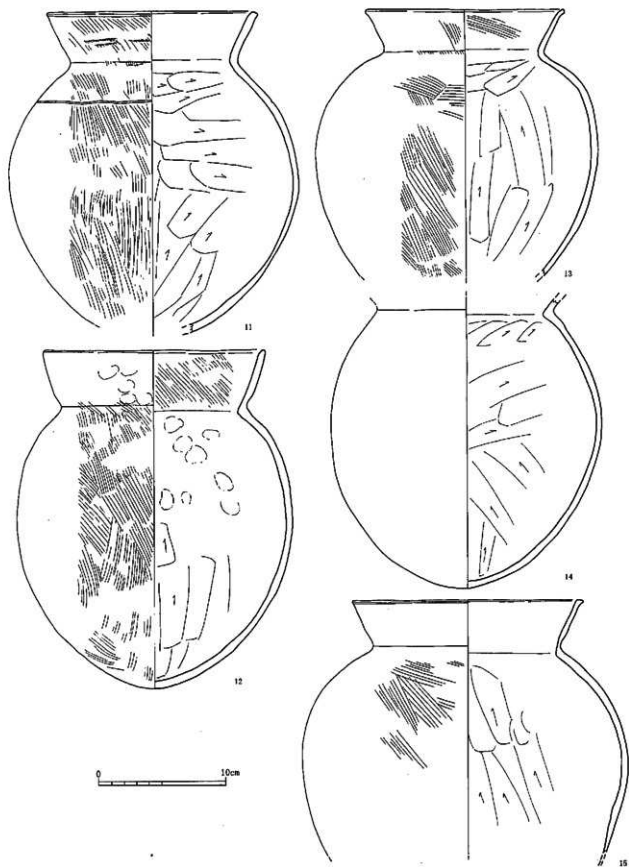


第54図 28号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

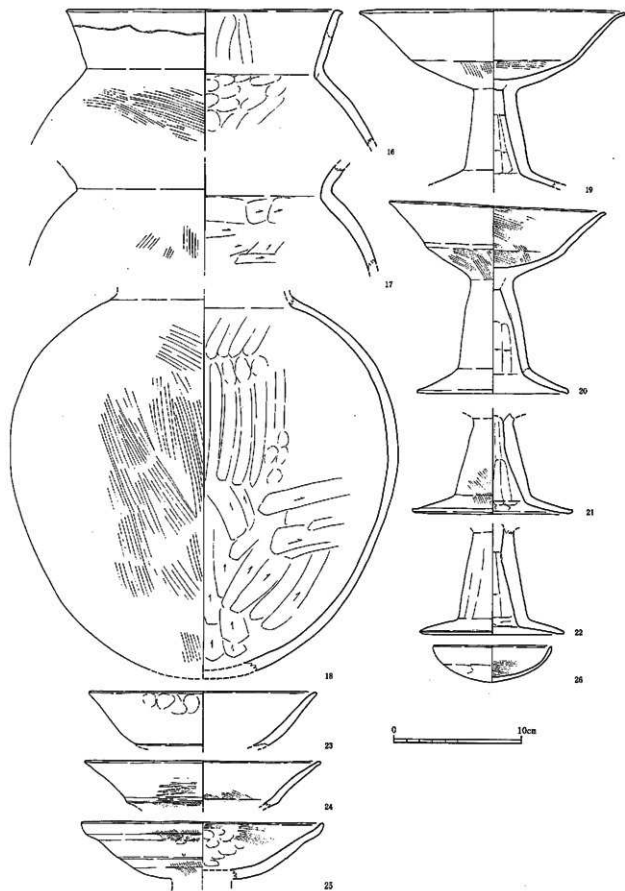
の口縁部外面には粘土継ぎ目痕がある。色は外が黄褐色、内が灰黒色。11は底部以外は完形に近い甕で、外面肩部には1条の浅い沈線を巡らせる。口縁部外面のハケ原体工具痕は肩部にハケを行う際に付いたものである。色は暗灰色。12はやや内湾気味の口縁部で、1/2ほど残存するもの。胴部内面中位以下しかケズリを施さない。胎土には大きな砂粒を多く含む。13は内面底部付近は炭化物が付着する。胎土には砂を多く含み、色は外が黄褐色、内が灰黄色。14は口縁部が欠損したもので、外面は二次加熱痕が顕著なため、調整は不明である。色は黄橙色～黄褐色が基調。15は口縁外端部を外につまみ出したもので、色は褐色。16は口縁部外面に粘土継ぎ目痕が残り、口縁部内面は黒化する。色は外が黄褐色、内が灰黄褐色。17は器壁が厚いもので、色は外が黄褐色、内が灰色。18は口縁部・底部が欠損した大型の土師器甕で、



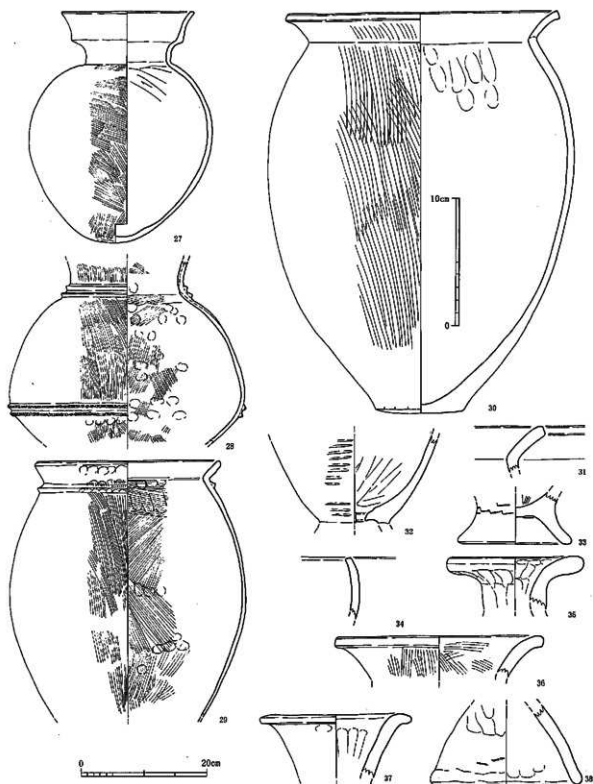
第 55 图 29 号竖穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3)



第 56 图 29 号竖穴住居跡出土土器実測图 (2) (1/3)



第 57 图 29 号窑穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3)



第58図 29号竪穴住居跡出土土器実測図(4) (27～29は1/6、他は1/3)

内面胴部中位以下はヘラケズリを施す。外面全体は二次加熱痕が顕著で、内面も二次加熱により赤化・黒化し、炭化物も付着する。外面肩部には黒斑あり。色は黄褐色が基調。

19～25は土師器高坏。19・20は坏部中位が屈曲し、脚部との接合部は充填法の高坏。19は脚裾部を欠損するもの。内外面とも二次加熱痕が顕著で、胎土はやや粗く、色は黄褐色。20は坏部屈曲部に鈍い稜を持つもので、口縁端部内外面は二次加熱痕が、脚裾部にはススが付着

する。色は黄褐色。21・22は脚部。21は充填法で坏部と接合したもので、胎土は精良、色は黄褐色。22は付加法で坏部と接合したもので、脚柱部外面にはナデによる稜がわずかに残る。脚部との接合部は工具により貼り付けやすくするために刻目を施す。器表にはヒビが顕著に認められ、色は黄褐色。23～25は土師器高坏部。21は屈曲部が横ナデにより沈線状に窪む。色は灰黄褐色。24は屈曲部に鈍い稜を持ち、内外面に粗いミガキを施す。口縁端部内外面は二次加熱痕があり、色は灰黄褐色。25は古墳後期まで下る浅い坏部で、外面坏部中位にはナデによる沈線が走り、口縁部は緩やかに屈曲する。色は橙褐色。P1出土の混入品。26はやや深い皿状の小型の土師器鉢。外面底部付近は工具ナデのちナデで、外面には黒斑、二次加熱痕及びススが認められる。色は橙色～黄褐色。

27～38は弥生時代後期後半～古墳時代前期後半の資料である。27は大型の山陰系二重口縁壺で、復元口径が21cm、復元器高が37cmを測る。卵形の胴部に二重口縁部の屈曲部が鈍い器形となる。内面は肩部のみヘラケズリを施す。外面底部には黒斑があり、色は黄褐色。28は大型の在地系壺で、最大胴部径が胴部中位以下となる器形で、弱く外傾する口縁部となで肩の肩部との境には2条の突帯を巡らせる。また、最大胴部径からやや下がった位置に、端部に丸い棒状工具による刻目を施した2条の突帯を巡らせる。なお、頸部付近は2重に粘土板を重ねて成形している。色は灰橙褐色。

29～33は在地系甕。19は復元口径が29.7cmを測る大型甕で、外面頸部には1条の三角突帯を巡らせる。内面胴部下位は二種類のハケ原体を用いる。色は灰黄茶色。30は80%ほど残存したもの。底部は凸レンズ底で、やや胴部が丸みを帯びた器形となる。胴部外面に施されたハケは下→上という切り合いになる。外面底部は黒化し、色は淡橙褐色～灰黄褐色。31は甕口縁部。口縁端部はナデにより窪む。色は灰黄色。32・33は台付甕。32は底部中央からやや端によった位置に外→内方向に焼成前穿孔を施した甕底部。内面にはナデの稜が残る。色は黄褐色。33は台付甕脚部。外面には工具痕及び二次加熱痕が認められる。色は外が灰橙褐色、内が灰黄色。34は碗状の在地系鉢口縁部。外面には黒斑あり。色は黄褐色。

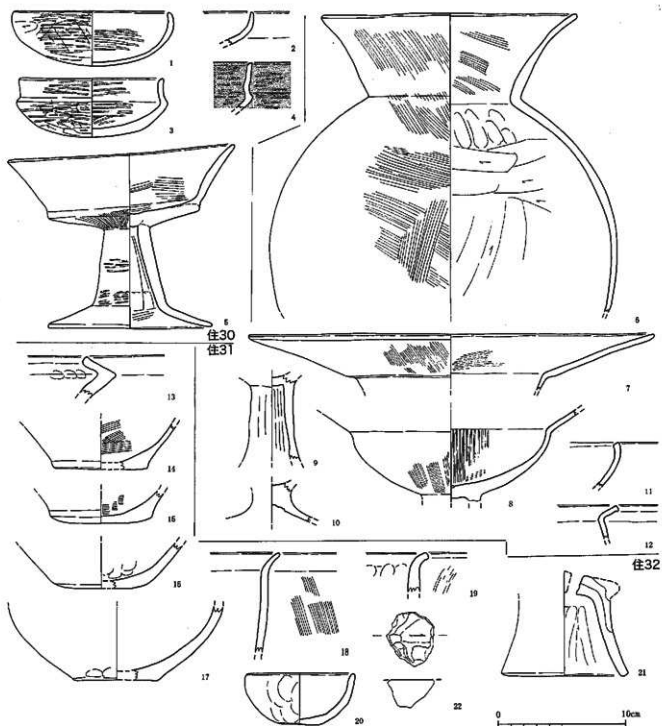
35～37は在地系器台である。35は屈曲部がかなり締まるもので、色は黄褐色。36は大型の器台上部片で、外面には薄くススが付着する。色は橙褐色。37は器台下部片で、脚裾部は短く開く形態となる。色は灰黄色。38は「ハ」の字形に裾部が開く器形のもので、外面には工具痕が認められる。色は灰黄色。

30号竪穴住居跡（図版17・18、第53図）

7区南中央の西壁際に位置し、29・38号住居跡を切る、当区南西住居群（28～30・38号住居跡）で最も新しい住居となる。住居西側の大部分は調査区外で、住居規模は現状で東西113cm以上×南北360cm、深さ18cmを測る。25～27号住居跡と同じく、出土土器から古墳時代後期末の住居跡とみられるため、おそらく西壁にカマドを付設し、南北に長いやや小型の4本柱の長方形住居になることが推測される。

住居埋土は北側が暗灰褐色砂質土、南側が灰黄褐色砂質土を基調とする。また、床面ではピット1基検出し、住居北東・南東部では床下掘り込みを確認した。

出土土器（図版40、第59図1～5） 1・2は土師器碗形坏。1は弱く内湾する口縁部で、



第59図 30～32号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

外面は口縁部近くまで手持ちヘラケズリを施す。色は橙褐色。2は直立する口縁部で、外面中位以下は手持ちヘラケズリを施す。色は黄褐色。3・4は土師器模倣坏。3は直立する口縁部で、受部の稜も明瞭である。色は橙褐色。4は内外面に黒塗りを施すもので、生地は橙褐色。

5は古墳中期前半土師器高坏で、口縁部が逆「ハ」の字状に開き、屈曲部は明瞭である。脚柱部外面はタタキのちナデを施す。坏部内面は黒化し、色は灰黄褐色～橙褐色。混入品。



31号住居跡出土状況（南東から）

31号竪穴住居跡（図版18、第60図）

7区南中央の東壁際に位置し、32・34・35号住居跡を切る。11号土坑と住居南壁で接するため、切り合い関係を持つと考えられるが、出土土器では同時期となり、前後関係は不明である。

住居東側は調査区外で、住居規模は断面図作成箇所南北276cm×東西285cm以上、深さ13cmを測る、東西に長い小型の長方形住居となる。

床面ではピット3基検出した。P2が主柱穴となる可能性があるが、対となる主柱穴を調査区内で検出できなかったため、断定できない。また、住居中央北寄り30×24cmの範囲に広がる弱い焼面を検出した。さらに、床面直上及びやや浮いた状態で土器群を検出した。

住居埋土はレンズ状に堆積し、住居中央が暗灰褐色粘質土、外側が暗灰黄褐色粘質土となる。

出土土器・切り合い関係から古墳時代前期前半の住居跡と考えられる。

出土土器（図版40、第59図6～10）6は畿内系広口壺。逆「ハ」の字状に開く口縁部内面は黒化し、胴部外面には黒斑が認められる。色は外が黄褐色、内が暗灰色。7～9は在地系高坏。いずれも胎土は精良である。7は碗形の坏部に長い口縁部が逆「ハ」の字状に開く器形。胎土は精良で、色は黄褐色。8は深めの坏部で、内面は暗文状に縦ミガキを施す。脚部との接合は付加法で行う。色は淡橙褐色。9は高坏脚柱部で、外面にはナデの稜が、内面には工具による絞り痕が残る。色は黄褐色。10は畿内系精製低脚高坏。脚部内面上部には工具痕が残る。胎土は精良で、色は橙褐色。11は在地系の碗状鉢。色は黄褐色。12は在地系小型鉢か甕口縁部。色は黄褐色。

32号竪穴住居跡（図版18、第60図）

7区南中央に位置し、31・38号住居跡、11号土坑に切られ、34・35号住居跡を切る。住居北東部を31号住居跡により壊されるが、住居規模は南北437cm（B-B'）×東西435cm、深さ16cmを測る、方形住居となる。

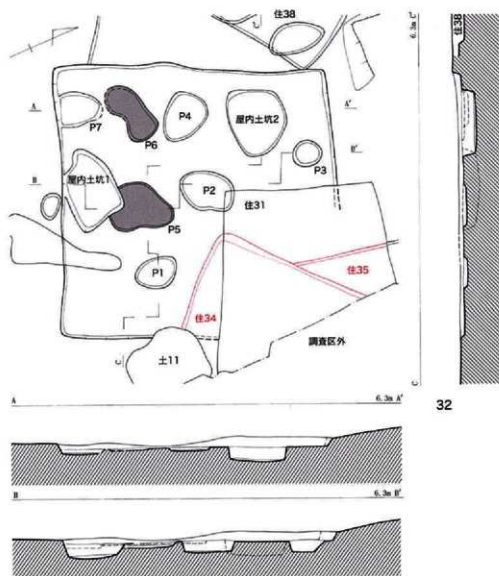
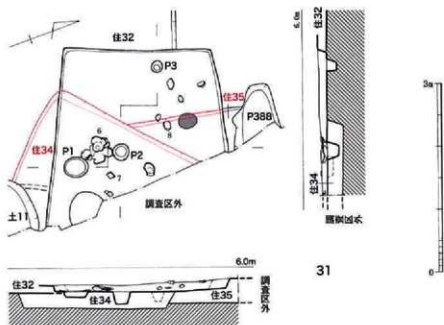
床面ではピット7基・屋内土坑2基検出した。P5・6は黄色茶褐色粘質土に焼土・炭が混じる埋土であり、いずれも浅く、位置的にも偏るが炉と考えられる。他のピットはいずれも浅く、主柱穴ではないと考えられる。

南壁と接する屋内土坑1は東西135cm×南北95cm、深さ24cmを測り、埋土は茶褐色粘質土となる。住居北西の屋内土坑2は東西104cm×95cm、深さ23cmを測り、埋土が茶褐色粘質土。

住居埋土はレンズ状に堆積し、住居中央が灰褐色粘質土、外側が灰黄褐色粘質土である。

出土土器から弥生時代後期終末の住居跡と考えられる。

出土土器（図版41、第59図11～22）13は在地系複合口縁壺口縁部。外面には黒斑があり、色は茶褐色。14～17は在地系甕底部。14はやや凸レンズ底の底部で、外面には二次加熱痕及びブスガが認められる。色は灰黄褐色。15は凸レンズ底の底部で、色は灰黄褐色。16はほぼ丸



第60図 31・32号竪穴住居跡実測図 (1/60)

底で、外面には二次加熱痕及びススが認められる。色は灰黄褐色。17は壺底部の可能性ある。色は黄褐色。

18・19は在地系鉢口縁部で張らない胴部から短く外反する口縁部を持つ。18の外面には黒斑があり、色は黄褐色。19の色は黄褐色。20は8割近く残る、小型の在地系統状鉢。小さな平底を残すもので、胎土は粗く、色は黄褐色。21は支脚で、斜めとなる頂部の中心からやや低い場所に外→内の焼成前穿孔が1孔認められる。外面には二次加熱痕及びススがあり、色は黄褐色。22はナデによる面を持つ土製品。厚さ2.2cm以上で、胎土にはスサを少量含み、色は黄褐色。住居壁土の可能性ある。

33号竪穴住居跡（第61図）

7区中央南寄りに位置し、24・26・27号住居跡、9号土坑に切られ、36・37号住居跡を切る。37号住居跡とは住居南側で切り合い関係を持ち、出土土器から両住居跡は弥生時代後期後半の同じ時期と考えられるが、37号住居跡を切るP6・7は埋土から当住居跡ピットの可能性が高く、37号住居跡を切ると判断した。切り合いが新しい住居から当住居は大きく壊され、住居規模は現状で南北532cm×東西475cm、深さ25cmを測る、南北にやや長い長方形住居となる。

床面ではピット8基検出した。住居の時期から2本柱の主柱穴になる考えられるが、P6・7が位置・深さから主柱穴になる可能性があるものの、対のピットや炉も確認できなかったため、判断できない。住居埋土は灰黄褐色粘質土を呈する。

出土土器・切り合い関係から弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

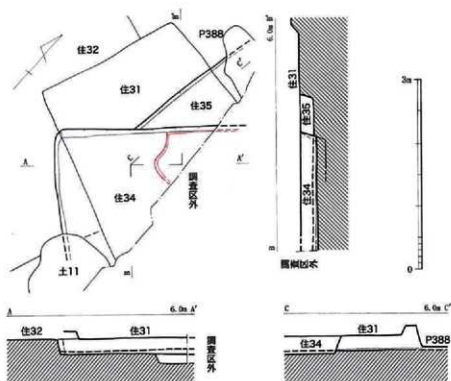
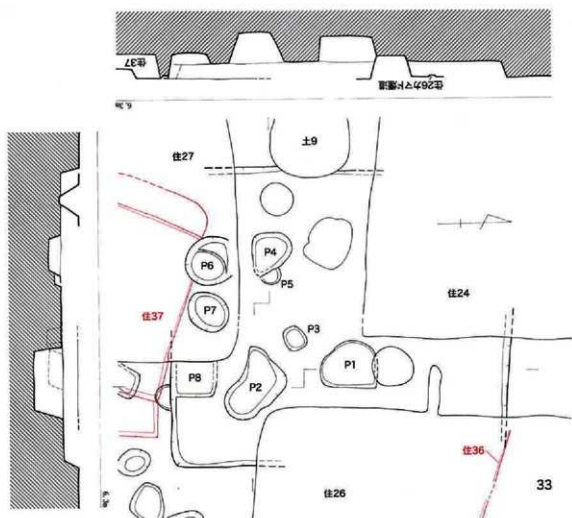
出土土器（図版41、第62図1～15）1は在地系複合口縁壺口縁部。頸部は縮まり、口縁部外面には黒斑がある。色は灰黄褐色。2は短い口縁部が強く外反する在地系壺。内外面とも粗いハケを施し、色は黄褐色。3は大型在地系壺口縁部で、頸部には小さい三角突帯を巡らす。色は灰黄褐色。4は平底の弥生後期後半の壺底部。外面には黒斑があり、色は外が黄褐色、内が黒色を呈する。5は長い口縁部の在地系甕で、色は黄褐色。6は平底の弥生後期壺底部。外面には二次加熱痕が、内面には薄く炭化物が付着する。色は外が灰黄褐色、内がこげ茶色。7～9は凸レンズ底の弥生後期後半壺底部。いずれの外面も二次加熱痕が顕著である。7は外面にススも付着し、色は灰黄褐色。8の胎土には細粒を多く含み、色は灰黄褐色。9は内面まで二次加熱を受け、色は灰黄褐色。10は胴が張らない、粗製の小型在地系甕か鉢胴部。外面には黒斑があり、色は灰黄褐色を呈する。11は在地系台付壺脚部。色は黄褐色。12は外湾する口縁部を持つ在地系小型甕。色は黄褐色。

13は水平近くまで口縁部を外折させた在地系鉢。色は灰黄褐色。14は在地系小型器台。色は黄褐色～橙褐色。15は弥生中期前半の上げ底・厚底の壺底部。色は外がこげ茶色、内黒色。

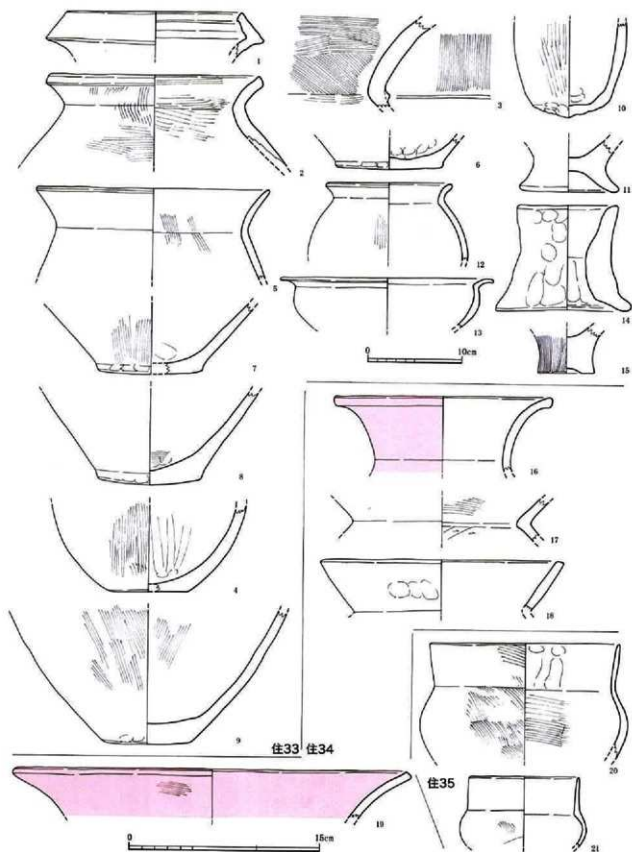
34号竪穴住居跡（図版18、第61図）

7区南中央の東壁際に位置し、31・32号住居跡、11号土坑に切られ、35号住居跡を切る。住居東側の大部分は調査区外で、住居規模は現状で北西・南東で220cm以上×北東・南西で250cm以上、深さ24cmを測るが、貼床部分まで誤って下げ、本来の床面は3cmほど高い。

床面ではピットを検出できなかった。住居北壁際で床下掘り込みを確認した。住居埋土は上



第61图 33・34・35 竖穴住居跡実測图 (1/60)



第 62 図 33・34・35 竪穴住居跡出土土器実測図 (15 は 1/4、他は 1/3)

層が灰褐色粘質土、下層が黄褐色粘質土+青灰色粘質土となる。

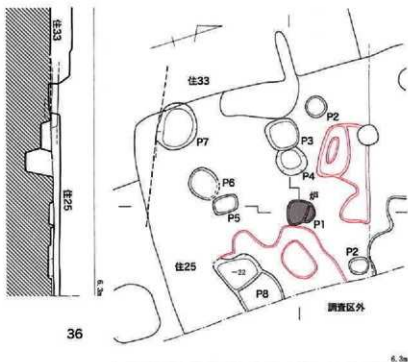
一部古墳時代前期後半の土器が混じるが、切り合い関係から弥生時代後期終末の住居跡と考えられる。

出土土器（第62図16～19）

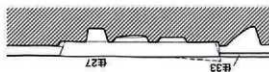
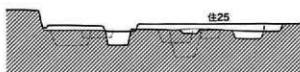
16は朝顔形に開く畿内系系広口壺口縁部。外面全体にはスリップを塗布し、口縁端部には黒斑がある。胎土には細粒を多く含み、色は黄橙色。17・18の土器は古墳前期後半の土器であるが、切り合い関係から混入品の可能性が高いもの。17は外来系甕頸部である。内面は頸部までヘラケズリを施す。色は外が灰褐色、内が黄褐色。18は布留系甕口縁部。色は黄褐色。19は口縁端部をわずかに上方につまみ出した高坪口縁部。内外面にスリップを塗布し、胎土は精良。生地は橙褐色。

35号竪穴住居跡（図版18、第61図）

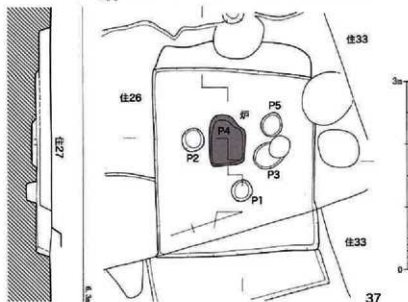
7区南中央の東壁際に位置し、31・32・34号住居跡・388号ピットに切られる。住居のほとんどは調査区外で、西壁の一部を検出したにとどまる。住居規模は現状で南北187cm以上×東西78cm以上、深さ20cmを測る。住居調査範囲が狭く、床面ではピットを検出でき



36



住27



37

第63図 36・37号竪穴住居跡実測図(1/60)

なかった。住居埋土は灰黄褐色粘質土である。

出土土器・切り合い関係から弥生時代後期終末の住居跡と考えられる。

出土土器（第62図20・21）20・21は在地系丸底鉢。20の外面は細かいハケ、内面には粗いハケを施し、色は黄褐色。21は小型品で、外面は二次加熱を受ける。色は橙褐色。

36号竪穴住居跡（図版19、第63図）

7区中央南寄りの東壁際に位置し、25・33号住居跡に切られる。当住居跡は本来は第2面に属する住居跡であるが、25号住居床下掘り込み調査時に炉（P1）を検出したため精査したところ、当住居跡に伴うピット（P2～8）を確認したため、住居であると判断した、また第1面で調査したため、第1面の住居跡として報告する。

25・33号住居跡造営時に当住居は大きく壊され、北壁・南壁の一部を検出したにとどまる。また住居北西部及び南東部では当住居の一部を確認できたはずであるが、調査段階ではそのことに気づかず調査を行っていない。住居規模は現状で南北340cm×東西245cm以上を測り、おそらく東西に長い長方形住居となる。

床面ではピット9基検出した。先述したように、P1は灰黒色粘質土で埋土となる炉で、位置・深さからP4が主柱穴となる可能性が高いが、対となる主柱穴は検出できていない。住居北・東壁際で床下掘り込みを確認した。住居埋土は灰黄褐色粘質土に炭少量混じる土となる。

出土土器・切り合い関係から弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

出土土器（第64図1～5）1は在地系壺肩部で、色は暗灰褐色。P6出土。2は凸レンズ底の在地系壺底部。色は黄褐色。P5出土。3は在地系甕口縁部。内外面にはススが付着し、色は淡黄褐色。P1出土。4は弥生後期のやや大型の碗形鉢で、口縁端部はナデで面取りする。内面のヒビまで朱が入り込み、外面上位にも朱が少し付着する。外面下位にはススが顕著に認められるため、液状の朱を加熱する際に使用した容器と考えられる。色は淡黄褐色。P6出土。

5は弥生中期中前半壺底部。外面には黒斑があり、色は外が淡灰褐色、内が黄褐色。P1出土。

37号竪穴住居跡（図版19、第63図）

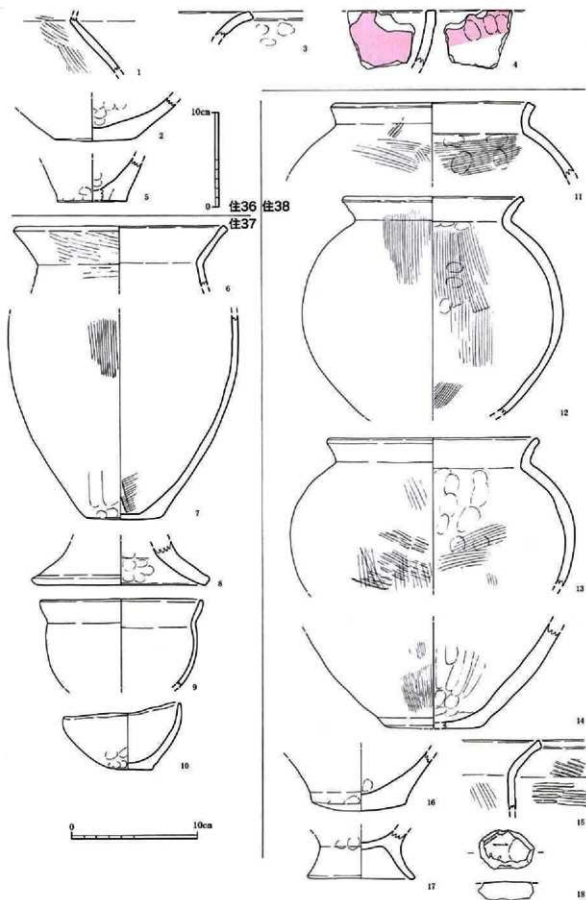
7区中央南寄りに位置し、26・33号住居跡に切られる。当住居跡は26号住居床下掘り込み調査時に炉（P4）を検出したため精査したところ、当住居跡に伴うピット（P1～3・5）を確認したため、住居であると判断した。26号住居跡の下層住居になるため、本来は第2面に属する遺構となる。26・33号住居跡造営時に当住居は大きく壊されるが、住居規模は南北255cm×東西333cmの東西に長い長方形住居で、住居の最も残りの良い箇所まで深さ23cmを測る。

住居西壁には高さ7cm、幅50cmを測るベッド状遺構を付設するが、地山削り出し構造であったため、住居の残存状況から検出できた範囲はしみ部分であり、そのため西壁は歪む。

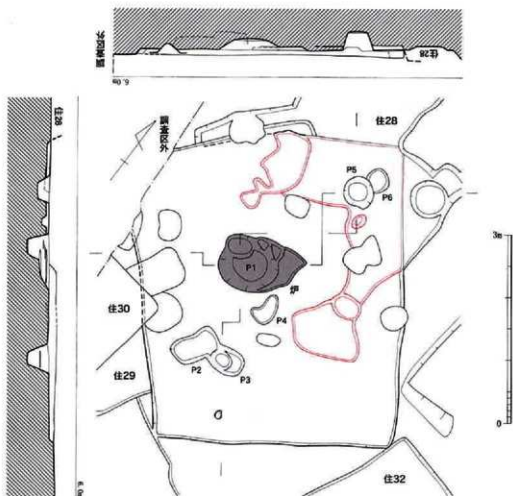
竪穴部床面ではピット5基検出し、P4が炉、位置・深さからP1かP2が主柱穴となる可能性が高いが、いずれも対となる主柱穴は検出できなかった。住居埋土は黄茶褐色粘質土。

出土土器・切り合い関係から弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

出土土器（図版41、第64図6～10）6～8は在地系甕。6は胴が張らない器形で、内外面とも二次加熱を受け、外面にはススが付着する。色は黄褐色。7は小さな凸レンズ底を持つ甕



第 64 図 36～38 号竪穴住居跡出土土器実測図 (5 は 1/4、他は 1/3)

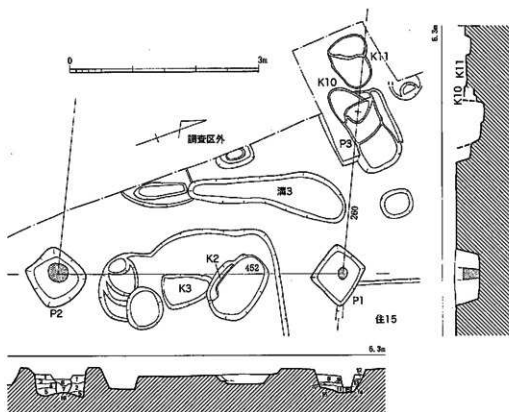


第 65 図 38 号竪穴住居跡実測図 (1/60)

で、外面底部には縦ナデの稜が残る。外面全体は二次加熱痕が顕著で、色は外が黄褐色、内が灰褐色。8は大型の台付甕脚部で、外面には二次加熱痕がある。色は黄褐色。9は畿内系小型丸底鉢で、外面はかなり二次加熱を受けており、ススも付着する。胎土には細粒を非常に多く含み、色は外が黄褐色、内が黄褐色を呈する。混入品。10は器表にヒビが顕著に認められる、小さな平底を持つほぼ完形の手づくね土器。口径9.3cm、底径3.4cm、器高5.3cmを測る。色は外が橙褐色、内が橙褐色～黒色。P1出土。

38 号竪穴住居跡 (図版 19、第 65 図)

7 区南中央西寄りに位置し、28～30 号住居跡に切られ、32 号住居跡を切る。住居南西隅は調査区となるが、住居規模は南北 494cm×東西 423cm、深さ 11cm を測る、やや南北に長い長方形住居となる。なお、北壁の一部は検出を誤り、壁を掘り過ごしたため、壁推定ラインを破線で示す。床面ではビット 6 基検出し、灰黒色粘質土が埋土の P1 が炉となる。主柱穴は深さ・位置から P3 の可能性が高いが、対の主柱穴は検出できなかった。また P5 は位置・深さから主柱穴を支える補助的な柱穴であった可能性が考えられる。住居北東部で床下掘り込みを確認



- | | |
|-----------------------------|----------------------|
| 1. 灰黄褐色粘質土に炭少量混じる | 8. 灰黄褐色粘質土 |
| 2. 1より暗く、黄褐色粘質土ブロック50%混じる | 9. 8よりやや暗く、粘性が強い |
| 3. 1より黄褐色粘質土ブロック60%混じる | 10. 8よりやや明るく、粘性が強い |
| 4. 暗灰褐色粘質土に黄褐色粘質土20%混じる | 11. 暗灰黄褐色粘質土に炭少量混じる |
| 5. 暗灰褐色粘質土に黄褐色粘質土混じる | 12. 灰黄褐色粘質土(1よりやや暗い) |
| 6. 灰黄褐色粘質土に黄褐色粘質土ブロック50%混じる | 13. 12よりやや明るい |
| 7. 暗灰褐色粘質土に黄褐色粘質土ブロック30%混じる | 14. 暗黄褐色粘質土 |
| | 15. 暗灰褐色粘質土+柱痕 |
| | 16. 地山(黄褐色砂質土) |

第66図 1号掘立建物跡実測図 (1/60)

した。住居埋土は暗黄茶褐色粘質土で、床面直上には炭層が広がる。

出土土器・切り合い関係から弥生時代後期終末の住居跡と考えられる。

出土土器(第64図11~18) 11~13は球状の胴部に短く外反する口縁部が付く在地系甕。11は直立気味の口縁部。外面頸部には、記号的な意味合いが想定される、ヘラ工具により4条の平行沈線文を施す。色は黄褐色。覆土下層出土。12の色は灰黄色~黄褐色。13の胴部外面はタタキのち一部ハケ、一部ナデ調整を行う。色は黄褐色。覆土下層出土。14は凸レンズ底の在地系甕底部で、色は外が黄褐色、内が淡灰褐色。P1出土。15~17は在地系甕。16は外面に二次加熱・ススが認められる。色は黄橙色~灰黄色。16は尖底気味の凸レンズ底の甕底部で、外面にはススが付着する。色は外が灰黄褐色、内が灰黄色。17はやや器高が高い台付甕脚部。色は灰黄色。18はナデを行った面を持つ土製品で、指押さえ痕も残る。厚さ1.4cm以上で、胎土にはスサを含む。住居壁土の一部か。

(3) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡(図版20、第66図)

4区北中央北寄りの西壁際に位置し、P1で15号住居跡を、P3で10・11号甕棺墓を切り、P1-P2間には2・3号甕棺墓が位置する。

当建物は梁行1間、桁行1間分検出し、柱間寸法から桁行が2間以上の建物となる東西棟の大型建物となる可能性が高い。建物主軸方向は北-20°-東、桁行柱間寸法は心々距離で260cm(8尺)、一尺32.5cmの尺度となる。梁行柱間寸法は心々距離で452cm、桁行から出された尺度では、14尺となる。柱穴掘形はいずれも径70cm前後の隅丸方形で、深さは40cm前後を測り、P1・2で確認できた柱抜き取り痕から径15cmほどの柱の使用が想定される。

出土遺物で図示できるものではなく、また当建物の時期を特定できる遺物も確認できなかったが、切り合い関係及び柱埋土から古墳時代前期後半～古墳時代後期以前の建物跡となる可能性が高い。

(4) 土坑

3号土坑(図版21、第67図)

7区北中央の北寄りに位置し、2号溝を切る。12・15号住居跡、12号土坑と接するが、出土土器では前後関係を把握できない。当土坑は東西83cm×南北145cm、深さ57cmの長楕円形の平面形態となる。床面はほぼ平らで、壁の傾斜はいずれも急に立ち上がる。埋土は上層が灰黄褐色粘質土、下層が黄褐色粘質土である。

出土土器で図示できたのは、弥生時代中期前半の土器のみであるが、埋土から弥生時代後期後半～古墳時代前期の土坑と考えられる。

なお、覆土からスクレイパー(第91図8)が出土した。

出土土器(第68図1・2) 1は弥生中期前半甕口縁部。1の外面には二次加熱痕があり、口縁上端部は黒化する。色は灰褐色。2は弥生中期初頭甕口縁部。口縁外端部にはヘラ工具による非常に浅い刻目を密に施す。色は黄褐色。

4号土坑(図版21、第67図)

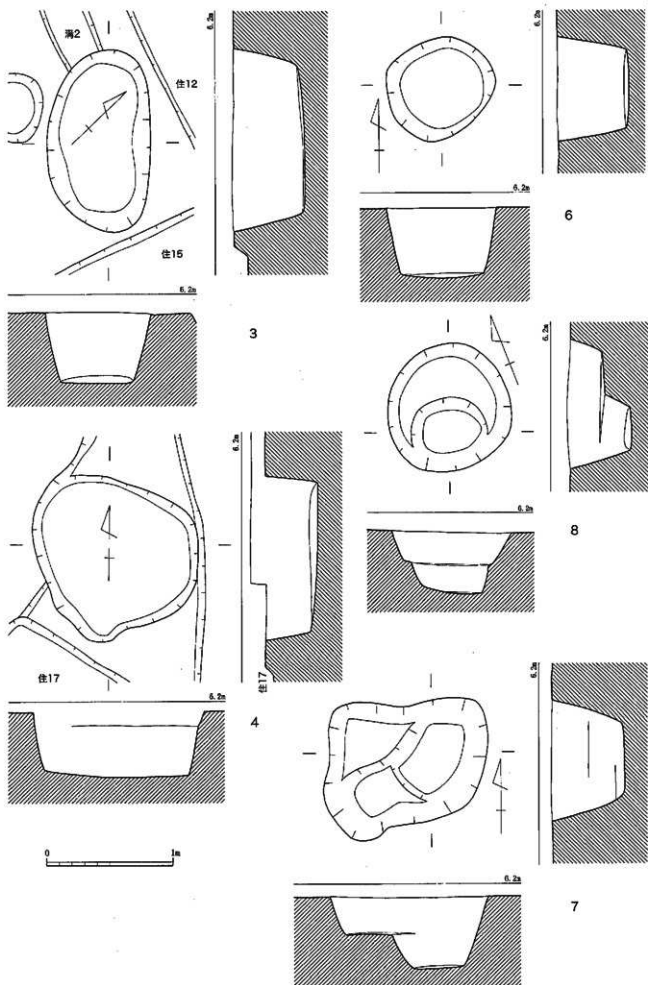
7区北中央に位置し、17号住居跡と南壁で接するが、出土土器では前後関係を把握できない。南北133cm×東西130cm、深さ53cmの円形土坑で、床面は南西側に向かって緩やかに傾斜し、壁の傾斜はいずれも急である。埋土は灰黄褐色粘質土。土坑南北には包含層が存在する。

出土土器から弥生時代後期後半～古墳時代前期の土坑と考えられる。

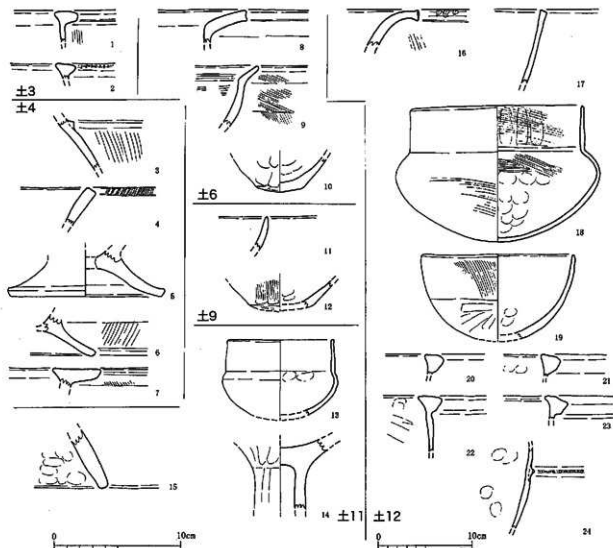
出土土器(第68図3～7) 3は在地系壺頸部で、小さな三角突帯が巡らせる。色は灰褐色。4は在地系広口甕口縁部で、端部にはハケ工具による刻目を密に施す。色は橙褐色。5・6は在地系台付甕脚部。5の内外面は二次加熱痕が顕著に残る。色は黄褐色。6の色は灰褐色。7は弥生中期前半甕口縁部。色は灰黄茶色。

6号土坑(図版21、第67図)

7区北中央東寄りに位置する。南北81cm×東西85cm、深さ55cmの円形土坑で、埋土は上



第 67 图 3·4·6~8号土坑实测图 (1/30)



第68図 3・4・6・9・11・12号土坑出土土器実測図（1・2・7・20～24は1/4、他は1/3）

層が灰褐色粘質土、下層が明灰黄褐色粘質土となる。床面は中央に向かって緩やかに傾斜し、壁の傾斜はいずれも急である。

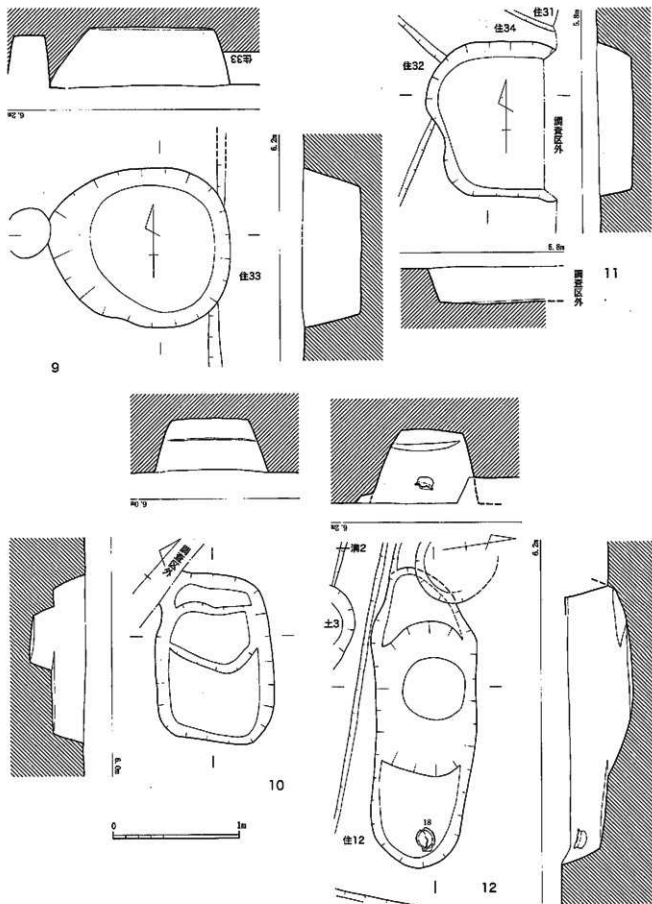
出土土器及び埋土から弥生時代後期終末の土坑と考えられる。

出土土器（第68図8～10）8は在地系甕口縁部で、色は灰黄色。9は在地系鉢。外面には黒斑があり、色は灰黄褐色。10は在地系鉢の底部。尖底気味の凸レンズ底で、色は暗茶色。

7号土坑（図版22、第67図）

7区北中央の東寄り、6号土坑北に位置する。長軸124cm×短軸109cm、最も深い北東部で深さ56cmを測る、南西部が突出する不整形土坑である。西側に2つのテラスを持ち、壁の傾斜はいずれも比較的急である。埋土は灰黄褐色粘質土に炭が混じる土となる。

出土土器で図示できるものはないが、埋土から弥生時代後後半～古墳時代前期の土坑と考えられる。



第69图 9~12号土坑实测图 (1/30)

8号土坑 (図版 22、第 67 図)

7 区中央北寄り、9 号墓棺墓西に位置する。南北 102 cm×南北 97 cm、深さ 50 cm を測るほぼ正円形土坑で、埋土は上層が灰褐色粘質土に炭少量混じり、下層が灰黄褐色粘質土となる。土坑北側にテラスを持つ 2 段土坑で、壁の傾斜はいずれの壁も急である。

出土土器で図示できるものはないが、埋土から弥生時代後期後半～古墳時代前期の土坑になると考えられる。

9号土坑 (図版 22、第 69 図)

7 区中央西寄りに位置し、33 号住居跡を切る。南北 126 cm×東西 142 cm、深さ 46 cm を測る正円形土坑で、埋土は灰茶褐色粘質土である。床面はほぼ平らで、壁の傾斜は緩やかな西壁以外はやや急である。

出土土器から古墳時代後期後半～末の土坑と考えられる。

出土土器 (第 68 図 11・12) 11 は土師器碗形環で、色は褐色。12 はほぼ丸底の弥生後期終末の小型甕の底部。外面は黒化し、色は黄褐色。

10号土坑 (図版 23、第 69 図)

7 区南中央の西壁際に位置する。南北 133 cm×東西 92 cm、最も深い中央部で深さ 45 cm を測る隅丸方形土坑で、埋土は上層が暗灰褐色粘質土、下層が灰黄褐色粘質土を呈する。

土坑南北にはテラスを持ち、壁の傾斜はいずれもやや急である。

出土土器で図示できるものはないが、埋土から弥生時代後期後半～古墳時代前期の土坑になると考えられる。

11号土坑 (図版 23、第 69 図)

7 区南中央の東壁際に位置し、32・34 号住居跡を切り、31 号住居跡と北壁で接するため、切り合い関係を持つと考えられるが、出土土器では同時期となり、前後関係は不明である。

土坑東側は調査区外となるが、南北 125 cm×東西 94 cm 以上、深さ 27 cm を測る。なお、土坑東壁際は内湾するため、東壁は調査区壁際からさほど離れていない場所にあると推測できる。

床面はほぼ平らで、壁の傾斜はいずれも急でない。埋土は上層が茶褐色砂質土、下層が黄青灰色砂質土を呈する。

出土土器から古墳時代前期前半になるが、切り合い関係から古墳時代前期後半以降の土坑と考えられる。

出土土器 (第 68 図 13～15) 13 は畿内系小型丸底甕。磨滅しているが、内外面にミガキを施した可能性がある。色は橙褐色。14 は在地系高坏脚柱部で、色は橙褐色。15 は器台裾部。色は黄褐色。

12号土坑 (第 69 図)

7 区北中央の北寄りに位置し、12・15・20 号住居跡に切られる。3 号土坑と南壁で接するが、出土土器では前後関係を把握できない。長軸 238 cm×短軸 80 cm、最も深い中央部で深さ

52cmを測る、長楕円形土坑である。土坑東西には大きなテラスが存在し、西壁に近く、床から浮いた位置でほぼ完形の丸底鉢(18)が出土した。壁の傾斜はいずれもやや急に立ち上がる。埋土は茶褐色粘質土に炭混じる土である。

覆土からスクレイパー2点(第91図・10)が出土した。

出土土器及び切り合い関係から弥生時代後期終末の土坑と考えられる。

出土土器(図版41、第68図16~24)

16は端部を水平まで強く屈曲させた在地系広口壺の口縁部。口縁上端部に先の丸い工具により刻目を

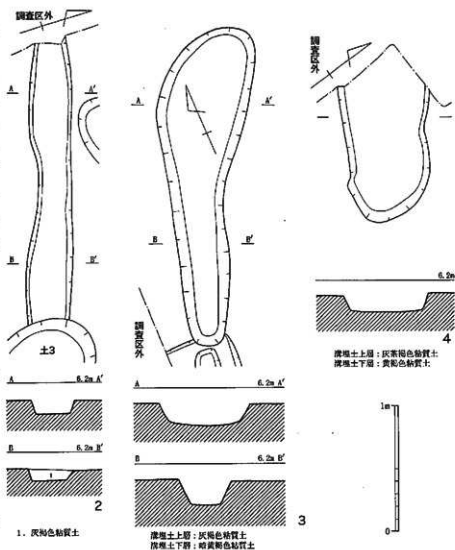
密に施す。色は橙褐色。17はやや大型の在地系碗状鉢の口縁部。色は淡橙褐色。18は8割ほど残存する尖底の在地系鉢。復元口径13.7cm、器高10.7cmを測り、器壁は薄い。色は黄橙褐色。19は在地系碗状鉢で、外面中位以下は板ナデを施す。色は外が灰黄褐色、内が橙褐色。

20~23は三角口縁の弥生中期初頭壺口縁部。色は21が橙褐色で、それ以外は灰黄色。22は内面に工具痕がある。23は口縁内端部を内側につまみ出す。24は弥生前期壺胴部。小さく低い三角突帯の端部には工具による刻目を密に施す。色は灰黄褐色。

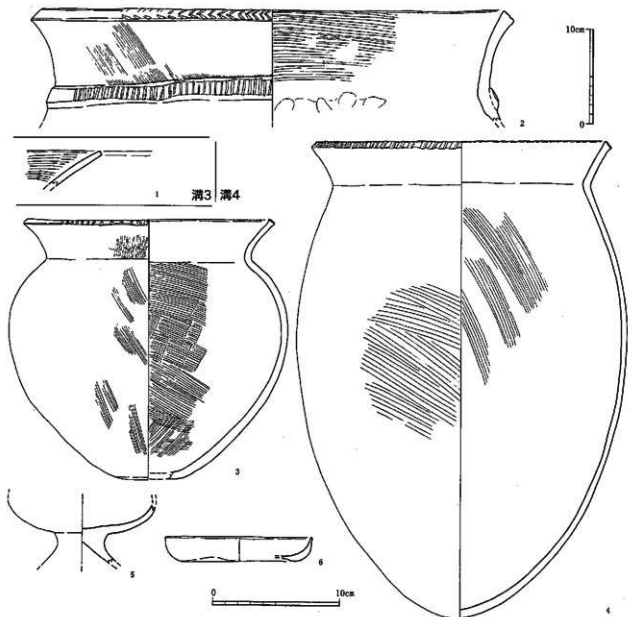
(4) 溝

2号溝(第70図)

7区北西隅に位置する細長い東西溝である。溝東側は調査区外で、西側は3号土坑に切られるが、3号土坑東側までは延びない。長さ223cm以上、幅は35cm前後を測る、ほぼ直線的な平面形態で、深さは西壁際で10cm、東端で8cmを測り、床面は東→西方向へ緩やかに傾斜する。



第70図 2~4号溝実測図(1/30)



第71図 3・4号溝出土土器実測図(2は1/4、他は1/3)

溝埋土は灰褐色粘質土1層のみである。

出土土器で図示できるものはないが、埋土から弥生時代後期後半～古墳時代前期の溝と考えられる。

3号溝(第70図)

7区北中央の西壁際近くに位置する南北溝である。長さ253cm、幅は最も広い北側で70cm、南側で40cmを測る、おたまじゃくし状の平面形態となる。深さは北側で17cm、中央で20cm、南端で17cmを測る。埋土では明確な帯水痕跡は確認できなかった。

出土土器及び埋土から、弥生時代後期～古墳時代前期の溝と考えられる。

出土土器(第71図1) 1は弥生後期高坏口縁部。色は淡橙褐色。

4号溝（第70図）

7区北中央の西壁際に位置する東西溝。溝西側大部分が調査区外であるため、溝ではない可能性はあるが、形状と深さから溝として報告する。溝は現状で長さ140cm以上、幅67cm、深さ15cmを測る。埋土では明確な帯水痕跡は確認できなかった。

出土土器から古墳時代前期前半の溝と考えられる。

出土土器（第71図2～6） 2は復元口径36.4cmを測る在地系大型甕口縁部。口縁端部には上→下の順に行った、ヘラ工具によるくの字状の文様を施文し、頸部に巡った突帯上にはハケ工具による刻目を密に施す。色は灰黄色。3は球状の胴部にくの字形に外反する口縁部が付いた、ほぼ丸底の在地系甕。口縁端部にはハケ状工具端部による浅い刻目を密に施し、内面胴部下位には炭化物（コゲ）が付着する。色は橙色。4は尖底の在地系甕で、口縁端部はヘラ工具により、浅く大きめの刻目を密に施す。外面にはススが付着し、色は灰黄色。5は坏部が碗形の在地系高坏。脚柱部内面頂部には工具痕が残る。色は橙褐色。6は中世の土師皿で、混入品。色は橙褐色。

（5）ビット・遺構面等出土土器

ビット出土土器（図版41、第72図1～13）

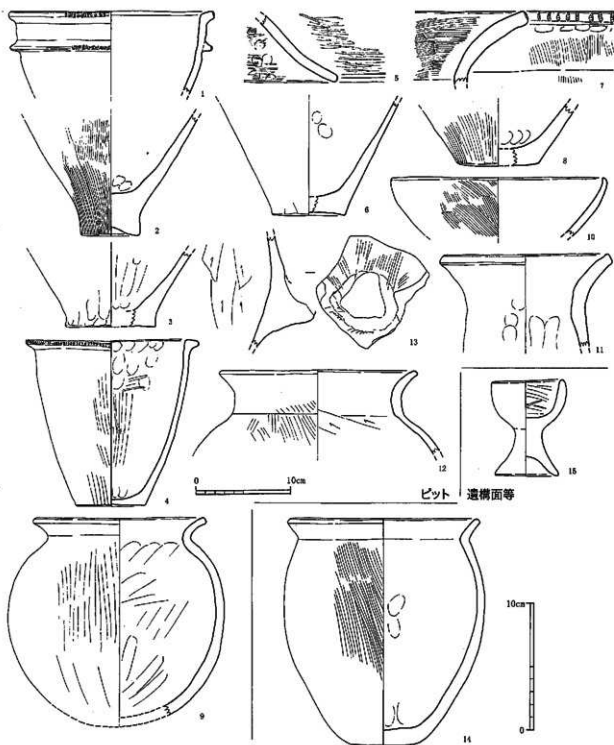
1は弥生前期末の亀ノ甲系譜の甕。口縁外端部及び口縁下の突帯上には先の丸い棒状工具による刻目を密に施す。内面には炭化物（コゲ）が付着する。色は灰黄褐色。P 398 出土。2は弥生中期初頭の上げ底・厚底の甕底部。色は灰黄白色。P 366 出土。3は弥生中期前半の甕底部。外面は二次加熱を受け、内面は一部黒化する。色は灰黄白色。P 398 出土。4は弥生前期末の甕。口縁端部にはヘラ工具による浅い刻目を密に施す。外面及び内面中位以下は縦ミガキを施す。外面は二次加熱を受け、内面には炭化物（コゲ）が付着する。色は黄褐色。P 398 出土。5は胎土が精良な弥生前期甕蓋で、内外面にミガキを施す。内面には黒斑があり、色は橙褐色。P 365 出土。6は弥生中期前半の甕底部。外面には工具ナデのちナデ調整で、外面底部付近には工具痕が残る。外面全体にはススが付着し、色は暗灰茶色。P 362 出土。

7は端部にハケ工具による刻目を施した、弥生後期広口壺口縁部。色は黄褐色。P 379 出土。8は凸レンズ底の弥生後期終末の甕底部。外面には二次加熱痕があり、色は灰黄色。P 360 出土。9は古墳時代前期前半の在地系甕。球状の胴部にくの字状に屈曲する口縁部が付く。外面胴部下位は工具ナデで調整し、同じ場所に黒斑も認められる。色は黄褐色。P 376 出土。10は在地系碗状鉢。口縁端部は内上方につまみ出す。外面には黒斑があり、色は淡橙褐色。P 369 出土。11は器台上部。外面には二次加熱痕及びススが認められる。色は白灰黄色。P 361 出土。

12は古墳後期の土師器甕で、内面は頸部までヘラケズリを施す。外面肩部には黒斑があり、色は黄茶褐色。P 369 出土。13は先端が欠損した土師器甕の把手。把手周囲のハケは把手を貼り付ける際に付けたものである。外面には黒斑があり、色は淡橙褐色。P 365 出土。

第1面遺構面等出土土器（図版41、第72図14・15）

14は凸レンズ底の弥生後期終末の在地系甕。やや小型品で、胴部外面には黒斑あり。胎土は粗く、色は橙色。15は弥生後期の長脚・中実の脚付鉢。鉢内面のみ粗いミガキを施し、他



第72図 7区第1面ビット、遺構面等出土土器実測図（1～5は1/4、他は1/3）
はナデ調整を行う。外面には黒斑があり、色は灰黄色。

4 7区第2面の検出遺構と遺物（甕棺墓を除く）

(1) 概要

7区第2面は、当区北～中央やや南までの、南北約40m、東西約9.3m、面積約340㎡の範囲で遺構・遺物を検出したため、調査を行った。第2面に属す竪穴住居跡・土坑の中で、弥生時代後期後半～古墳時代前期のものは、本来は第1面で検出・調査できたはずの遺構・遺物である。

検出された遺構は、竪穴住居跡3棟・土坑19基・溝1条・ピット多数である。

出土遺物はパンケース12箱出土した。

(2) 竪穴住居跡

39号竪穴住居跡（第73図）

7区中央・北東寄りの東壁際に位置する。40号住居跡と近接するため、切り合いを持つ可能性があるが、出土土器では両住居跡とも古墳時代前期前半に属し、前後関係は不明である。住居北東は調査区外で、また第1面18号住居跡により住居北西を大きく壊されていることから、住居規模は現状で北西・南東240cm×北東・南西250cm以上の北東・南西に長い長方形住居で、住居竪穴部中央で深さ23cmを測る。住居南壁際には、高さ14cm、幅93cmを測る、地山削り出しのベッド状遺構を付設する。

竪穴部床面ではピット3基検出した。位置・深さからP1がやや小さいものの、屋内土坑的な役割を果たす可能性が考えられるが、調査範囲の制約から主柱穴・炉とも検出できなかった。

住居竪穴部埋土は灰黄褐色粘質土で、炭層が床面直上に広がる。

出土土器から古墳時代前期前半の住居跡と考えられる。

出土土器（図版42、第74図）1は長胴の在地系広口甕。胴部内外面のハケ原体は異なるものを使用する。外面肩部には黒斑があり、色は黄褐色。2～5は在地系甕。2は口縁端部を肥厚させたもの。外面には黒斑があり、色は黄褐色～黄褐色。3は外面全体に薄くススが付着し、色は外が暗茶褐色、内が灰黄褐色。4はやや張る胴部を持ち、胴部内面にはハケ目が残る。外面は強い二次加熱を受け、調整は不明。色は黄褐色。5は尖底気味と想定される甕で、外面胴部上・下ではハケ原体が異なる。外面には黒斑があり、色は灰黄褐色。6は在地系大型甕の胴部片。2条の三角突帯端部にはハケ工具による大きく深い刻目を施す。色は外が灰黒色、内が黄褐色。7は肥厚させた口縁端部を内側に折り曲げた在地系高坏の坏部。胎土は粗く、色は黄褐色。

40号竪穴住居跡（図版24、第73図）

7区中央北寄りに位置し、28号土坑、21～23号甕棺墓を切る。39号住居跡と近接するため、切り合う可能性があるが、出土土器では両住居跡とも古墳時代前期前半に属し、前後関係は不明である。上層に第1面21・22号住居跡が存在したため、当住居は大きく壊され、住居規模は現状で南北443cm×東西355cmの南北にやや長く、少し歪む長方形住居で、住居竪穴部中央で深さ18cmを測る。

住居北・西・南東壁際にはベッド状遺構を付設し、北側ベッドは高さ18cm、幅105cm、西側

ベッドは高さ14cm、幅64cm、23号甕棺墓の出土状況から西側ベッドに接続するベッドであったと考えられる(推定上端ラインを破線で示す)南側ベッドは高さ8cm、幅95cmで、いずれも地山削り出しベッドとなる。

竪穴部床面ではビット3基検出した。P1が主柱穴の可能性もあるが、竪穴部北西隅に位置するため、確定できない。また炉も確認できなかった。住居竪穴部埋土は灰黄褐色粘質土である。

出土土器から古墳時代前期前半の住居跡と考えられる。

出土土器(第75図1~6) 1は在地系甕頸部。内面は黒化し、色は黄褐色。2は在地系小型甕底部で、外面は二次加熱を受ける。色は灰黄色。P3出土。3は在地系高坏坏部。口縁部と底部との境には内外面ともナデによる鈍い段が付く。外面は縦ハケのち粗い横ミガキ、内面は横ハケのち暗文状の縦ミガキを施す。口縁部外面には黒斑があり、色は黄褐色。4は在地系短頸鉢口縁部。色は外が黄褐色、内が灰褐色。

5・6は混入品。5は口縁端部を折り曲げた弥生前期壺口縁部。外面には横ミガキを施し、色は黄褐色。6は弥生前期前半の亀ノ甲甕口縁部。口縁外端部を外につまみ出した口縁部には刻目はなく、口縁下の台形状突帯端部にはヘラ工具による刻目を密に施す。内面に二次加熱痕があり、色は橙褐色。

41号竪穴住居跡(図版24、第76図)

7区中央に位置する。第1面24・26・33・36・37号住居跡及び9号土坑が上層に存在したため大きく壊され、住居規模は北西・南東435cm×北東・南西610cm、最も残りの良い住居竪穴部北で深さ36cmを測る、北東・南西に長い長方形住居となる。住居北東・南西2方向にベッド状遺構を付設し、北側ベッドは高さ6cm、幅102cm、南側ベッドは高さ12cm、幅138cmを測り、いずれも地山削り出しによるもの。

竪穴部床面では、ビット7基を検出した。P1は灰黒色粘質土が埋土となる炉であり、住居長軸では位置からP5、住居短軸では形態・深さからP3が主柱穴の可能性はあるが、いずれも対となる主柱穴は検出できず、確定できない。なお、炉であるP1に切られるP7は、当住居跡下層遺構となる可能性があるが、出土土器(8・15)では同時期となるため、当住居跡に伴う遺構として報告する。

住居竪穴部埋土は黄茶褐色粘質土を基調とし、床直上に炭層が混じる土である。なお、P3から砥石(第92図23)が出土した。

出土土器及び切り合い関係から弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

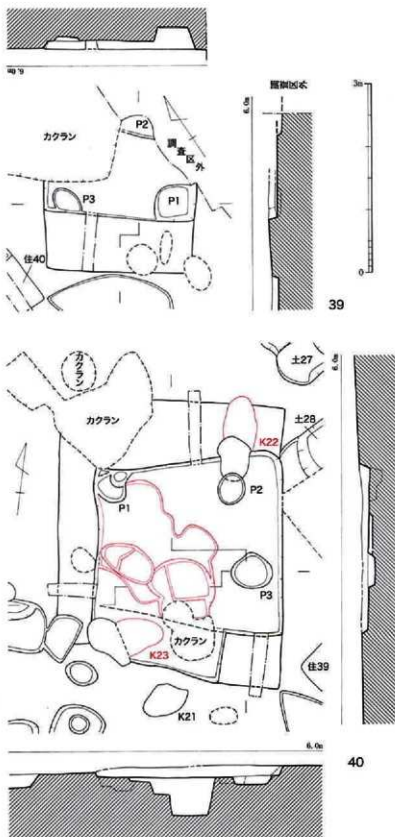
出土土器(第75図7~21) 7は口縁外端部にM字形突帯を貼り付けた、在地系壺口縁部。内面は縦ナデを行い、色は黄褐色。8は弥生後期前半の甕で、外面頸部に指押さえ痕が残る。胎土は精良で、色は黄褐色。9は器壁がやや厚いやや大型の甕で、色は黄褐色。

10は覆土出土の内面に朱が付着した、いわゆる「内面朱付着土器」の弥生後期後半在地系甕。内面全体には朱がヒビまで入り込み、また口縁部外端部には朱が点々と付着し、液状の朱が吹きこぼれた状況を示す。外面胴部下位にはススが付着するため、液状の朱を加熱した容器であることは確実である。外面には黒斑があり、色は淡灰黄色。胎土は石英系を主体とする。なお、本例は23号住居跡出土内面朱付着耳付鉢尾部把手片(第46図11)と胎土が非常に似ており、また当住居跡と23号住居跡の位置は近いことから、同一個体となる可能性がある。しかし、

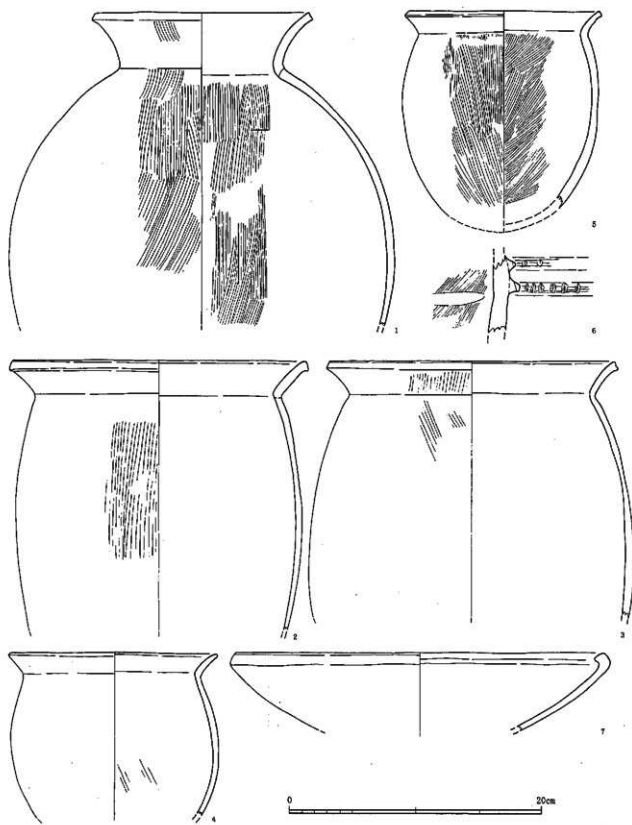
弥生後期の在地系土器の胎土は石英系を主体とし、焼成も黄褐色系と似た色・胎土のものが多く、同一個体とは断定できない。また、本例が辻垣長通遺跡出土広片口三耳鉢と類似した形態であったとすると、やや口縁部が長い点と、外面調整がミガキ調整ではなく、タタキのちハケ調整である点が非常に気にかかる（尾部把手の体部片は内外面ナデ調整）。そのため、今回は同一個体の可能性のみ指摘しておきたい。

11は口縁部～胴部片と丸底に近い底部片に分かれた同一個体の在地系甕。外面には黒斑・ススがあり、色は灰黄色。12～14は凸レンズ底の在地系甕底部。12の内面底部付近は黒化する。外面には黒斑があり、色は淡黄褐色～淡灰黄色。炉内出土。13の外面は強い二次加熱を受け、またススも付着する。胎土は粗く、色は黄褐色。覆土下層出土。14は内面に工具痕が残る。外面には黒斑があり、色は灰色。15は台付甕脚部。内外面は二次加熱痕が顕著で、色は黄橙色。炉内出土。16は在地系小型甕か鉢底部。小さな凸レンズ底から急角度で立ち上がる胴部を持ち、色は黄褐色。P7出土。

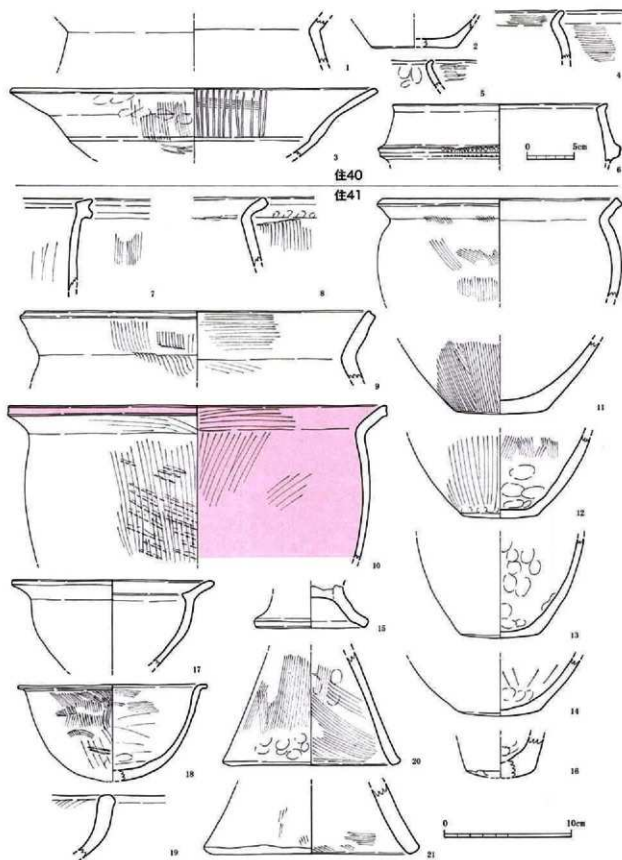
17は鋤先口縁の名残が認められる弥生後期前半の高坏坏部。色は黄褐色。覆土下層出



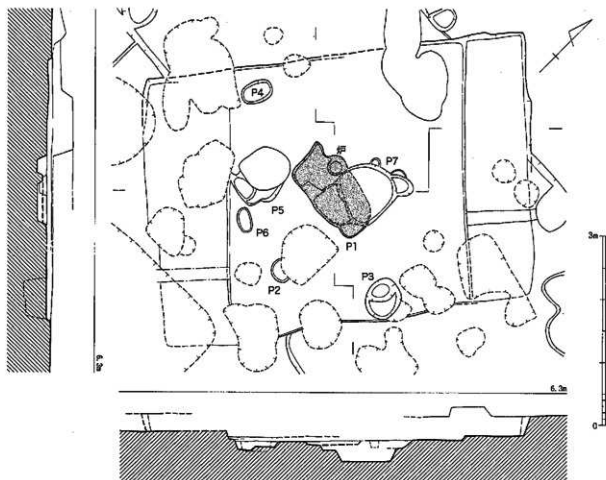
第73図 39・40号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第 74 图 39 号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第75図 40・41号竪穴住居跡出土土器実測図（5・6は1/4、他は1/3）



第76図 41号竪穴住居跡実測図 (1/60)

土。18は口縁端部を水平に折り曲げた在地系鉢。外面中位以下は工具ナデのちナデで、色は灰黄色。19は器壁が厚い在地系碗状鉢。内面はハケのちナデ調整。色は淡黄褐色～灰色。20・21は器台下部片。外面裾部は二次加熱を受け、内面上位は黒化する。色は黄褐色。21はやや器壁が厚いもので、内外面二次加熱を受ける。色は橙色。覆土下層出土。

(3) 土坑

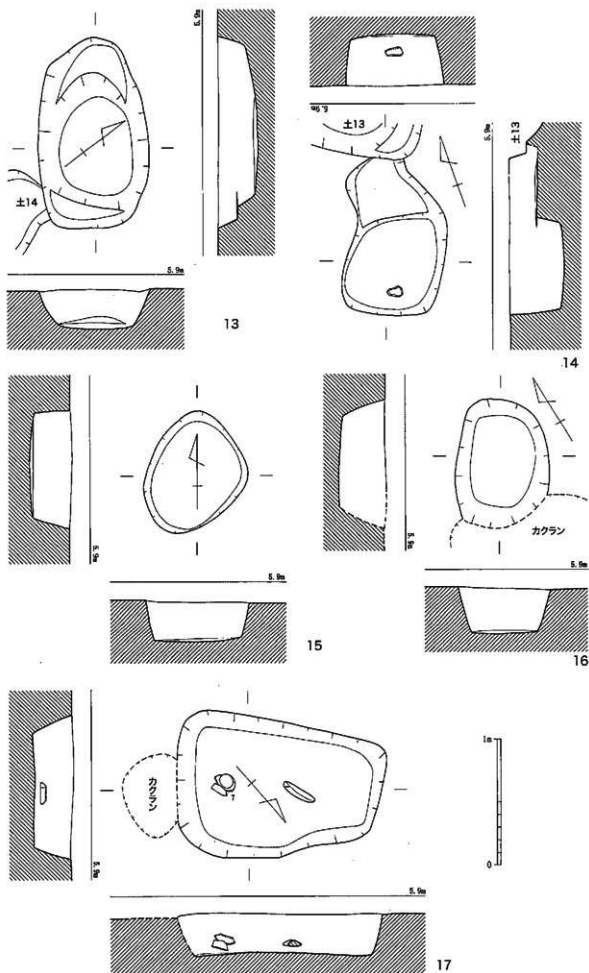
13号土坑 (図版24、第77図)

7区中央に位置し、14号土坑を切る。長軸150cm×短軸88cm、深さ31cmの長楕円形土坑である。土坑北西・南東にはテラスを持ち、土坑中央部の床面は床面中央に向かって緩やかに傾斜する。壁の傾斜はいずれもやや急である。埋土は黄茶褐色粘質土に炭が少量混じる土。

出土土器で図示できるものはないが、切り合い関係から弥生時代後期終末～古墳時代前期の土坑と考えられる。

14号土坑 (図版24、第77図)

7区中央に位置し、13号土坑に北先端を切られる。長軸123cm以上×短軸78cm、最も深い



第77図 13～17号土坑実測図 (1/30)

南側で深さ 43cm 測る、不整形土坑である。なお、土坑北壁は当土坑北側先端部の状況から、あまり離れた位置とはならない可能性が高い。土坑壁の傾斜はいずれも急となる。

埋土は上層が茶褐色粘質土、下層が青灰色粘質土に炭が混じる土となる。また、覆土から土製紡錘車（第 90 図 1）が出土した。

出土土器から弥生時代後期終末前後の土坑と考えられる。

出土土器（第 78 図 1～3） 1 は口縁端部を強く屈曲させた在地系広口壺口縁部。口縁端部にはハケ工具による斜め刻目を施す。色は橙褐色。2 は口縁端部にヘラ工具による刻目を施した在地系甕口縁部。外面にはススが付着。色は灰黄色。3 は畿内系小型高坏脚裾部。外→内の焼成前穿孔が 1 孔残る。色は褐色。

15 号土坑（図版 25、第 77 図）

7 区北中央のやや東寄りに位置する。南北 93cm × 東西 81cm、深さ 34cm の円形土坑で、埋土は黄茶褐色粘質土となる。土坑床面は中央に向かって緩やかに傾斜し、壁の傾斜はいずれもやや急である。

出土土器から弥生時代後期後半の土坑と考えられる。

出土土器（第 78 図 4・5） 4 は弥生後期終末の在地系甕底部。色は黄褐色。5 は弥生中期初頭鉢口縁部。色は橙褐色。

16 号土坑（図版 25、第 77 図）

7 区北中央に位置する。第 1 面 4 号土坑により南壁を壊されるが、下端は残存していたため、上端推定ラインを破線で示す。長軸 95 cm 以上 × 短軸 109 cm、深さ 37 cm を測る、長楕円形土坑である。床面はほぼ平らで、壁の傾斜はいずれもやや急である。埋土は上層が茶褐色粘質土、下層が青灰色粘質土となる。

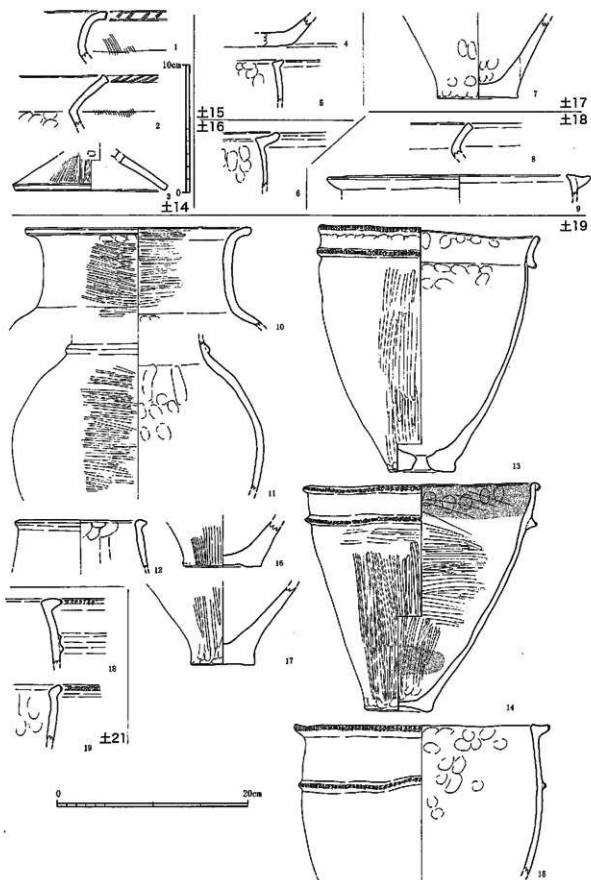
出土土器で図示できたものは、混入した弥生時代中期前半の甕であるが、埋土から弥生時代後期後半～古墳時代前期の土坑と考えられる。

出土土器（第 78 図 6） 6 は斜め上方に突出させた、やや長めの弥生中期前半の甕口縁部。外面にはススが付着し、色は橙褐色。混入品。

17 号土坑（図版 25、第 77 図）

7 区北中央に位置する。南東壁中央は第 1 面ビットにより壊されるが、長軸 163 cm × 南北 112 cm、最も深い土坑南側で深さ 34 cm を測る、長台形状の土坑である。床面は中央部が緩やかに盛り上がり、床面から少し浮いた状態で甕底部（7）及び片岩系の石（使用痕が認められないため、実測図は不掲載）が出土した。壁の傾斜はいずれの壁もやや急であり、埋土は上層が茶褐色粘質土、下層が暗青灰色粘質土に炭少量混じる土となる。なお、覆土から磨石（第 92 図 26）が出土した。

出土土器で図示できたのは、弥生時代中期前半の甕底部（7）のみであるが、図示できなかった土器及び埋土から弥生時代後期後半～古墳時代前期の土坑と考えられる。



第78図 14～19・21号土坑出土土器実測図（1～4・8は1/3、他は1/4）

出土土器（第78図7） 7は弥生中期前半甕底部で、外面には黒斑、内面には炭化物が確認できる。色は灰黄褐色。

18号土坑（図版26、第79図）

7区北中央に位置する。長軸150cm×短軸119cm、最も深い西側で深さ33cmを測り、南東隅が小さく突出する長楕円形土坑である。土坑東側に2段のテラスを持ち、壁の傾斜はいずれも急である。埋土は上層が黄茶褐色粘質土、下層が暗青灰色粘質土に炭少量混じる土となる。

出土土器及び埋土から弥生時代後期後半～古墳時代前期の土坑と考えられる。

出土土器（第78図8・9） 8は弥生後期の在地系小型甕口縁部。外面には二次加熱を受け、色は白黄褐色。9は三角口縁の弥生中期初頭甕口縁部。色は白黄褐色。

19号土坑（図版26、第79図）

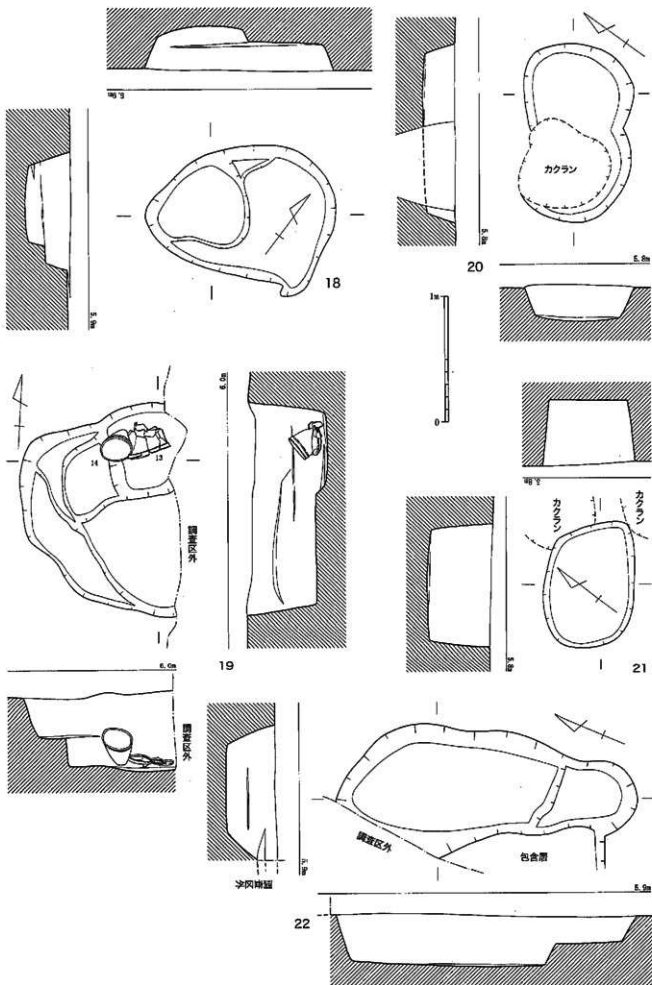
7区北中央の東壁際に位置し、先述したように16号住居跡調査時に一部掘削している。土坑東側半分程度が調査区外となるが、南北170cm×東西124cm以上、最も深い北東部で深さ57cmを測り、時期・形態から貯蔵穴の役割が想定される楕円形土坑である。北東部床面のほぼ直上で、完形の甕2点（13・14）が出土した。特に13は土圧でつぶれた状態で出土した。

埋土は3層に分かれ、上層が茶褐色粘質土に炭混じる土、中層が幅5cmほどの明茶褐色粘質土に炭が多く混じる土で、下層が黄青灰色粘質土に炭混じる土となる。また壁の傾斜はいずれも急である。

出土土器から、弥生時代前期末の土坑と考えられる。

出土土器（図版42、第78図10～17） 10・11は甕である。10はほぼ直立する頸部に口縁部が強く外反する。内外面はミガキを施し、色は灰黄白色。11は頸部に1条の台形突帯を巡らせたもので、胴部は肩が張らない長胴の器形となる珍しいもの。外面にはスス、内面には炭化物が確認でき、甕と同様の役割が考えられる。色は灰橙褐色。12は小型鉢口縁部。色は灰黄褐色を呈する。

13～15は弥生前期後半～末の亀ノ甲系譜の甕である。13はほぼ完形品のやや丸みを帯びた器形で、口径23.4cm、底径6.1cm、器高26.4cmを測る。弱く外反した口縁端部と粘土の継ぎ目を利用した口縁部下の突帯上にハケ工具による刻目を密に施す。外面突帯下は縦ミガキで、その他はナデで調整。底部中央には甕としての使用後に外→内に打ち欠いた穿孔が1孔認められる。外面全体にはスス・二次加熱痕と、内面には炭化物（コゲ）が確認できる。胎土は粗く、色は灰褐色。14はバケツ状の器形を呈する完形品で、口径25.1cm、底径7.2cm、器高24.1cmを測る。口縁端部と口縁下の三角突帯上にはヘラ工具による刻目を密に施すが、口縁下の突帯の刻目は浅いものと深いものがあり、一部押し引き法により刻まれる。外面は基本的に縦ミガキであり、突帯下のみ縦ミガキの横ミガキを施す。内面は胴部下位が縦ミガキ、胴部中位以上は横ミガキを施して成形する。なお、内面のトーンで示した範囲はコゲが残る範囲（図版42）で、外面の一部にも内容物がふきこぼれた痕跡が残る。外面には二次加熱痕・ススがあり、色は茶褐色。15は前期末の逆「L」字状の口縁外端部と口縁下の低く小さな突帯上にヘラ工具による浅い刻目を密に施し、内外面ともナデ調整で成形する。外面には黒斑・スス・二次加熱痕が確認でき、色は灰褐色～黄茶褐色。16は底部中央が上げ底の甕底部。外面は二次加熱



第 79 図 18～22 号土坑実測図 (1/30)

を受けており、色は外が灰橙褐色、内が灰色。17は厚底の甕底部で、外面には黒斑・二次加熱痕が認められる。色は灰黄褐色。

20号土坑（図版26）

7区北中央の南西寄りに位置する。第1面22号住居跡ピットにより、土坑南西部を大きく壊され、規模は長軸142cm×短軸88cm、深さ24cmを測る。床面は中央に向かって緩やかに傾斜し、壁の傾斜はいずれも比較的緩やかである。埋土は黄茶褐色砂質土に炭が混じる土。

出土土器で図示できるものはないが、切り合い関係及び埋土から弥生時代後期後半～古墳時代前期の土坑と考えられる。

21号土坑（図版27、第79図）

7区北中央の南西寄り位置する。第1面17号住居跡ピットにより北西部を一部壊されるが、長軸97cm×短軸72cm、深さ50cmを測る長楕円形土坑となる。床面はほぼ平らで、壁の傾斜はいずれも急に立ち上がる。埋土は上層が黄茶褐色粘質土に炭混じる土、下層が青灰色粘質土に炭が混じる土となる。

出土土器及び切り合い関係から、弥生時代前期末の土坑と考えられる。

出土土器（第78図18・19）18・19は甕口縁部。口縁端部にはヘラ工具による浅い刻目を密に施し、口縁下したM字状突帯を貼り付ける。色は外が暗こげ茶色、内が灰黄褐色。19は短く屈折する口縁端部にはヘラ工具による浅い刻目を密に施す。色は灰黄色。

22号土坑（図版27、第79図）

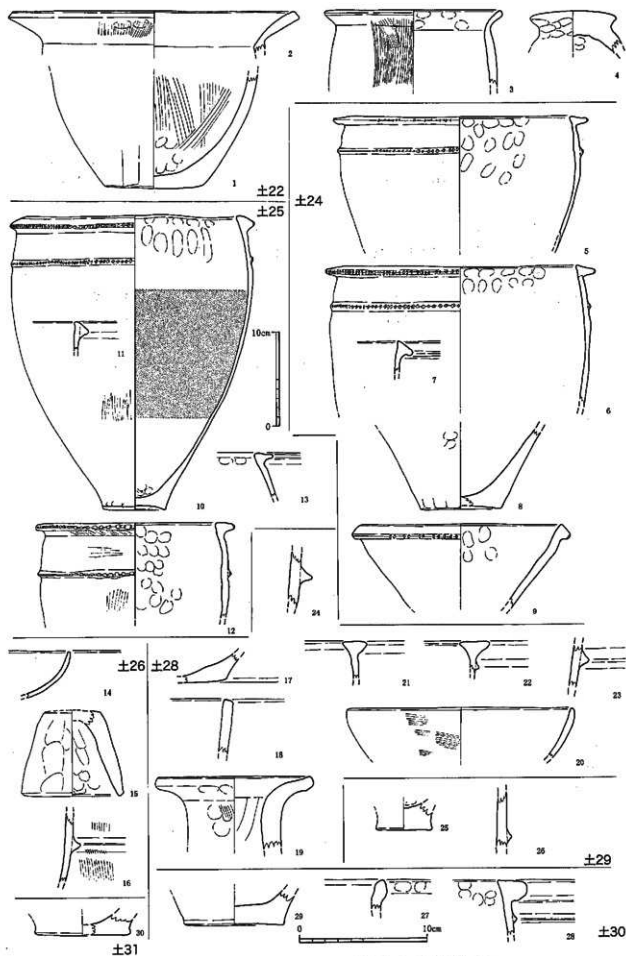
7区北中央・南西寄りの西壁際に位置する。土坑北西部は調査区外となるため全形は不明であるが、長軸238cm×短軸107cm以上、最も深い中央部で41cmを測る長楕円形土坑となる。土坑南側にはテラスを持ち、中央部の床面はほぼ平らで、壁の傾斜はいずれも比較的緩やかである。なお、土坑西側の深さ9cmほどの段は包含層と考えられ、当土坑より古いと想定されるため、当土坑西壁上半分は掘りすぎてしまっている。埋土は上層が暗黄褐色粘質土に炭混じる土、下層が青灰色粘質土に炭が混じる土となる。

出土土器から、弥生時代後期後半の土坑と考えられる。

出土土器（第80図1～4）1は凸レンズ底の弥生後期後半の甕底部。外面には黒斑があり、色は外が黄褐色、内が灰黒色。2は在地系甕口縁部。外面にはススが付着し、色は灰黄褐色。3も在地系小型甕口縁部。外面全体にはススが付着し、色は灰黄褐色。4は内外面指押さえ痕が顕著に残る、弥生後期の甕蓋。外面には黒斑及び二次加熱痕が確認でき、色は灰黄色。

23号土坑（図版27、第81図）

7区北中央の北寄りに位置し、24号土坑を切る。長軸115cm×短軸84cm、ピット状に一段深くなる中央部で深さ50cmを測る、楕円形土坑である。土坑西側にはテラスを持ち、壁の傾斜はいずれもやや急である。埋土は上層が茶褐色粘質土に炭少量混じる土、下層が暗青灰色粘質土に炭が少量混じる土である。



第80図 22・24～26・28～31号土坑出土土器実測図
 (1～4・14・15・17～20・27・29・30は1/3、他は1/4)

出土土器で図示できるものはないが、埋土・切り合い関係から弥生時代前期末の土坑と考えられる。

24号土坑（図版28、第81図）

7区北中央北寄りに位置し、23号土坑に切られる。土坑北西壁は第1面12号土坑により壊されるが、南北219cm×東西203cm、ピット状に一段深くなる最も深い北西部で深さ43cmを測る、南側2箇所が突出した、大型の不整形土坑である。

土坑北側の2箇所がピット状に一段深くなり、土坑西壁近くで床面から浮いた状態の甕（5・6）が出土した。埋土は黄茶褐色粘質土に炭が少量混じる土である。

出土土器から、弥生時代前期末の土坑と考えられる。

出土土器（第80図5～9） 5・6は弥生前期末の亀ノ甲系譜の甕で、口縁部は逆L字状に突出し、口縁外端部及び口縁下の低い三角突帯上にヘラ工具による浅い刻目を密に施す。いずれも内外面に二次加熱痕、外面のみスが確認される。5は内外面ナデ調整。色は淡橙褐色。6は内外面ナデ調整か。色は黄褐色。7は垂れ下がった三角口縁の弥生前期末甕口縁部。外面にはススが付着し、色は黄橙色。8はやや上げ底の甕底部。外面にはススが付着し、色は外が橙褐色、内が淡灰黄褐色。9は突帯を口縁端部に貼り付けた鉢。突帯上にはヘラ工具による刻目を施し、外面にはススが付着する。色は灰黄色。

25号土坑（図版28、第81図）

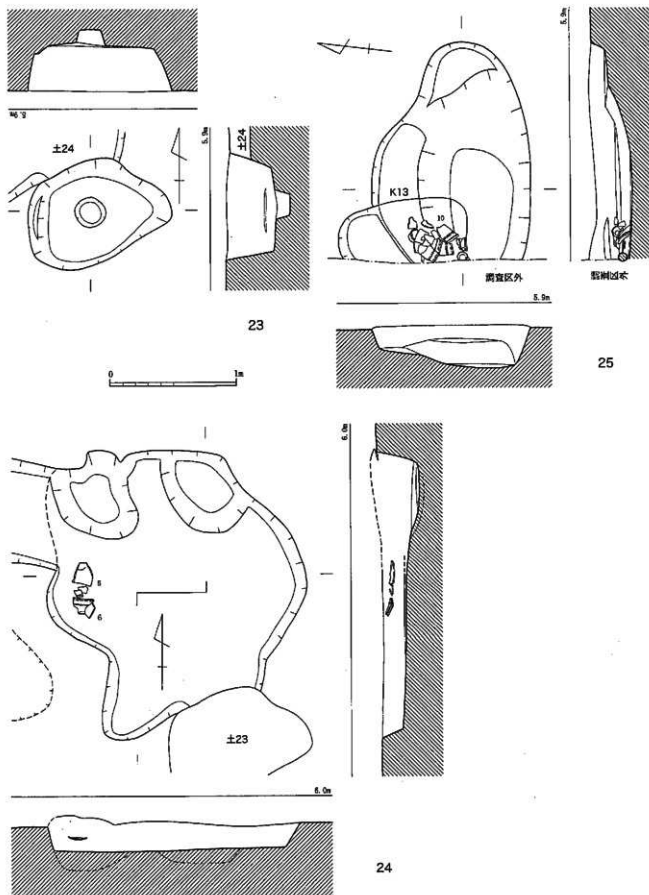
7区北中央の西壁際に位置し、13号甕棺墓に切られる。土坑西側は調査区外となるが、長軸173cm以上×短軸126cm、最も深い中央部で30cmを測る、東西に長い楕円形土坑である。

土坑北・東側にはテラスを持ち、床面は中央に向かって緩やかに傾斜し、壁の傾斜はいずれも比較的急である。調査区壁際の床面直上で完形の甕（10）が出土した。埋土は上層が暗黄茶褐色粘質土に炭多く混じる土、下層が黄青灰色粘質土に炭が多く混じる土となる。

覆土よりスクレイパー（第91図11）が出土した。

出土土器から、弥生時代前期末の土坑と考えられる。

出土土器（図版42、第80図10～13） 10～13は弥生前期末の甕で、10・12は亀ノ甲系譜甕である。10はやや上げ底で砲弾型器形の完形品で、口径25.8cm、底径6.5cm、器高31.1cmを測る。三角口縁外端部及び口縁下の低く小さな突帯上にヘラ工具による浅く密な刻目を施す。外面の一点破線より下は二次加熱痕、上はススが顕著に認められるため、縦ミガキの残りが悪い。内面のトーンの範囲は炭化物（コゲ）が付着した範囲を示す。色は灰黄褐色。11はやや垂れ下がった三角口縁で、外面には黒斑がある。胎土は粗く、色は灰黄白色。12は胴部が丸みを帯びない器形で、口縁外端部及び口縁下の小さく低い突帯上に丸い棒状工具による浅い刻目を入れる。外面口縁部～突帯間の調整は横ミガキ、突帯下は縦ミガキである。色は外が淡茶褐色、内が淡灰褐色。13は逆L字状口縁部で、外面には二次加熱痕及びススが確認できる。胎土は粗く、色は外が灰黄褐色、内が灰黄白色。



第 81 図 23 ～ 25 号土坑実測図 (1/30)

26号土坑（図版28、第82図）

7区北中央の東寄りに位置する。長軸196cm×短軸75cm、一段深くなる東側で深さ59cmを測る、東西に長い不整形土坑となる。床面は西側のテラス及び東側の深くなる箇所ともほぼ平らで、壁の傾斜はいずれも急である。埋土は上層が黄茶褐色粘質土、中層が茶褐色粘質土、下層が青灰色粘質土に炭が少量混じる土である。

出土土器から古墳時代前期の土坑と考えられる。

出土土器（第80図14～16）14は在地系碗状鉢口縁部。内外面は丁寧なナデ調整で、胎土は精良である。色は肌色。15はやや小型の支脚。胎土は精良で、色は黄土色。16は三角突帯を貼り付けた弥生中期前半壺棺片で、色は外が橙褐色、内が黒色。

27号土坑（図版29、第82図）

7区北中央の東寄りに位置する。17号壺棺墓と接するため切り合い関係を持つと考えられるが、当土坑は埋土から弥生時代後期後半～古墳時代前期の土坑と考えられるため、当土坑が切ると想定される。規模は長軸151cm×短軸120cm、一段深くなる北東側で深さ60cmを測る、不整形土坑である。床面は北・南・西側のテラス及び東側の一段ビット状に深くなる箇所ともほぼ平らで、壁の傾斜はいずれも急である。埋土は茶褐色粘質土に炭が少量混じる。

出土土器は発見できなかった。

28号土坑（図版29、第82図）

7区北中央の東寄りに位置し、40号住居跡に切られる。土坑南西側を40号住居跡、土坑南側を第1面18号住居跡により壊されたため、現状で長軸248cm以上×短軸76cm以上、一段深くなる土坑北東側で深さ57cmを測る、長楕円形土坑となる。床面は一段深くなる北東部は中央に向かって緩やかに傾斜し、南西のテラスはほぼ平らで、北・東壁の傾斜はいずれも急である。埋土は上層が茶褐色粘質土、下層が青灰色粘質土に炭が少量混じる上となる。

出土土器から弥生時代後期終末の土坑と考えられる。

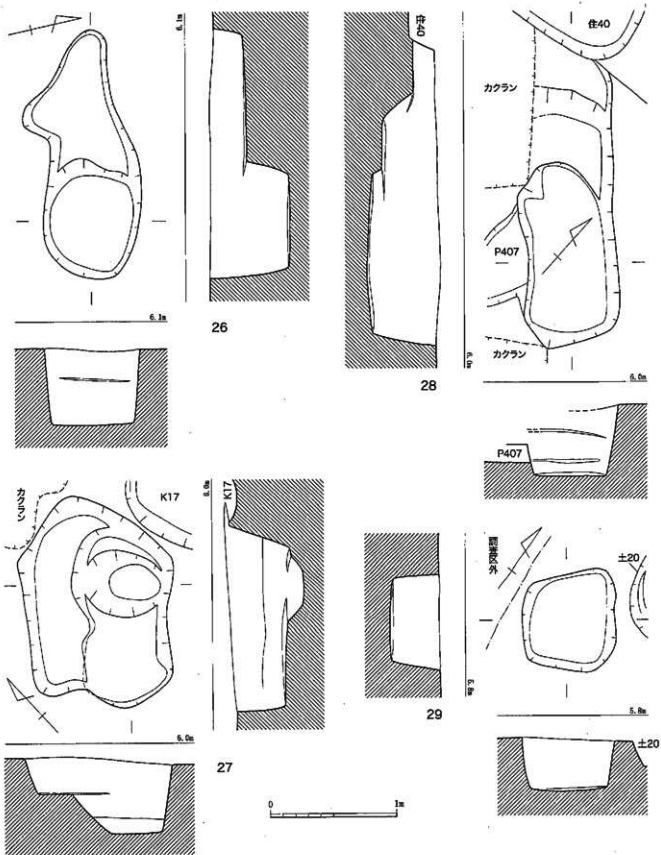
出土土器（第80図17～24）17は凸レンズ底の在地系壺底部。外面には黒斑があり、色は灰黄褐色。覆土下層出土。18は円筒形の器台上部片か。色は橙褐色。覆土下層出土。19は弥生後期器台上部片で、色は黄褐色。20は在地系碗状鉢口縁部。内面には黒斑があり、色は黄褐色。

21・22はT字形の弥生中期壺口縁部。21は内面に黒斑があり、色は黄白色。22は口縁直下に小さな三角突帯を貼り付ける。色は淡橙褐色。23・24は三角突帯を貼り付けた弥生中期前半の壺棺胴部片で、いずれも色は橙褐色。

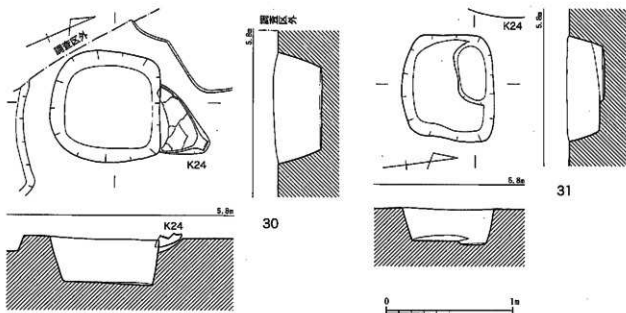
29号土坑（図版29、第82図）

7区北中央・南西の西壁際に位置し、30号土坑と東壁で近接するが、埋土からほぼ同時期の土坑の可能性が高く、前後関係は不明である。南北80cm×東西72cm、深さ42cmを測る、隅丸方形の土坑である。床面はほぼ平らで、壁の傾斜はいずれも急である。埋土は青灰色粘質土に炭が少量混じる。

出土土器で図示できたものは弥生中期の上器であるが、埋土から弥生時代後期後半～古墳時



第 82 図 26 ～ 29 号土坑実測図 (1/30)



第 83 図 30・31 号土坑実測図 (1/30)

代前期の土坑と考えられる。

出土土器 (第 80 図 25・26) 25 は厚底の弥生中期甕底部。外面にはスス、内面には炭化物 (コゲ) が付着する。割れ目まで二次加熱痕が認められることから、破片となったのちに二次加熱を受けた可能性が高い。色は淡黄褐色。26 は三角突帯を貼り付けた弥生中期前半甕破片。色は外が暗橙褐色、内が白黄色。

30 号土坑 (図版 30、第 83 図)

7 区中央の西壁際に位置し、24 号壺棺墓を切る。南北 87 cm×東西 88 cm、深さ 37 cm を測る、小型の隅丸方形の土坑である。床面はほぼ平らで、壁の傾斜はいずれもやや急である。埋土は暗灰黄褐色粘質土を呈する。

出土土器、切り合い関係及び埋土から弥生時代後期後半～古墳時代前期の土坑と考えられる。出土土器 (第 80 図 27～29) 27 は弥生後期在地系鉢口縁部か。色は灰黄褐色。28 は弥生中期初頭甕口縁部。玉縁状口縁部下に小さく低い三角突帯を貼り付ける。色は黄褐色～灰色。29 は弥生中期甕底部。外面には二次加熱痕・ススが認められ、色は淡黄褐色。

31 号土坑 (図版 30、第 83 図)

7 区中央の西壁際に位置する。南北 72 cm×東西 83 cm、一段深くなる北西部で深さ 27 cm を測る、小型の隅丸方形の土坑である。壁の傾斜はいずれもやや急である。埋土は黄茶褐色粘質土に炭が少量混じる。

出土土器及び埋土から弥生時代後期後半～古墳時代前期の土坑と考えられる。

出土土器 (第 80 図 30) 図示できたのは 1 点のみである。30 は弥生後期後半の小さな平底甕底部で、色は外が黄褐色、内が灰色。

(4) 溝

5号溝 (第84図)

7区北中央の東壁際に位置する東西溝で、東側は調査区外まで延びる。長さ285cm以上、溝西側で85cm、溝中央～東側で幅55cm前後を測る、ほぼ直線的な平面形態で、深さは西側で5cm、中央の一段下がる箇所で13cm、東端で19cmを測り、西→東方向へ傾斜する。埋土は暗黄茶褐色粘質土である。

出土土器から弥生時代後期終末～古墳時代前期前半の溝と考えられる。

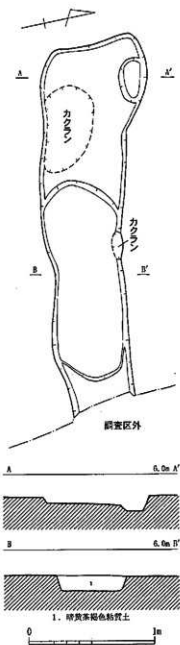
出土土器 (第85図1・2) 1は端部にハケ工具による刻目を施した在地系甕口縁部。色は淡灰黄色。2は器台上部片。外面には工具痕があり、色は灰黄色。

(5) ビット出土土器

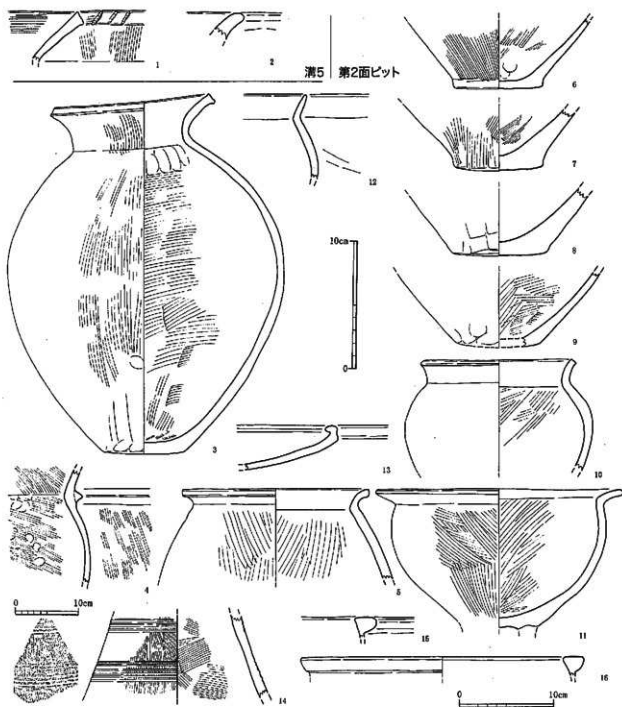
ビット出土土器 (第85図3～16)

3は80%ほど残存する、凸レンズ底の弥生後期終末の広口壺。復元口径12.5cm、器高28.5cmを測り、外面下位は工具ナデを施す。外面には黒斑があり、色は黄褐色。P 416出土。4は外面頸部に三角突帯を巡らせた在地系大型壺の頸部。色は橙褐色。P 402出土。5は口縁部を短く外反させた在地系甕。外面にはスガが付着し、色は白灰色。P 416出土。6～9は凸レンズ底の弥生後期壺底部。6はわずかに凸レンズ底になるもので、外面にはスス、内面には炭化物(コゲ)が付着する。色は灰黄色。P 418出土。7は小さな底部を持ち、外面底は工具ナデのちナデ調整。色は灰黄色。P 416出土。8は外面に工具痕が認められ、外面には二次加熱痕が残る。色は淡橙褐色。P 400出土。9はほぼ丸底の壺底部で、外面調整は工具ナデのちナデを行う。外面にはスガが付着し、色は淡黄褐色。10は球状の胴部から短くかつ弱く外反する口縁部を持つ、やや小型の在地系甕。色は白黄褐色。P 418出土。11は脚付鉢で、脚部との接合は付加法である。口縁部をくの字状に屈折させ、外面には黒斑がある。色は灰黄色で、P 416出土。12は畿内系小型丸底鉢で、外面下部は工具ナデのちナデを施す。内面には黒斑があり、色は黄褐色。P 414出土。

13は口縁端部を短く折り曲げた、在地系高坏口縁部。低平な坏部で、色は黄橙褐色。P 406出土。14は有明海沿岸型器台脚部片。上は4条以上、下は6条の上下2段のヘラ工具による沈線を巡らし、色は黄褐色。P 426出土。15・16は弥生中期甕口縁部。15は玉縁状口縁で、色は暗黄褐色～黄橙褐色。P 364出土。16は三角口縁で、色は橙褐色。P 478出土。



第84図 5号溝実測図 (1/30)



第85図 5号溝・7区第2面ビット出土土器実測図（4は1/6、15・16は1/4、他は1/3）

5 7区第3面の検出遺構と遺物（甕棺墓を除く）

(1) 概要

7区第3面は、当区北～中央やや南までの、南北約20m、東西約9.3m、面積約240㎡の範囲で遺構・遺物を検出したため、調査を行った。第3面で検出した土坑・ピットのほとんどが、弥生時代前期後半～末、34号土坑のみ弥生後期のものであり、本来はすべて第2面で検出・調査できたはずのものである。

検出された遺構は、土坑3基と少数のピットである。出土遺物はバンケース6箱出土した。



7区第3面調査状況（北から）

(2) 土坑

32号土坑（図版31、第86図）

7区北中央に位置する。東西310cm×南北305cm以上、最も深い中央部で深さ58cmを測る、大型のL字状を呈する大型の土坑である。土坑北・東・南には計4つのテラスを持ち、中央部の最も深い箇所を含めた、いずれの床面の傾斜もほぼ平らであり、壁の傾斜はいずれもやや急である。床面から20cmほど浮いた状態で土器群が出土した。

埋土は上層が灰茶褐色粘質土に炭多く混じる土で、狭い幅の炭層を挟み、下層が暗青灰色粘質土となる。覆土から土製紡錘車（第90図2）が出土した。

出土土器から弥生時代前期後半の土坑と考えられる。

出土土器（図版43、第87図） 1～6は甕。1は口縁部で、内外面とも丁寧なミガキを施す。色は黄土色。2は外面頸部にヘラ工具による沈線を1条巡らす。外面全体と内面下部はミガキを施す。色は黄褐色。3は外面に黒塗りを施した甕頸部～胴部。外面頸部にはヘラ工具による細い沈線を2条巡らし、その上にヘラ工具による鈍い段を作り出す。やや器壁が厚く、内外面ともミガキを施す。色は黄灰色。4は甕底部で、底部内外面は黒化する。外面の一部にはススが付着する。色は灰橙褐色。5・6は小型甕底部。5は外面一部のみミガキを行う。胎土は粗く、色は白黄灰色。6は外面底に黒斑が認められ、色は黄灰色。

7は甕蓋で、内面にはススが付着する。色は灰黄色。8～16は甕である。8はわずかにつまみ出した口縁外端部にヘラ工具による刻目を施し、外面にはスス・二次加熱痕が認められる。色は灰黄色。9～13は亀ノ甲系譜の甕。9・11～13はいずれも口縁部に貼り付けた突帯外端部及び口縁下の1条ないしは2条の貼り付け突帯上にヘラ工具による刻目を施す。9・10・13はバケツ型、11・12



32号土坑出土状況（西から）

は胴が張る器形で、口縁部突帯と口縁下突帯の間隔は短い。9は口縁部突帯を貼り付けた際の指押さえ痕及び粘土継ぎ目痕がよく残るもので、外面には黒斑・ススが認められる。色は黄褐色。10は口縁部を欠損するもので、口縁下の突帯の継ぎ目痕が認められる。外面には黒斑があり、色は茶色。11は細くかつ長めの突帯を貼り付けたもので、外面下位にはススが付着する。内面には指押さえ痕がよく残る。色は灰褐色。12は全体的にやや歪んだ完形に近い甕で、口径23cm、やや上げ底の底部径は7.8cm、器高は34.1cmを測る。突帯下の胴部外面及び内面胴部中位は縦ミガキ、内面口縁部付近は工具ナデのちナデを施す。突帯の刻目はやや先の丸い工具により施されたもの。内面のトーンの範囲は炭化物（コゲ）の付着が顕著なもので、外面底部には二次加熱痕、外面全体にはスス、口縁部外面には黒斑が認められる。色は灰黄色。13は復元口径は48.5cmを測る大型甕。口縁部下の突帯は2条で、かなり密に施す。外面には黒斑があり、色は白黄褐色。14は底部の厚さが薄い甕底部で、外面はヘラナデで調整する。外面にはススが付着し、内面には黒斑が認められる。色は灰褐色。15は甕としての使用後、底部のほぼ中央に外→内方向の穿孔を行った甕底部。内面一部には炭化物（コゲ）が付着し、色は茶褐色。16は外面に二次加熱痕及びスス、内面には炭化物（コゲ）が認められる甕底部。色は灰黄褐色。

17は把手付小型甕か鉢の把手。断面では口縁部貼り付け突帯に見えるため、素口縁外側の何箇所かに把手を貼り付けた器形になる可能性が高い。把手外側下部は二次加熱を受け、内面は黒化する。色が橙灰色。18は碗状の鉢口縁部外側に三角突帯を貼り付けたもの、外面全体は横ミガキを行った後に黒塗りを施す。色は灰黄褐色。

33号土坑（図版31、第86図）

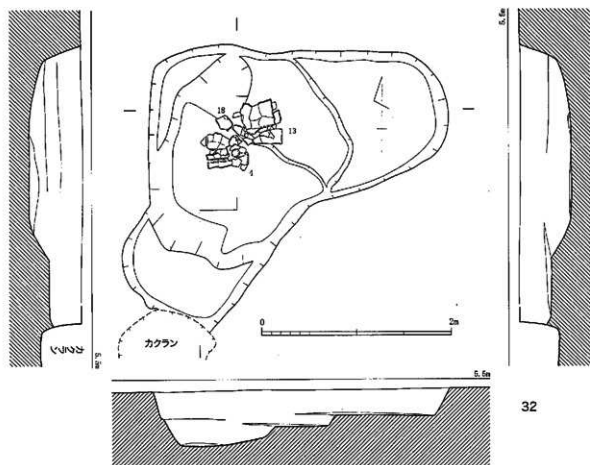
7区北中央に位置する。長軸266cm×短軸140cm、深さ41cmの長楕円形土坑である。床面は中央に向かって緩やかに傾斜し、壁の傾斜はいずれも急である。土坑床面から15cm前後浮いた状態で土器群が出土した。埋土は上層が暗黄茶褐色粘質土に炭多く混じる上、下層がやや明るい暗黄茶褐色粘質土に炭多く混じる土となる。

覆土から土製紡錘車1点（第90図1）、スクレイパー2点（第91図12・13）、磨石（第92図27）が出土した。

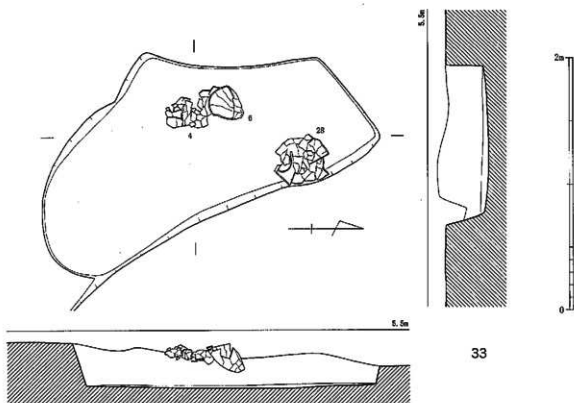
出土土器から弥生時代前期末の土坑と考えられる。

出土土器（図版43、第88図1～10） 1・2は壺。1は2/3程残存したやや厚底の壺で、復元口径16cm、底径6.8cm、器高23.3cmを測る。やや肥厚する口縁部は粘土継ぎ目により作り出した頸部との段を持ち、頸部にはヘラ工具による浅い1条の沈線を巡らす。外面底部付近には縦ミガキが残り、内面口縁部は横ミガキが残る。外面中位以下には黒斑があり、胎土には細粒を多く含み、色は灰黄褐色。2は頸部に三角突帯を巡らせた壺で、突帯端部にはヘラ工具による浅い刻目を施す。35.4cmを測る最大胴部径は下がつた位置にある。底部は上げ底。外面胴部は縦ミガキの横ミガキを基本とし、胴部内面は中位以上が横ミガキ、中位以下はナデか。外面全体には黒斑・スス・二次加熱痕が、内面全体には炭化物（コゲ）が付着するため、甕的な使用法が想定される。色は外が灰茶褐色、内が灰黄褐色。

3～10は甕。3・4は口縁外端部に突帯を貼り付け、5～8は口縁外端部に加え、口縁下

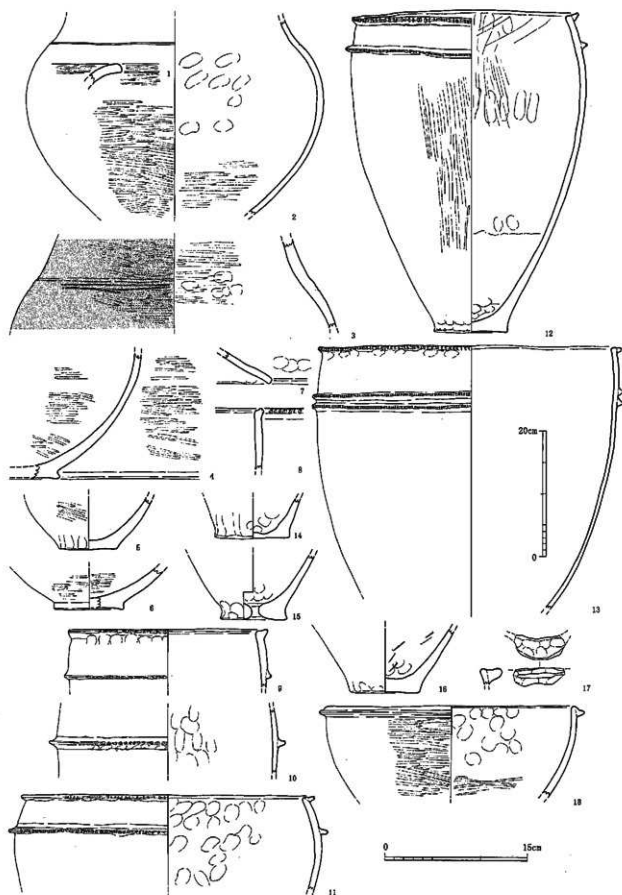


32

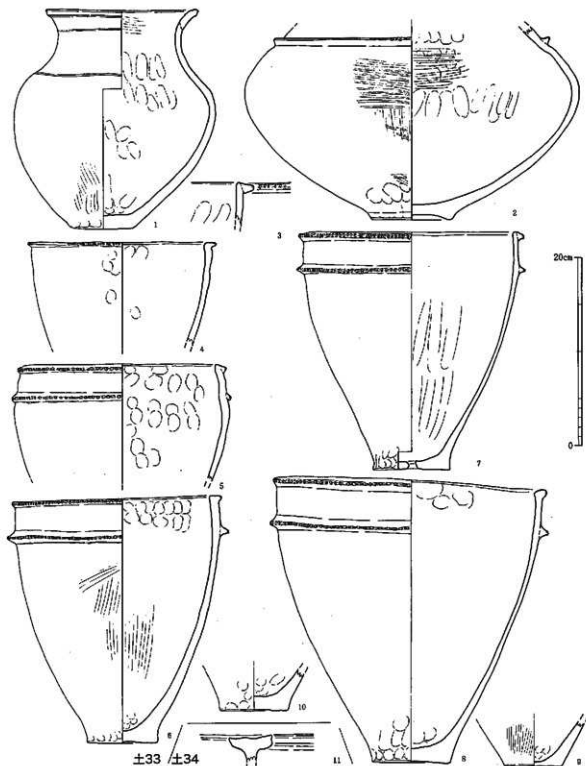


33

第 86 図 32・33 号土坑実測図 (1/40・1/30)

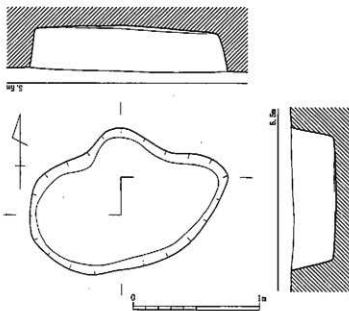


第 87 図 32 号土坑出土土器実測図 (13 は 1/6、他は 1/4)



第88図 33・34号土坑出土土器実測図 (1/4)

にも三角突帯を貼り付け、その上には工具による刻目を施す。3～8は外面にスス、6・8は外面下位に二次加熱痕、6は外面に黒斑、5～8は内面に炭化物（コゲ）が認められる。3はやや外に突出した口縁部で、刻目は浅い。色は黄橙灰色。4は外への突出が弱い口縁部で、丸い棒状工具による刻目である。色は灰黄褐色。5は胴部がやや丸みを帯びた器形で、色は黄橙



第 89 図 34 号土坑実測図 (1/30)

34 号土坑 (図版 31、第 89 図)

7 区北中央に位置する。長軸 148cm×短軸 113cm、深さ 34cm の北側が小さく突出する長楕円形土坑である。床面は中央に向かって緩やかに傾斜し、壁の傾斜はいずれも急である。埋土は暗灰色粘質土に炭混じる。

埋土から弥生時代後期の土坑となる可能性が高い。

出土土器 (第 88 図 11) 図示できたのは、混入した 11 の 1 点のみ。11 は T 字形の弥生中期中葉甕棺口縁部。色は橙褐色を呈する。

図番	数量	品名	出土層位	図版番号	形状	長さ	幅	高さ	口縁径	底径	口縁厚	底厚	口縁部	底面	備考	数量
13	1	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	40
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	41
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	42
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	43
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	44
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	45
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	46
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	47
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	48
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	49
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	50
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	51
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	52
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	53
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	54
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	55
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	56
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	57
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	58
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	59
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	60
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	61
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	62
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	63
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	64
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	65
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	66
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	67
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	68
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	69
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	70
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	71
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	72
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	73
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	74
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	75
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	76
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	77
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	78
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	79
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	80
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	81
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	82
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	83
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	84
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	85
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	86
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	87
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	88
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	89
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	90
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	91
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	92
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	93
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	94
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	95
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	96
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	97
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	98
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	99
13	2	22	8	図1	土器	40	2	10	2	8	10	10	図1	弥生土器	土	100

第 6 表 『藤の尾垣添遺跡 I』 掲載土器類一覧 (1)

[illegible]

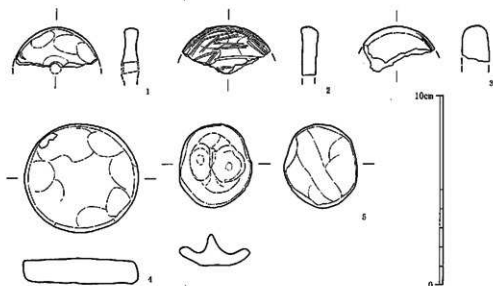
第6表 『藤の屋垣添遺跡Ⅰ』掲載土器類一覧(2)

[illegible]

第6表 『藤の尾垣添遺跡Ⅰ』 掲載土器類一覧(3)

[illegible]

第6表 『藤の尾垣添遺跡Ⅰ』掲載土器類一覽(4)



第90図 土製品実測図 (1/2)

6 7区出土土製品、石器・石製品 (第7表の一覧表も参照のこと)

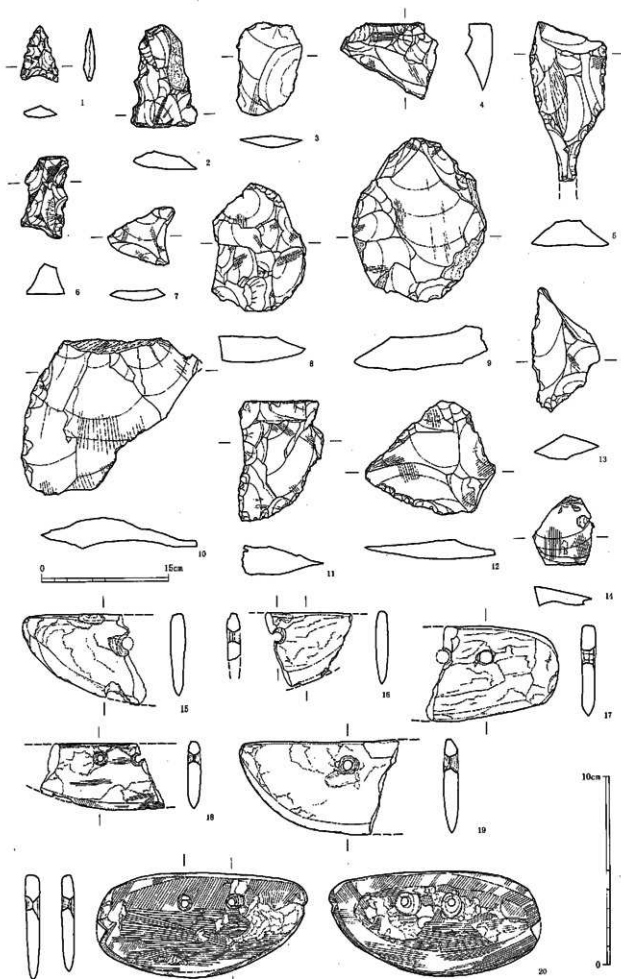
土製品 (図版44、第90図)

1～3は土製紡錘車である。1は約1/2残存し、径4.8cmほどに復元できる。生乾き時に中央に穿孔したため、孔周囲が盛り上がる。焼成はやや甘く、色は黄褐色～灰褐色。14号土坑出土。2は約1/3残存。割れ口から孔が近いことが考えられ、径5.8cmほどに復元できる。内外面とも中央部がやや窪む断面形態で、器表にはミガキを施し、色は暗灰色。32号土坑出土。3は約1/3残存し、やや厚さがあるもの。内外面にはミガキを施したと考えられるが、磨滅のため一部しか確認できない。色は黄褐色。33号土坑出土。

4はほぼ完形の土製円盤。内外面はナデ調整を行い、指押さえ痕も残る。胎土はやや粗く、また焼成も甘い。色は黒色。第1面遺構面出土。5は25号住居跡カマド燃焼部内出土の土製模造鏡。平面は長楕円形、断面は凸面鏡、紐部分は上方につまみ上げることで作り上げる。すべてナデによる成形で、色は黄褐色。

石器・石製品 (図版44、第91・92図)

1は打製石鏃で、やや鈍い先端から直線的な側縁を持ち、基部は浅く丸みを持って収まる。側縁の押圧剥離は粗く、基部の一方は欠ける。千板岩製の20号住居跡覆土出土。2～14はスクレイパーとして使用した剥片石器で、2～13はサヌカイト製、14は黒曜石製。2は縦長剥片素材で、両側縁の一部に微細剥離及び右側縁には擦痕を有し、一部自然面が残る。13号住居跡覆土出土。3も薄手の剥片で、両側縁に微細剥離を有する。打面には自然面が残る。17号住居跡覆土下層出土。4はやや厚手幅広い剥片で、右側縁には微細剥離を有する。打面には自然面が残る。17号住居跡覆土下層出土。5は縦長剥片素材で、両側縁前面には刃つづしを行い、上面に微細剥離を有する。17号住居跡覆土出土。6は断面が台形状の厚手の剥片で、右側縁には顕著な微細剥離を有し、2面には自然面が残る。22号住居跡覆土下層出土。7は



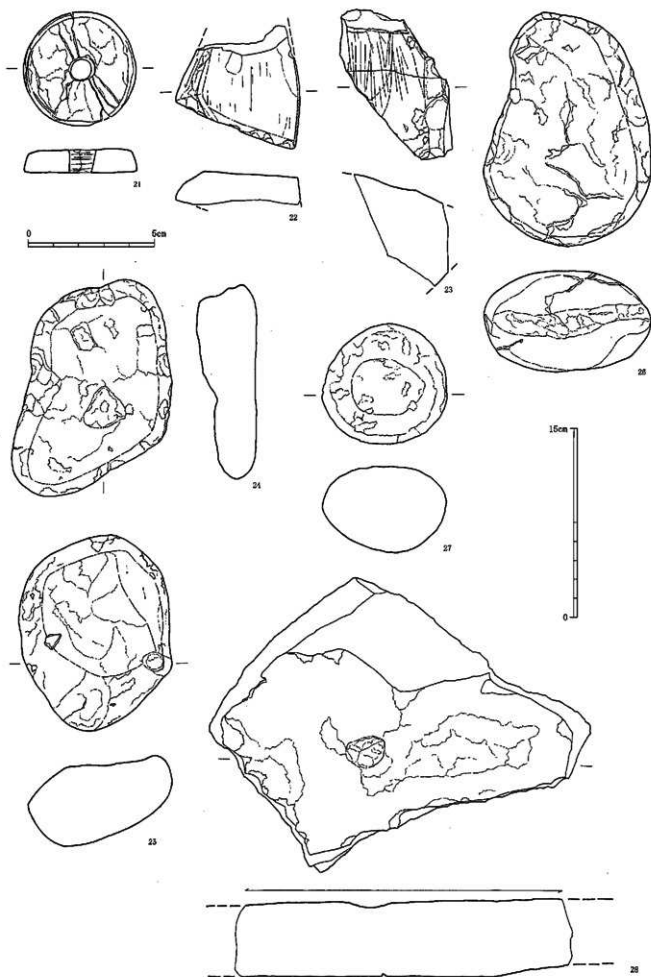
第91図 石器・石製品実測図(1) (1~14は2/3、15~20は1/2)

三角形を呈する薄手の剥片で、2つの左側縁には微細剥離を有する。22号住居跡P3出土。8は幅広厚手の不整形剥片で、右側縁と左側縁の一部に微細剥離を有し、上面には自然面が残る。3号土坑出土。9はやや大型の幅広厚手の不整形剥片。左側縁には刃部調整を行い、微細剥離も有する。右側縁には自然面が残る、12号土坑出土。10は大型で幅広の縦長剥片素材で、左側縁は刃部調整を行い、右側縁には微細剥離を有する。上面には自然面が残る。12号土坑出土。11は上・左側縁に自然面が残る剥片で、右側縁には刃部調整・微細剥離が認められる。25号土坑出土。12・13は33号土坑出土。12は三角形を呈する不整形剥片で、ほぼ全側縁は刃部調整を行い、また両側縁の一部には微細剥離を有する。13は縦長剥片素材で、左側縁には微細剥離を有し、下端部の一部は欠損する。14は下面に顕著な微細剥離を有する剥片で、左側縁には自然面が残る。第1遺構西出土。

15～20は磨製石包丁で、石材は15～17・19は片岩、18は輝緑凝灰岩、20は粘板岩である。15は1/2弱残存し、裏面体部の窪みは粗加工段階のもの。片岩という石材の性質上研磨痕は残っていない。刃部ほぼ全面に細かい刃こぼれ、表面の紐孔には穿孔時のワレが認められる。13号住居跡出土。16は15号住居跡出土で、右紐孔には穿孔の際に付いた段があり、紐孔と背部とを結ぶ方向がわずかに磨滅する。背部及び表面体部は粗加工のままで、表面刃部及び裏面全面は丁寧な研磨を施す。17の右刃部は丸く再加工したもので、片刃に仕上げる。表面体部及び裏表刃部及び背部は丁寧な研磨を行うが、裏面体部は粗加工のままである。刃部全体には細かい刃こぼれが認められる。表面右紐孔周囲には穿孔時のワレがあり、表面の孔間を結ぶ方向がわずかに磨滅する。27号住居跡床下掘り込み出土。18は両面及び刃部・背部に最終調整として横方向の丁寧な研磨を施したもので、刃部には刃こぼれ及び擦痕が認められる。両紐孔内には回転痕がよく残り、両紐孔右側には弱い磨滅痕が認められる。輝緑凝灰岩の質はあまり良くない。28号住居跡床下掘り込み出土。19は1/2ほど残存するもので、29号住居跡出土。両面体部及び背部は研磨で表面の凹凸をほぼなくすが、裏面の一部は粗加工のままであり、刃部は特に丁寧な研磨を施している。刃部は細かい刃こぼれが顕著で、左側縁先端は使用時に欠損したものである。紐周囲には穿孔時のワレがあり、回転痕もわずかに残る。また孔間を結ぶ方向が弱く磨滅する。20は7区第1面遺構面出土のほぼ完形品。材質は灰色の粘板岩で、長さ11.1cm、幅5.6cm、厚さ0.65cm、重さ61.3cmを測る。両面体部及び背部には粗い研磨を、両刃部は丁寧な研磨を施すが、両面体部には粗加工段階の凹凸も残る。両刃部には細かい刃こぼれ、擦痕があり、右側縁の袢りは使用時の大きな刃こぼれを再研磨したものと考えられる。また左側縁の欠損部は古いもの。裏面の左紐孔上には穿孔時に付いた穿孔工具痕があり、両紐孔内には穿孔時の段がよく残る。表面の両紐孔右側及び裏面の両紐孔と背部との結ぶ方向に磨滅痕が認められる。

21は26号住居跡覆土下層出土の断面が台形状を呈する、石製紡錘車。片岩製のため、剥離及びヒビが顕著に認められ、研磨痕も残っていない。孔内にはわずかに回転痕が残る。径4.4cm、厚さ0.9cm、孔径0.8cm、重さ30.5gを測る。

22・23は粘板岩製の砥石。22は仕上げ用砥石で、ほとんど欠損し、粗加工のままである裏面以外の3面を使用し、表面には研磨キズが認められる。25号住居跡覆土下層出土。23は中砥石で、ほとんど欠損するが、2面の研磨面が確認できる。表面は研磨のため中央部が窪み、



第92図 石器・石製品実測図(2)(21は2/3、他は1/2)

研磨キズも多く認められる。41号住居跡P3出土。

24・25は凝灰岩製の凹石。24は確実な使用痕は表面中央部のみで、矢印で示した右側面の一部と左側面は使用による窪みや磨滅痕がある可能性がある。15号住居跡覆土出土。25は上側面中央と表面右下の突出部に擦痕、表面全体には弱い敲打痕が認められる。29号住居跡出土。

26・27は凝灰岩製の磨石。26は17号土坑出土。石杵状を呈し、下側縁全体に磨滅痕が認められる。27は円形を呈し、表面の1面のみ磨滅痕が認められる。33号土坑出土。

28は凝灰岩製の台石で、表面中央は敲打により窪み、表面左側は磨った痕跡が顕著である。裏面の一部にもわずかに磨った痕跡があるが、何かの上に置いて使用した際についた痕跡である可能性が高い。28号住居跡出土。

発掘番号	種類	区画	出土地点	長・幅 (cm)	高さ (cm)	厚さ (cm)	内径(mm)	重量(g)	形状	材質	備考
第90図1	土製紡車	7	2 14号土坑		(4.4)	0.8	(0.4)	(8.0)	1/2	土製	平面円は乾形
第90図2	土製紡車	7	3 32号土坑		(4.6)	0.9		(10.1)	1/3	土製	内外面ミガキ磨
第90図3	土製紡車	7	3 33号土坑		(3.7)	(1.5)		(9.8)	1/3	土製	内外面ミガキ磨
第90図4	土製凹石	7	1 第1遺構面	6	5.6	1.3		63.5	完形	土製	
第90図5	土製凹石	7	1 25号住居跡	4.5	3.9	1.6		15.7	完形	土製	
第91図1	打製石	7	1 20号住居跡	2.1	1.7	0.45		1.1	ほぼ完形	千枚岩	一筋欠損
第91図2	スクリュー	7	1 13号住居跡	4.0	2.5	1.0		8.4		黒曜石	
第91図3	スクリュー	7	1 17号住居跡覆土下層	3.6		0.4		4.0		サヌカイト	
第91図4	スクリュー	7	1 17号住居跡覆土下層	3.8	3.0	1.0		9.2		サヌカイト	
第91図5	スクリュー	7	1 17号住居跡覆土下層	(5.3)	3.0	1.0		15.4		サヌカイト	
第91図6	スクリュー	7	1 22号住居跡覆土下層	3.2	1.7	1.2		6.8		黒曜石	
第91図7	スクリュー	7	1 22号住居跡P3	2.7	2.3	0.4		2.0		サヌカイト	
第91図8	スクリュー	7	1 3号土坑	5.1	3.4	1.0		20.9		サヌカイト	
第91図9	スクリュー	7	1 12号土坑	6.5	5.2	1.3		54.8		サヌカイト	
第91図10	スクリュー	7	1 12号土坑	8.1	6.3	1.1		33.5		サヌカイト	
第91図11	スクリュー	7	2 25号土坑	4.7	3.1	1.1		17.9		サヌカイト	
第91図12	スクリュー	7	3 33号土坑	5.0	4.5	0.7		14.0		サヌカイト	
第91図13	スクリュー	7	3 33号土坑	4.9	2.6	0.9		9.1		サヌカイト	
第91図14	スクリュー	7	1 第1遺構表面	2.7	2.3	1.0		4.9		黒曜石	
第91図15	磨製石包丁	7	1 12号住居跡	(6.5)	(4.8)	0.7	0.6	(26.8)	1/2	片岩	
第91図16	磨製石包丁	7	1 15号住居跡	(4.6)	(3.9)	0.65	0.5	(16.1)		片岩	
第91図17	磨製石包丁	7	1 27号住居跡床下掘り込み	(7.0)	5.1	0.7	0.6	(35.7)	1/2強	片岩	刃部を再加工
第91図18	磨製石包丁	7	1 28号住居跡床下掘り込み	(6.5)	3.6	0.7	0.3	(22.5)	1/3	輝綠凝灰岩	
第91図19	磨製石包丁	7	1 29号住居跡	(8.5)	5	0.7	0.55	(44.5)	1/2	片岩	
第91図20	磨製石包丁	7	1 第1遺構面	11.1	5.5	0.65	0.4	61.3	ほぼ完形	千枚岩	刃部を再加工
第92図21	石製紡車	7	1 25号住居跡覆土下層		4.4	0.95	0.8	30.5	ほぼ完形	片岩	孔内に凹輪痕
第92図22	砥石	7	1 25号住居跡覆土下層	(6.4)	(5.5)	1.8		(71.8)		粘板岩	仕上げ用砥石
第92図23	砥石	7	2 41号住居跡P3	(6.8)	(5)	(4.7)		(192.8)		粘板岩	中砥石
第92図24	凹石	7	1 15号住居跡	11.5	8	3.2		375.0	完形	凝灰岩	表面中央部に凹み
第92図25	凹石	7	1 29号住居跡	10.3	7.7	4.3		440.0	完形	凝灰岩	表面全体に敲打痕・突出部に擦痕あり
第92図26	磨石	7	2 17号土坑	12.3	9	5.3		782.0	完形	凝灰岩	下側縁全面に磨滅痕
第92図27	磨石	7	3 33号土坑	6.6	5.3	4.6		221.0	完形	凝灰岩	1面のみ磨滅
第92図28	台石	7	1 27号住居跡	(20.1)	(14.2)	4.0		(1851.1)		凝灰岩	敲打痕・磨面

第7表 7区出土土製品・石器・石製品一覧表

[illegible]

第8表 『藤の尾垣添遺跡Ⅰ』掲載石器・石製品・青銅製品一覧

7 小結

当遺跡で検出した主な遺構は、弥生時代前期後半～末の土坑、弥生時代中期の甕棺墓群、弥生時代後期後半～古墳時代中期前半の竪穴住居跡・掘立柱建物跡及び土坑、古墳時代後期後半～末の竪穴住居跡・土坑などである。しかし、新幹線用地帯内という限られた調査範囲のため、今回の調査では集落構造の一部が判明しにとどまる。本書で報告した当遺跡 6・7 区を含めた山門地区における集落様相の整理は、今後刊行予定である「藤の尾垣添遺跡Ⅲ」の中で取り扱う予定であるが、ここでは当遺跡 7 区の集落の変遷についてまとめると小結としたい。

7区では弥生時代前期前半の突帯文系壺口縁部が少数出土しており、当遺跡の形成は前期前半まで遡ると考えられる。当区に遺構が形成されるのは前期後半からで、まず7区北中央に32号土坑が作られる。32号土坑では内湾化した亀ノ甲タイプの甕と板付Ⅱb式行灯期の壺が共存する。前期末には32号土坑を囲むように19・21・23～25号土坑が作られ、これらの土坑出土甕はいずれも前段階と比べ口縁部突帯の三角口縁化、肥大化、長大化の方向性が認められる。中でも19号土坑出土の甕(13)は口縁部を外反させ、また(14)は胴が張らないバケツ型の器形に口縁端部を折り曲げ、突帯にするなどの様々な土器形態のバリエーションが存在する。

当遺跡8区において当該期の土坑群、小川柳ノ内遺跡において当該期の竪穴住居跡や土坑などの集落跡を検出するなど、現在当該期の資料の蓄積が進んでいるため、今後当地域の前期土器の様相を整理を試みたい。

弥生時代中期になると集落の形成が中断し、墓地が形成される。この墓地については、先述したとおり藤の尾垣添遺跡Ⅲの中で報告する予定であるが、8区から7区の北東・南西方向に墓壇墓が列埋蔵されているようである。

集落が再び形成されるのは弥生時代後期後半からで、当区中央の地形が最も高いと想定される付近にまず 36・37・41 号住居跡が作られる。これらの住居跡主軸はやや東に傾くが、これは第 9 図のとおり北東・南西方向に貫流する旧河川に沿ったもので、再び集落の形成を中断する古墳時代中期前半まで角度の大小はあるにせよ、旧河川に沿った方位を基調とした集落展開が確認できる。ベッド状造構は 41 号住居跡では北・南の 2 方向、37 号住居跡では西の 1 方向のみと居長軸両側に付設されており、続く後期終末の 13・18 号住居跡も長軸側となるが、

古墳時代前期になると住居3方の壁に付設するものや21号住居跡のように短軸側～隅に付設されるものなど、様々な住居構造が出現する。また古墳時代前期前半には谷部である当区南を除いた全域に堅穴住居跡が作られ、21号住居跡のような大型堅穴住居跡や23・40号住居跡のような住居軸を方位に合わせたものなど、集落構造にも変化が現れているようである。

住居数は古墳時代前期前半が最も多いが、前期後半になると15・17号住居跡のみと住居数が減少する。住居構造自体は前期前半と比べ住居短軸側の幅がやや広くなる傾向以外はほぼ同じである。当区古墳時代前期住居跡の特徴は炉を挟んだ2本柱の主柱穴が住居長軸に存在するものと短軸側に存在するものがあること、また主柱穴以外の複数の柱穴で屋根を支えていることである。古墳時代中期に12・20・29号住居跡が作られるのを最後に、再び集落の形成が中断する。中でも、29号住居跡出土土器は布留式系譜の甕や壺などがまとまって出土しており、中期前半の良好な資料となる。この中期前半における集落形成中断の要因としては、当遺跡北に位置する前方後円墳である藤ノ尾車塚古墳の築造の影響などが想定される。

古墳時代後期後半には7区中央～南の地形的に高い部分に19・26・27号住居跡、やや遅れて後期末には25・30号住居跡が作られる。これらは25～27号住居跡のようにいずれも西壁中央にカマドを付設した4本柱の住居跡と考えられる。この中で、27号住居跡カマド支脚は当遺跡周辺で普遍的に見られる土製であるが、石製の26号住居跡カマド支脚は山門遺跡群及び藤の尾垣添遺跡では初例である。旧河川対岸の山門北池遺跡では7世紀中葉まで集落の形成が確認できるが、当遺跡は古墳時代後期末で集落の形成が終了する。

最後に当区出土遺物の中で最も注目されるのは、内面朱付着土器である。23・24・36・41号住居跡から各1片出土し、23号住居跡は特殊な朱容器である耳付鉢の尾部把手片、また24・41号住居跡出土例は弥生後葉在地系甕、36号住居跡出土例は在地系碗状鉢を利用したものである。いずれも内面器壁のヒビまで液状の朱が入り込み、外面にはススが付着する。藤の尾垣添遺跡1次調査13号住居跡ではL字状石杵が出土しており（p16下写真）、また1次調査5・12・13号住居跡から内面朱付着土器（いずれも後期後半の甕）が8点出土しているようである（報告書には石杵とともに不掲載、本田1997）。本田氏は弥生後期中頃以前は主に墳墓から出土していた朱が、後期中頃以降は集落域からも出土し、このほとんどは1遺跡数点しか各住居跡から小破片で分散して出土することから、意図的に分配されたのではないかと指摘する。本例もまさに分散した出土状況であり、内面朱付着土器が弥生後期以降盛行する、呪術的な性格が想定される特異な朱の調合作業に関わると見なされること（大久保1998）からこの特異な出土状況が裏付けられるであろう。また、23号住居跡出土耳付鉢の尾部把手片は南関東から九州有明海沿岸の各地から断片的に報告されており、当遺跡周辺では行橋市辻垣長通遺跡のほか、佐賀県川吉吉原遺跡で後期終末の甕を半裁し整形した例が確認されている。

当遺跡の今後の報告の中で、さらに注意して内面朱付着土器の発見に努め、また『藤の尾垣添遺跡Ⅲ』の中で、分析をふくめた検討を行いたい。

参考文献

本田光子 1997 「内面朱付着土器」『庄内式土器研究Ⅶ』 庄内式土器研究会

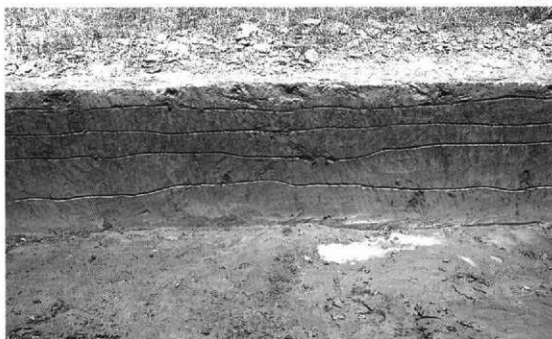
大久保徹也 1998 「弥生時代の内面朱付着土器」『考古学ジャーナル』№438 11月号 ニューサイエンス社

図 版

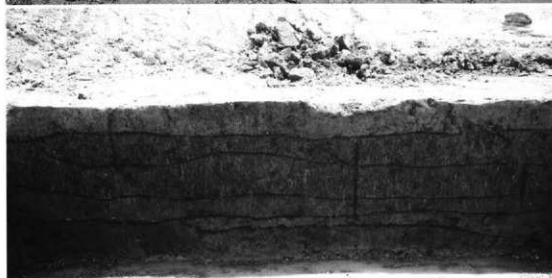


藤ノ尾車塚古墳（西から）

1 6区 東壁土層
(西から)



2 7区南 東壁土層
(西から)



3 7区中央 東壁土層
(西から)





1 6区全景
(南から)



2 6区全景
(上から、右が北)

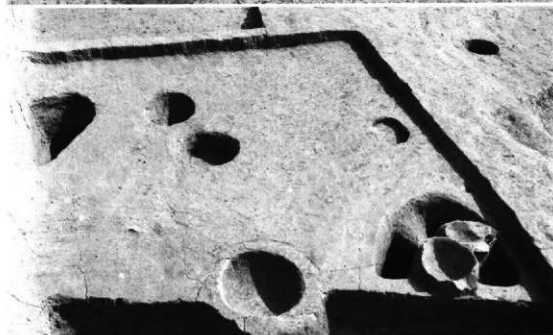


3 6区1号竪穴住居跡
(東から)

1 6区1号竪穴住居跡
カマド (東から)

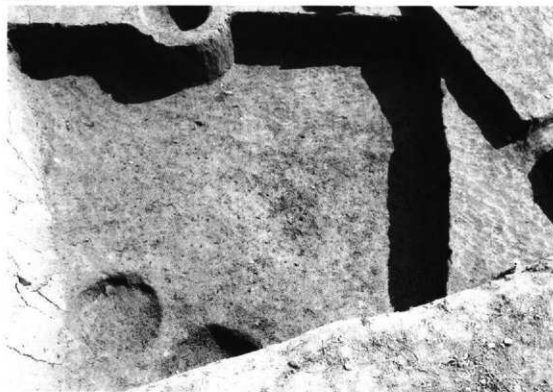


2 6区2号竪穴住居跡
(西から)



3 6区3号竪穴住居跡
(北から)





1 6区4号竪穴住居跡
(西から)



2 6区5号竪穴住居跡
(北東から)



3 6区6号竪穴住居跡
(南西から)

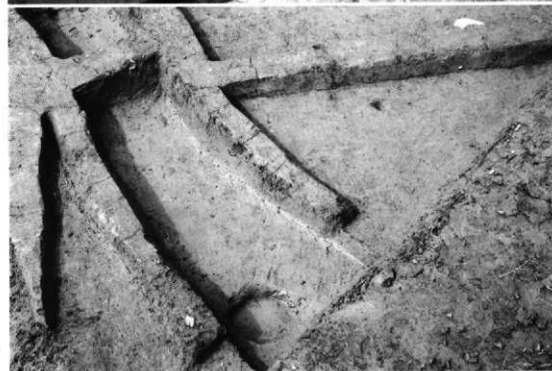
1 6区8号竪穴住居跡
(南から)



2 6区9号竪穴住居跡
(南東から)

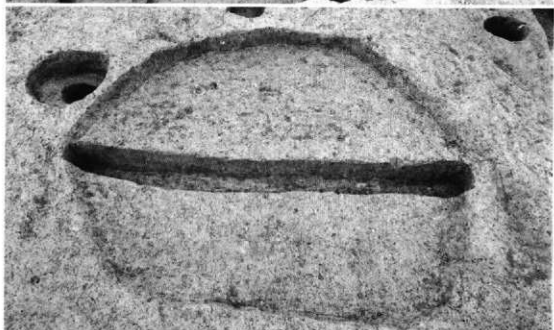


3 6区10号竪穴住居跡
(南東から)





1 6区11号竪穴住居跡、
1号溝（東から）



2 6区1号土坑
（東から）

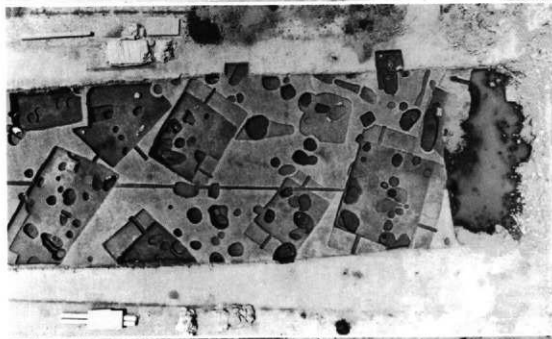


3 6区2号土坑
（北西から）

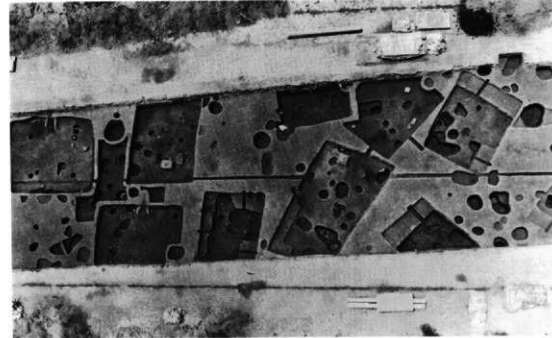
1 7区第1面全景
(上から、右が北)



2 7区第1面北全景
(上から、右が北)

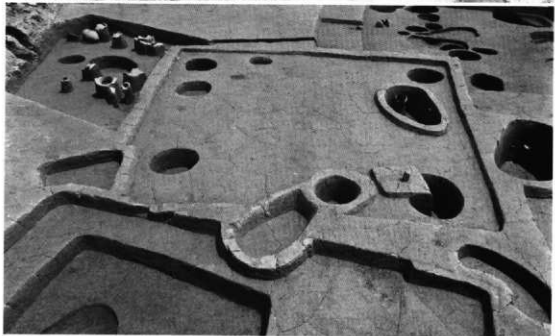


3 7区第1面中央全景
(上から、右が北)





1 7区第1面南全景
(上から、右が北)



2 7区12号竪穴住居跡
(西から)



3 7区13号竪穴住居跡
(北西から)

1 7区13号竪穴住居跡
出土状況（北西から）



2 7区13号竪穴住居跡
屋内土坑上層出土状況
（南東から）



3 7区14号竪穴住居跡
（北西から）





1 7区15号竪穴住居跡
(北から)

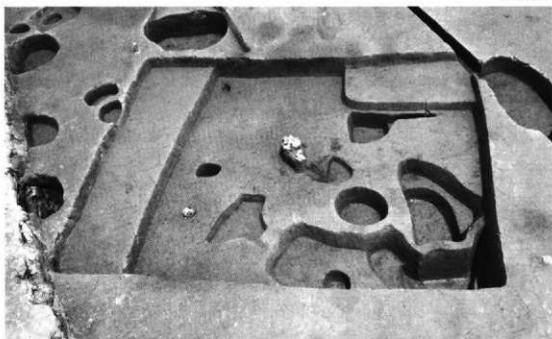


2 7区15号竪穴住居跡
出土状況(北北東から)



3 7区16号竪穴住居跡
(南西から)

1 7区17号竪穴住居跡
(南西から)

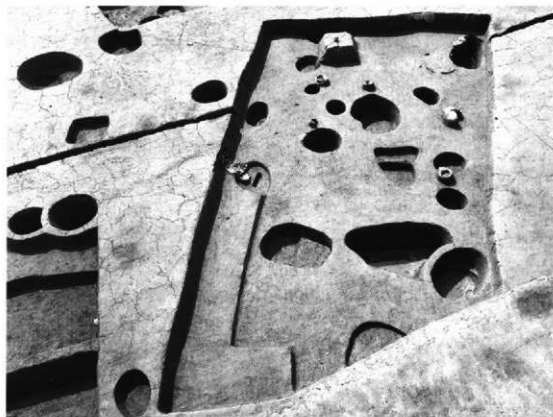


2 7区18号竪穴住居跡
(南東から)



3 7区19号竪穴住居跡
(北から)





1 7区21号竪穴住居跡
(南東から)



2 7区22号竪穴住居跡
(南西から)



3 7区22号竪穴住居跡
出土状況 (1) (北から)

1 7区22号竪穴住居跡
出土状況(2)(北西から)



2 7区23号竪穴住居跡
(東から)



3 7区24号竪穴住居跡
(西から)





1 7区25号竪穴住居跡
(東から)

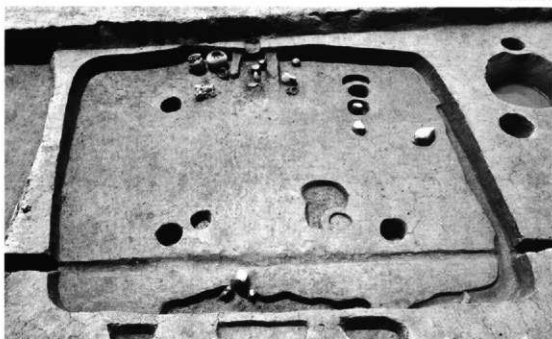


2 7区25号竪穴住居跡
カマド (東から)



3 7区25号竪穴住居跡
出土状況 (北東から)

1 7区26号竪穴住居跡
(東から)



2 7区26号竪穴住居跡
カマド (東から)



3 7区26号竪穴住居跡
カマド (北東から)





1 7区27号竪穴住居跡
(東から)



2 7区27号竪穴住居跡
カマド (1) (東から)



3 7区27号竪穴住居跡
カマド (2) (北東から)

1 7区28～30号
竪穴住居跡（南から）



2 7区29号竪穴住居跡
（北西から）



3 7区29号竪穴住居跡
出土状況（東から）





1 7区29・30号竪穴
住居跡 (南東から)



2 7区31・32号竪穴
住居跡、11号土坑
(東から)



3 7区34・35号竪穴
住居跡 (南東から)



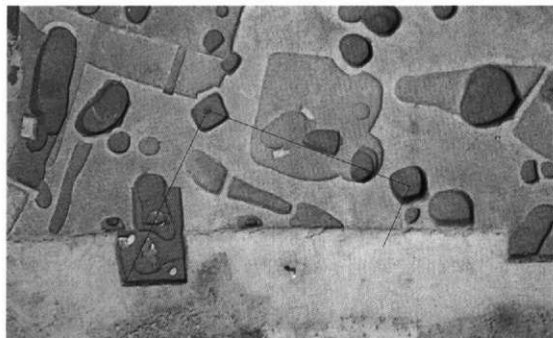
1 7区36号竪穴住居跡
(北東から)



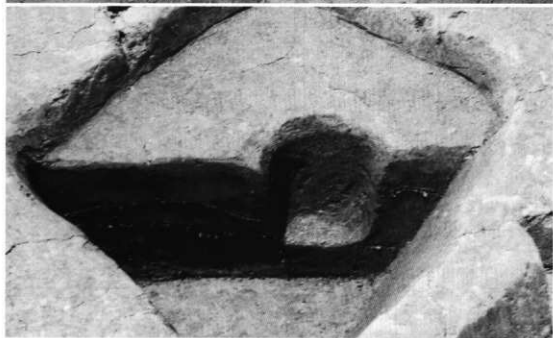
2 7区37号竪穴住居跡
(南から)



3 7区38号竪穴住居跡
(南西から)



1 7区1号掘立柱建物跡
(上から、左が北)



2 7区1号掘立柱建物跡
P1土層 (東南東から)



3 7区1号掘立柱建物跡
P2土層 (東南東から)

1 7区3号土坑
(南西から)



2 7区4号土坑
(南西から)

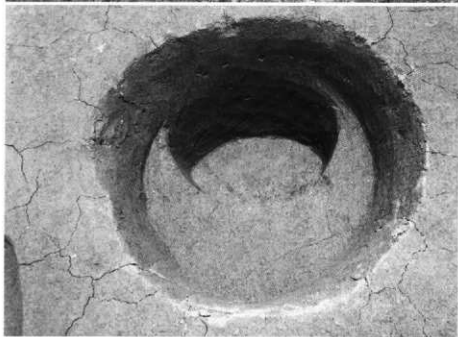


3 7区5号土坑
(東から)





1 7区7号土坑
(東から)



2 7区8号土坑
(北から)



3 7区9号土坑
(西から)

1 7区10号土坑
(北西から)



2 7区11号土坑
(東から)



3 7区調査状況 (1)

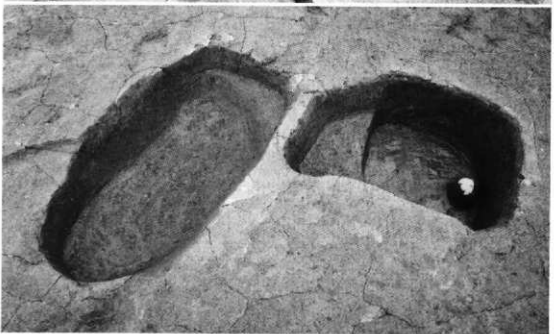




1 7区40号竪穴住居跡
(東から)



2 7区41号竪穴住居跡
(南南西から)

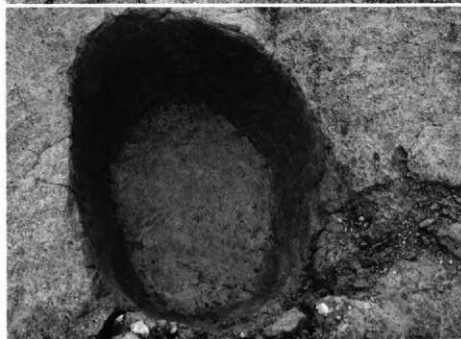


3 7区13・14号土坑
(西から)

1 7区15号土坑
(南から)



2 7区16号土坑
(南西から)



3 7区17号土坑
(南東から)





1 7区18号土坑
(北東から)



2 7区19号土坑
(北から)



3 7区20号土坑
(北東から)

1 7区21号土坑
(北東から)



2 7区22号土坑
(北から)



3 7区23号土坑
(東から)





1 7区24号土坑
(北から)



2 7区25号土坑
(北から)



3 7区26号土坑
(西から)

1 7区27号土坑
(北から)



2 7区28号土坑
(北東から)



3 7区29号土坑
(北東から)





1 7区30号土坑
(東から)

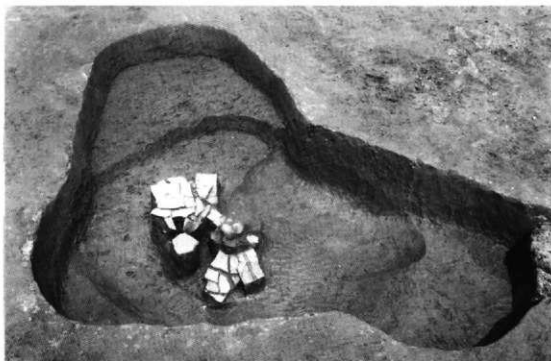


2 7区31号土坑
(南から)



3 7区第3面全景
(北から)

1 7区32号土坑
(西から)



2 7区33号土坑
(北東から)



3 7区34号土坑
(北から)





第13图-1



第13图-2



第13图-10



第13图-11



第13图-12



第13图-13



第13图-14



第16图-1



第18图-4



第18图-5



第18図-9



第19図-20



第18図-11



第23図-16



第19図-14



第24図-1



第24図-2

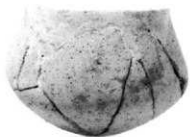


第24図-3



第24図-4

6区 8号竪穴住居跡 (2)、ピット出土土器、石器・石製品



第27圖-3



第29圖-5



第28圖-1



第29圖-6



第28圖-2



第29圖-14



第28圖-4



第29圖-16



第30图-17



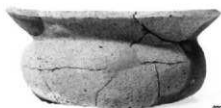
第34图-23



第30图-18



第36图-10



第36图-15



第31图-7



第36图-17



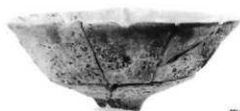
第34图-5



第36图-18



第37图-6



第39图-2



第42图-23



第39图-7



第42图-29



第39图-10



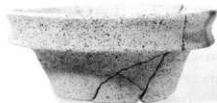
第42图-30



第39图-12



第42图-33



第41图-1



第43图-1



第43図-9



第43図-10



第45図-8



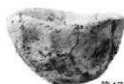
第47図-14



第47図-20



第47図-21



第47図-29



第47図-30



第47図-33



第49図



第50図-1



第50図-2



第50図-7



第50図-9



第51図-23



第50図-13



第51図-25



第51図-14



第51図-26



第51図-15



住27カマド内出土礫



第54図-6



第55图-3



第56图-12



第55图-4



第56图-13



第55图-5



第56图-14



第55图-10



第56图-15



第56图-11



第57图-19



第57圖-20



第57圖-22



第58圖-27



第58圖-29



第58圖-30



第59圖-1



第59圖-3



第59圖-5



第59圖-6



第59図-21



第62図-14



第64図-9



第64図-10



第68図-18



第71図-3



第71図-4



第72図-4



第72図-9



第72図-14



第72圖-15



第74圖-2



第74圖-4



第78圖-14



第74圖-5



第78圖-15



第78圖-13



第80圖-10

7区 第1面遺構面等 (2)、39号豎穴住居跡、19・25号土坑出土土器



第85図-3



第88図-2



第85図-4



第88図-6



第87図-12



第88図-7



第87図-13



第88図-1



第88図-8

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ふじのおかきぞえいせき いち							
書名	藤の尾垣添遺跡 1							
副書名	福岡県みやま市瀬高町山門所在遺跡の調査 一集落編 1 -							
巻次	1							
シリーズ名	九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第9集							
編著者名	大庭 孝夫・宮地 聡一郎							
編集機関	福岡県教育委員会（教育庁総務部文化財保護課）							
所在地	〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園 7-7 TEL 092-651-1111 FAX 092-643-3878 E-mail kbunkazai@pref.fukuoka.lg.jp							
発刊年月日	西暦 2008年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
藤の尾垣添遺跡 ふじのおかきぞえいせき	福岡県みやま市 瀬高町山門字垣 の添・北ノ前・峯 ノ元・北瀬	みやま市	40229	33°9'12"	130°29'39"	2003.12.3 } 2004.6.18	1,420㎡	九州新幹線 鹿児島ルート建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
藤の尾垣添遺跡	集落・ 墓地	弥生時代	竪穴住居跡41棟、 掘立柱建物跡1棟、 土坑33基、溝5条 (本書所収遺構数)	弥生土器	土製品	・弥生時代前期後半～末の土坑群出土土器は、当地域の土器様相を把握する上で重要。 ・弥生時代中期後半～古墳時代中期前半の竪穴住居跡出土土器は、当地域の在来系・外來系土器組成を考える上で重要。 ・6区より破鏡が出土。 ・7区より内面朱付着土器及び朱付着耳付鉢が出土し、1次調査で出土した石片の存在も含めて、当遺跡における採掘・加工活動の存在が明らかになった。		
		古墳時代		須恵器	石製品			
要約	当遺跡は標高6m前後の北東から南西方向に蛇行する旧河川が形成した自然堤防上に位置する。まず、弥生時代前期後半～末に集落が形成されるが、中期になると集落が断絶し、中期初頭～後半にかけて総数200基を超える大規模な甕棺墓群が形成される。弥生時代後期後半になると再び集落を形成しはじめ、古墳時代中期前半まで当地域の拠点的な集落となるが、古墳時代中期後半以降は再び集落が断絶する。古墳時代後期後半～末に小規模な集落が形成されるが、集落断絶後の7世紀以降は耕地として利用され、現在に至ると考えられる。							

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
JH	2114107
登録年度	登録番号
19	2

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第9集

藤の尾垣添遺跡 I

平成20年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園 7-7

印刷 秀英社印刷株式会社

〒818-0052 福岡県筑紫野市武蔵3-2-6

TEL 092-923-3154 FAX 092-923-7784